長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第６集

一般国道497号伊万里松浦道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅰ

八幡山城跡

２０１１

長崎県教育委員会

八幡山城跡全景（北から）

東部傾斜地　切岸１（北から）

序

本書は，西九州自動車道「伊万里松浦道路」建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の通巻第Ⅰ分冊として，平成20年度から平成21年度にかけて実施した八幡山城跡の発掘調査成果を収録したものです。

八幡山城跡では，平成20年度に実施した範囲確認調査において，切岸・土塁などの中世城郭遺構が確認されるとともに，中近世陶磁器片や黒曜石片が出土しました。平成21年度は中世城郭遺構の解明を主眼として緊急発掘調査を実施し，尾根筋を取り囲むように展開する切岸遺構や貿易陶磁器片・国産陶磁器片・旧石器時代の黒曜石製品等の遺物を確認しました。

埋蔵文化財は，遠い祖先の暮らしぶりを伝えてくれる国民共有の文化遺産であり，これらを後世に大切に伝え残すことは私たちに課せられた重大な責務です。

西九州自動車道建設事業につきましては，道路建設計画当初から可能な限り文化財の保存に努めていただくよう，県教育委員会は国土交通省および関係機関と協議を重ね，「伊万里松浦道路」については6箇所の遺跡について記録保存を行うことになりました。

発掘調査は，県教育委員会が国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所の依頼を受け，平成20年度から平成25年度までの計画で実施し，その成果については報告書として逐次刊行する予定です。

八幡山城跡の調査成果が，文化財保護のため，あるいは地域の歴史資料や学術的資料として広く活用され，県民の皆様の関心に少しでも応えることが出来ればと考えております。

最後になりましたが，本書の発刊にあたり，発掘調査や整理作業に従事された方々をはじめ，多大なご尽力をいただきました関係者各位に対しまして衷心より厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

長崎県教育委員会教育長

寺田　隆士

例　　言

Ⅰ　本書は，一般国道497号伊万里松浦道路（西九州自動車道）建設工事に伴う，埋蔵文化財発掘調査報告書の第Ⅰ分冊である。調査は，国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所の依頼を受け，長崎県教育委員会が平成20年度から平成25年度までの計画で実施している。

Ⅱ　当該調査に係る遺跡は，八幡山城跡，中ノ瀬遺跡，今福遺跡，太郎浦岩陰１～３である。本書は，平成20年度と平成21年度の八幡山城跡の調査について収録したものである。

Ⅲ　報告する本書の内容は，下記のとおりである。

1　八幡山城跡は，長崎県松浦市今福町に所在する。

2　調査は県教育委員会が主体となり，県教育庁佐世保文化財調査事務所が調査を担当した。

3　発掘調査は，国際文化財株式会社と株式会社三基の八幡山城跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体（ＪＶ）に業務委託した。

4　本書で使用した遺物の実測・遺構の製図は，県教育庁佐世保文化財調査事務所が行い，収録した遺物・図面・写真は，現在，県教育庁佐世保文化財調査事務所に保管している。

5　本書の写真は，遺構等調査時の写真を江上，石橋，矢葺，川上文化財調査員，掲載遺物の写真を矢葺，松田文化財調査員が撮影した。

6　本書の執筆は，担当者が分担して行い，執筆者は各項文末に記した。

7　本書の編集は，矢葺が行った。

8　本書で用いた調査・整理における土層および土器の色調観察は，以下の文献に準拠した。

・小川正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖2004年度版』
　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人　日本色彩研究所　色票監修

9　八幡山城跡は北城の一部の調査であるため，調査区外については地表面観察による現状測量である。

10　本書で用いた方位は全て真北であり，国土座標は世界測地形による。

11　自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに依頼した。

12　調査に際して，千田嘉博氏（奈良大学教授）から御指導を頂き，また調査所見を賜った。記して，感謝を申し上げます。

本 文 目 次

Ⅰ　発掘調査の端緒と経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境……6
　2　歴史的環境……7
Ⅲ　調査の概要
　1　平成20年度調査……12
　2　平成21年度調査……13
Ⅳ　遺構・遺物
　1　遺　構……17
　2　遺　物……27
Ⅴ　まとめ……58
Ⅵ　図　版……61
Ⅶ　附　編
　1　長崎県松浦市今福町八幡山城跡の踏査所見について……87
　2　自然科学分析……90

挿 図 目 次

第１図　西九州自動車道「伊万里松浦道路」計画図…２
第２図　長崎県内西九州自動車道の計画状況…３
第３図　八幡山城跡の位置と周辺遺跡等……８
第４図　九州西北部の山城分布図……９
第５図　八幡山城跡周辺の字名図……10
第６図　試掘坑配置図……12
第７図　調査区とグリッド配置図……13
第８図　山麓南壁土層図・山麓東壁土層図…14
第９図　中央トレンチ北壁土層図……15～16
第10図　遺構配置図……17
第11図　ＴＰ－12北壁土層図・ＴＰ－21西壁土層図…18
第12図　八幡山城跡（北城）と断面模式図…19
第13図　遺構配置図……20
第14図　切岸１平面図と切岸１・２の位置関係…21
第15図　ＴＰ－１北壁土層図・ＴＰ－17北壁土層図…22
第16図　切岸２平面図とＴＰ－18北壁土層図…23
第17図　切岸３平面図と切岸２・３の位置関係…24
第18図　北城の平場と横堀・堀切の断面図・断面見通図…25
第19図　八幡山城跡俯瞰図……26
第20図　旧石器時代の遺物……27
第21図　縄文時代の遺物①……29
第22図　縄文時代の遺物②……30
第23図　縄文時代の遺物③……31
第24図　弥生時代の遺物……32
第25図　中世の遺物①……33
第26図　中世の遺物②……35
第27図　中世の遺物③……37
第28図　中世の遺物④……39
第29図　中世の遺物⑤……39
第30図　中世の遺物⑥……40
第31図　中世の遺物⑦……42
第32図　近世の遺物①……43
第33図　近世の遺物②……44
第34図　全体の遺物出土状況……47

第35図　旧石器時代の遺物出土状況……48
第36図　縄文時代の遺物出土状況……49
第37図　弥生時代の遺物出土状況……50
第38図　中世の遺物出土状況……51
第39図　近世の遺物出土状況……52
第40図　出土遺物の接合状況……53
第41図　八幡山城跡縄張図……59

図版目次

巻頭写真①　八幡山城跡全景
巻頭写真②　東部傾斜地　切岸１
図版１　調査区近景……61
図版２　範囲確認調査と本調査前……62
図版３　包含層……63
図版４　切岸１①……64
図版５　切岸１②……65
図版６　切岸１③……66
図版７　切岸２……67
図版８　切岸３……68
図版９　遺物出土状況①……69
図版10　遺物出土状況②……70
図版11　遺物出土状況③……71
図版12　山麓完掘状況……72
図版13　遺跡遠景……73
図版14　旧石器時代の遺物……74
図版15　縄文時代の遺物①……75
図版16　縄文時代の遺物②……76
図版17　縄文時代の遺物③･弥生時代の遺物…77
図版18　中世の遺物①……78
図版19　中世の遺物②……79
図版20　中世の遺物③……80
図版21　中世の遺物④……81
図版22　中世の遺物⑤……82
図版23　中世の遺物⑥……83
図版24　中世の遺物⑦……84
図版25　近世の遺物①……85
図版26　近世の遺物②……86

表目次

第１表　西九州自動車道「伊万里松浦道路」調査遺跡一覧表……４
第２表　西九州自動車道「伊万里松浦道路」調査計画一覧表……５
第３表　試掘坑一覧……12
第４表　遺物観察表（旧石器時代の遺物）…28
第５表　遺物観察表（縄文時代の遺物）……31
第６表　遺物観察表（弥生時代の遺物）……32
第７表　石器組成表……32
第８表　中世の遺物組成表……33
第９表　遺物観察表（中世の遺物①）……34
第10表　遺物観察表（中世の遺物②）……36
第11表　遺物観察表（中世の遺物③）……38
第12表　遺物観察表（中世の遺物④）……39
第13表　遺物観察表（中世の遺物⑤）……40
第14表　遺物観察表（中世の遺物⑥）……41
第15表　遺物観察表（中世の遺物⑦）……42
第16表　遺物観察表（近世の遺物①）……43
第17表　近世の遺物構成表……44
第18表　遺物観察表（近世の遺物②）……45
第19表　出土遺物の時代別構成表……46
第20表　中世の遺物構成表……54
第21表　中世の遺物時期細別表……55
第22表　中世の遺物時期細別構成表……56

Ⅰ　発掘調査の端緒と経過

1　西九州自動車道の概要

旧建設省は，昭和62年６月30日に道路審議会答申に基づき，14,000㎞の高規格幹線道路網計画を決定した。西九州自動車道は，高規格幹線道路網の一環として計画された道路で，福岡市を起点として，唐津市，伊万里市，松浦市，佐世保市を経由して武雄市に至る延長約150㎞の一般国道の自動車専用道路であり，九州西北部の地域経済の活性化，高速定時性の確保に大きく寄与することで計画された。

2　長崎県内の事業区間

長崎県では，高規格幹線道路をはじめとする幹線道路網の整備については，県民の暮らしの豊かさを支える重要な課題として取り上げ，県内主要都市を２時間程度で結ぶ道路ネットワーク構想を策定し，景観や自然環境との調和を図りながら整備を推進している。

西九州自動車道の長崎県内での供用開始路線及び計画路線は，下記のとおりである。

(1)　供用開始及び開始予定路線

①「佐世保道路」：佐世保みなとＩＣ～相浦中里ＩＣ区間（平成22年３月供用開始，約7.9㎞）

②「佐々佐世保道路」：相浦中里ＩＣ～佐々ＩＣ区間（平成23年度中に供用開始予定，約4.0㎞）

(2)　埋蔵文化財発掘調査中及び終了区間

①「伊万里松浦道路」：松浦市志佐町～佐賀県伊万里市間（長崎県内区間距離約8.0㎞）

(3)　国土交通省での調査中路線

①「松浦～佐々間」：松浦市志佐町～佐々ＩＣ区間（区間距離約17.0㎞）

3　調査経緯

(1)　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局長（長崎河川国道事務所）と長崎県知事（長崎県教育委員会）との間で受託事業として契約し，長崎県教育庁佐世保文化財調査事務所が調査担当として実施している。発掘調査は，大規模な事業の緊急性等を鑑みて，佐世保文化財調査事務所が調査主体で民間調査組織に発掘調査を委託して実施している。

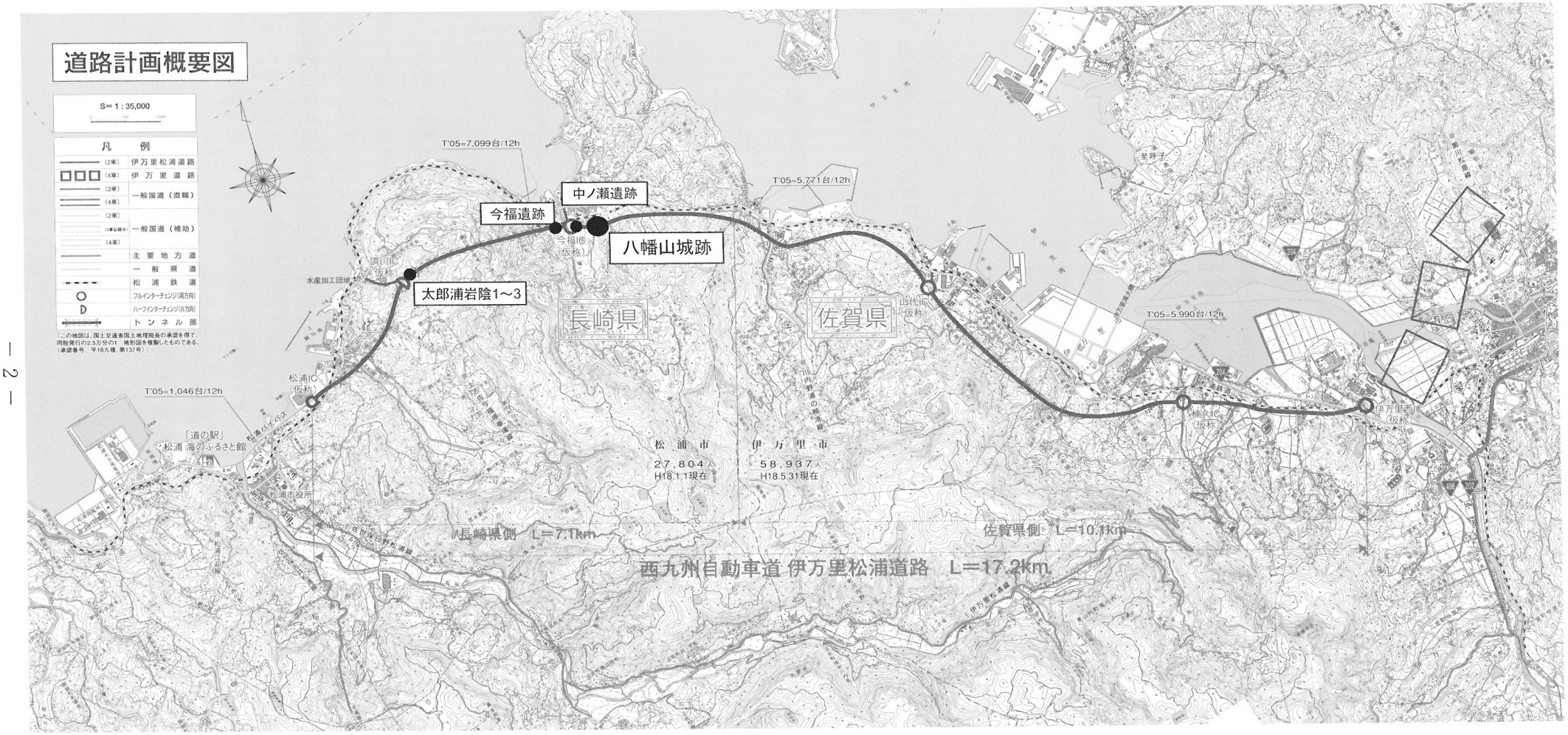
(2)「佐世保道路」・「佐々佐世保道路」に関して

①　長崎県教育委員会は，平成９年に建設省九州地方整備局長崎工事事務所（現国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所）と「佐世保道路」と「佐々佐世保道路」に関する埋蔵文化財の取扱いについての協議を行った。その後，現地踏査の依頼を受け，平成９年11月に分布調査及び平成12年12月に分布調査の補足調査を実施した結果，発掘調査が必要な面積は92,100㎡となった。

②「佐世保道路」と「佐々佐世保道路」は，平成13年度～21年度までに範囲確認調査及び緊急発掘調査を実施し終了した。発掘調査総面積は89,534㎡である。

緊急発掘調査遺跡：門前遺跡，小野Ｆ遺跡，竹辺Ｃ遺跡，竹辺Ｄ遺跡，九州文化学園構内遺跡，武辺城跡。

(3)「伊万里松浦道路」に関して



第１図　西九州自動車道「伊万里松浦道路」計画図

①「伊万里松浦道路」は，平成17年度に分布調査を実施し計画区域内に６箇所の遺跡が確認され，平成20年度～25年度まで範囲確認調査及び緊急発掘調査，報告書作成業務を予定である。発掘調査総面積は48,116㎡を予定している。

緊急発掘調査遺跡：中ノ瀬遺跡，八幡山城跡，今福遺跡，太郎浦岩陰１～３。

②平成20年度～平成22年度の発掘調査について

平成20年度　範囲確認調査遺跡：中ノ瀬遺跡，八幡山城跡

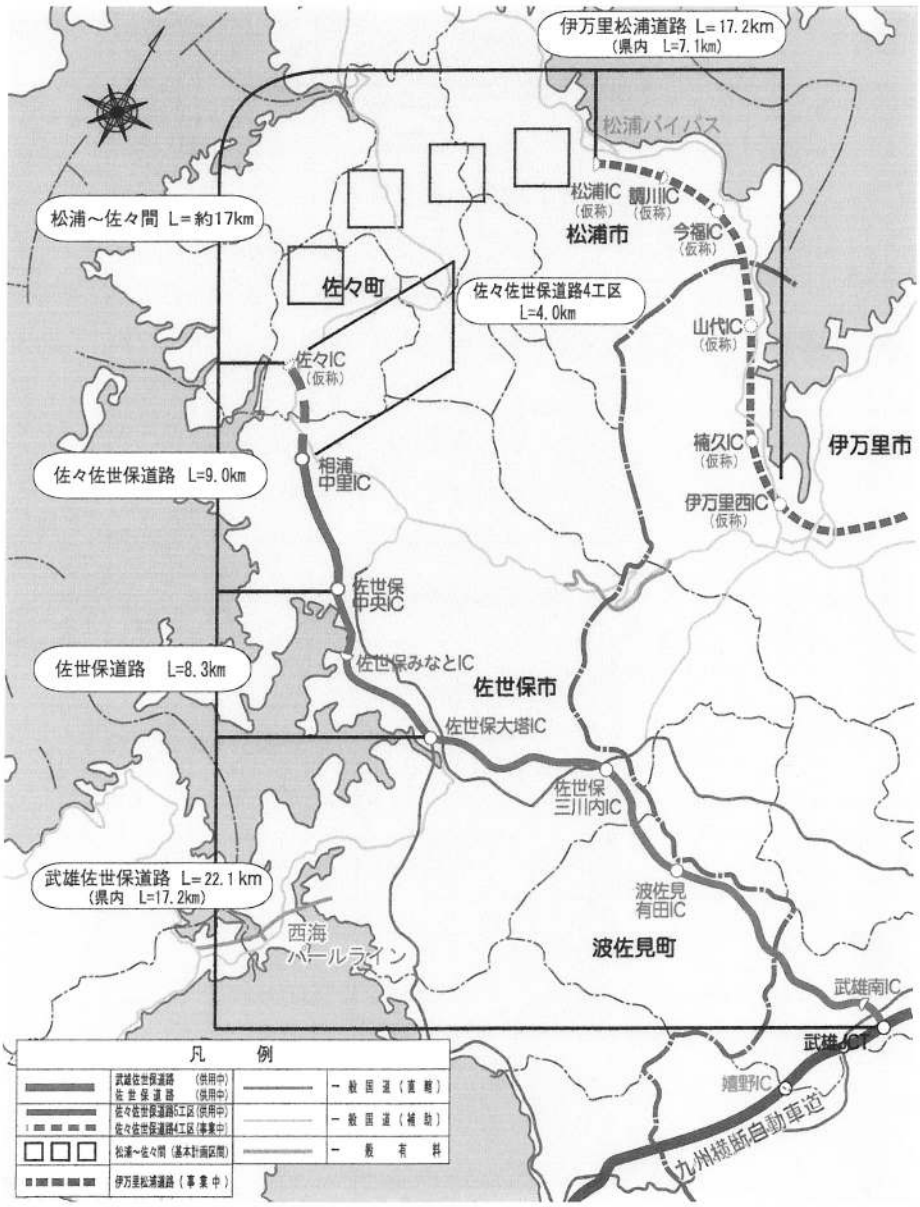
緊急発掘調査遺跡：中ノ瀬遺跡

平成21年度　範囲確認調査遺跡：今福遺跡

緊急発掘調査遺跡：中ノ瀬遺跡，八幡山城跡，今福遺跡

平成22年度　緊急発掘調査遺跡：今福遺跡

報告書作成業務：八幡山城跡



第２図　長崎県内西九州自動車道の計画状況（国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所発行のパンフレットより一部改訂）

4　八幡山城跡発掘調査体制について

(1)　平成20年度の範囲確認調査は，佐世保文化財調査事務所で実施した。

(2)　平成21年度の緊急発掘調査は，調査面積8,257㎡について八幡山城跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体・国際文化財株式会社長崎営業所と株式会社三基に委託して実施し，終了した。

業務名称：一般国道497号伊万里松浦道路埋蔵文化財発掘調査委託業務

委託業務内容：当初の委託業務内容は，発掘調査業務（発掘調査作業員の雇用，安全対策等），遺構実測業務，検出遺構の空中写真撮影業務，掘削及び排土運搬業務，水中ポンプ，ローリングタワー等配置業務，防塵ネット，足場設置業務，ラフテレーンクレーン車設置箇所基盤整地業務，仮設排水設備設置業務を委託した。また，調査状況の進展により変更契約を行ない，産業廃棄物収集・運搬及び処分業務等を追加した。

委託調査員等：現場代理人１人，発掘調査員３人

(3)　八幡山城跡発掘調査及び報告作成業務関係者

平成20年度　長崎県教育庁佐世保文化財調査事務所長　副島和明
係長　山村智成・村川逸朗
文化財保護主事　杉原敦史
文化財保護主事　荒井春房
文化財調査員　江上正高・石橋忠治・柴田妃三光

平成21年度　長崎県教育庁佐世保文化財調査事務所長　副島和明
係長　山村智成・村川逸朗
主任文化財保護主事　杉原敦史
文化財保護主事　荒井春房
文化財調査員　石橋忠治・矢葺都子・川上儀明

平成22年度　長崎県教育庁佐世保文化財調査事務所長　副島和明
係長　山村智成・村川逸朗・杉原敦史
文化財保護主事　荒井春房
文化財調査員　矢葺都子・松田菜津子　　（副島）

番号	遺跡名	所在地	当初 変更後	分布面積（㎡）	発掘調査予定面積（㎡）	範囲確認調査面積（㎡）	時代	概要
1	八幡山城跡	松浦市今福町東免字八幡山ほか	当初	7,200	8,257	(72)	旧石器時代～中世	中世の山城跡
			変更後	8,257				
2	中ノ瀬遺跡	松浦市今福町東免字中ノ瀬ほか	当初	14,500	17,559	(70)	縄文時代～近世	縄文時代～近世に至る複合遺跡
			変更後	17,559				
3	今福遺跡	松浦市今福町仏坂免字五百田ほか	当初	20,500	21,400	(276)	縄文時代～中世	縄文時代～古代，中世に至る複合遺跡
			変更後	21,400				
4	太郎浦岩陰1～3	松浦市調川町下免字太郎浦	当初	900	900	(24)	旧石器時代～縄文時代	縄文時代～旧石器時代の包蔵地
			変更後					
合計			当初	43,100	48,116	(442) （　）は内数		
			変更後	48,116				

第１表　西九州自動車道「伊万里松浦道路」調査遺跡一覧表

調査年度	調査形態	遺跡名	調査面積（㎡）	調査期間	調査担当	委託業者
平成17年度	現地調査	西九州自動車道計画路線内	－	H18.1.11	副島・町田・松尾	
平成18年度	現地調査	西九州自動車道計画路線内	－	H18.5.29	副島・町田・松尾	
平成20年度	範囲確認調査	八幡山城跡	72	H20.5.19～6.20	副島・村川・杉原・荒井・江上・石橋・柴田	
		中ノ瀬遺跡	70	H20.11.17～11.28	副島・村川・杉原・石橋・江上・柴田	
	緊急発掘調査	中ノ瀬遺跡	4,800	H20.11.18～H21.3.18	副島・村川・杉原・石橋・江上・柴田・半田・矢葺	国際文化財㈱・㈱三基の共同企業体
平成21年度	範囲確認調査	今福遺跡	276	H21.5.11～6.4	副島・杉原・江上・柴田・矢葺	
	緊急発掘調査	八幡山城跡	8,257	H21.6.19～H22.3.15	副島・杉原・荒井・石橋・矢葺・川上	国際文化財㈱・㈱三基の共同企業体
		中ノ瀬遺跡	12,759	H21.6.12～H22.3.16	副島・杉原・江上・柴田・半田・折原・福永	㈱九州文化財研究所・㈱大信技術開発の共同企業体
		今福遺跡	1,800	H21.10.16～H22.3.16	副島・杉原・半田・川上・浦川	大成エンジニアリング㈱・㈱創建の共同企業体
平成22年度	緊急発掘調査	今福遺跡	10,300	H22.5.21～H23.3.16	副島・杉原・江上・半田・福永・川上・生田・加世田・佐々木・矢葺	国際文化財㈱・㈱三基の共同企業体
	報告書作成	八幡山城跡	－	H22.4.1～H23.3.31	杉原・荒井・矢葺・松田	
	整理作業	中ノ瀬遺跡	－	H22.4.1～H23.3.31	杉原・荒井・江上・矢葺・松田・山川	

調査形態	面積	備　　考
要調査面積	47,216㎡	西九州自動車道計画路線内３遺跡の要調査面積（八幡山城跡，中ノ瀬遺跡，今福遺跡）
	900㎡	西九州自動車道計画路線内３遺跡の要調査面積（太郎浦岩陰１～３）
発掘調査済面積	27,616㎡	平成20年度～平成21年度の発掘調査面積（八幡山城跡，中ノ瀬遺跡，今福遺跡）
	10,300㎡	平成22年度の発掘調査面積（今福遺跡）
発掘調査予定面積	10,200㎡	平成23年度以降の発掘調査予定面積（今福遺跡，太郎浦岩陰１～３）

第２表　西九州自動車道「伊万里松浦道路」調査計画一覧表

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境（第３図）

松浦市は，長崎県本土部の北端に位置し，北松浦半島の先端部と鷹島・福島・青島等の島々で構成されている。市の北部は伊万里湾を経て玄界灘に通じ，東は佐賀県伊万里市及び唐津市，南は縄文時代草創期の隆起線文土器等が出土した福井洞窟が所在する佐世保市，西は多くの木製品及び多紐細文鏡が出土した弥生時代の重要遺跡である里田原遺跡が所在する平戸市と隣接する。

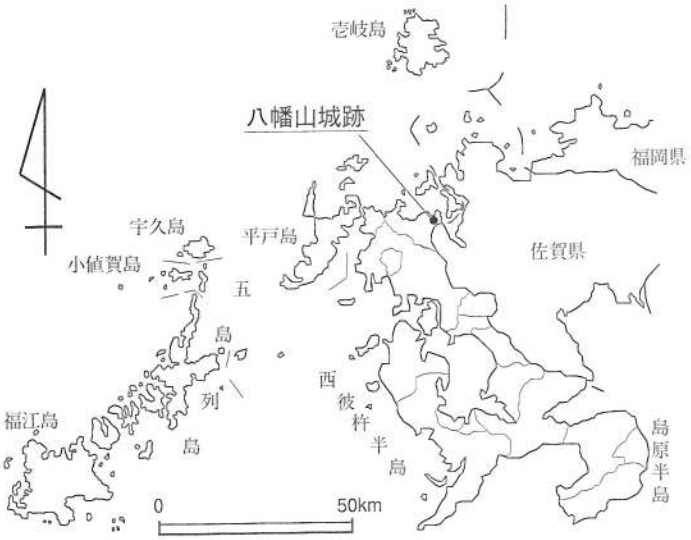
地質的には新生代第三紀に形成された砂岩・泥岩等の堆積岩を基盤とし，その上に北松玄武岩が広く分布する地質構造を呈し，典型的な溶岩台地となっている。佐賀県境を占める国見山（776m）を主峰として標高400～500mの高位台地が展開した後，北及び西に向かって高度を減じる。雨水は今福川など北流する数条の河川及びその支流により第三紀層の台地を浸食しながら伊万里湾に注ぐ。基盤層は砂岩で崩壊しやすく，その上に北松玄武岩層が広がっており，八の久保砂礫層が脆い基盤層と節理の間に帯水しやすい玄武岩層との間にあって相互に作用し，いわゆる「北松型地すべり」を発生させる要因とされている。その一方で水に富み，湧水に恵まれた松浦は，人々の生活の舞台となってきた。また，河川の浸食等による豊富な砂の供給により今福川河口部には三角州が発達するが，海岸線の多くは急崖が海に没するリアス式である。このため，尾根道を伝っての移動は不便であり，移動手段として日常的に船を用いたことは想像に難くない。松浦地域は，『古事記』には「末羅」，『日本書紀』では「マツラ」と記され，『魏志』倭人伝には「末盧国」との記述があり，古来より海上交通の要衝として栄え，中国大陸や朝鮮半島と地理的に近いことから大陸文化の門戸ともなった。

当該遺跡が所在する今福町は松浦市の東端部を占め，北方海面を玄界灘から遮蔽する形で鷹島が，東方海面には福島が浮かぶ。広大な溶岩台地部と石倉山・人形石山を水源とする今福川により形成された沖積平野の水田地帯から成っているが，北西部（白井岳）・北東部（城山）は低位台地が伊万里湾口に突き出し，南部の国見山塊と合わせて今福川流域を抱き込んでいる。地質構造区は有田帯に属し，炭層を包含する第三紀層が広く分布することから，昭和30年代後半まで炭坑経営が盛んであり，当該遺跡付近でも炭坑が開発・経営されていた。

八幡山は，国見山系から北に向かって舌状に伸びる砂礫台地の北端部にある。標高は40～47m，人柱川の浸食を受けた尾根筋が南北方向に細長く伸び，標高差が少なく比較的平坦な稜線をもつ丘陵状の地形を呈している。北端部は八幡神社の境内である。近世以降の干拓により，海岸線は当該遺跡から約600mほど北に離れているが，それ以前は当該遺跡の北端まで湾が浸入していたと推測される。当該遺跡から約1.7kmほど東の台地上には，伊万里湾を眺望する位置に松浦党梶谷城跡がある。谷を隔てた西隣には中ノ瀬遺跡，さらに今福川の対岸には今福遺跡が展開する。

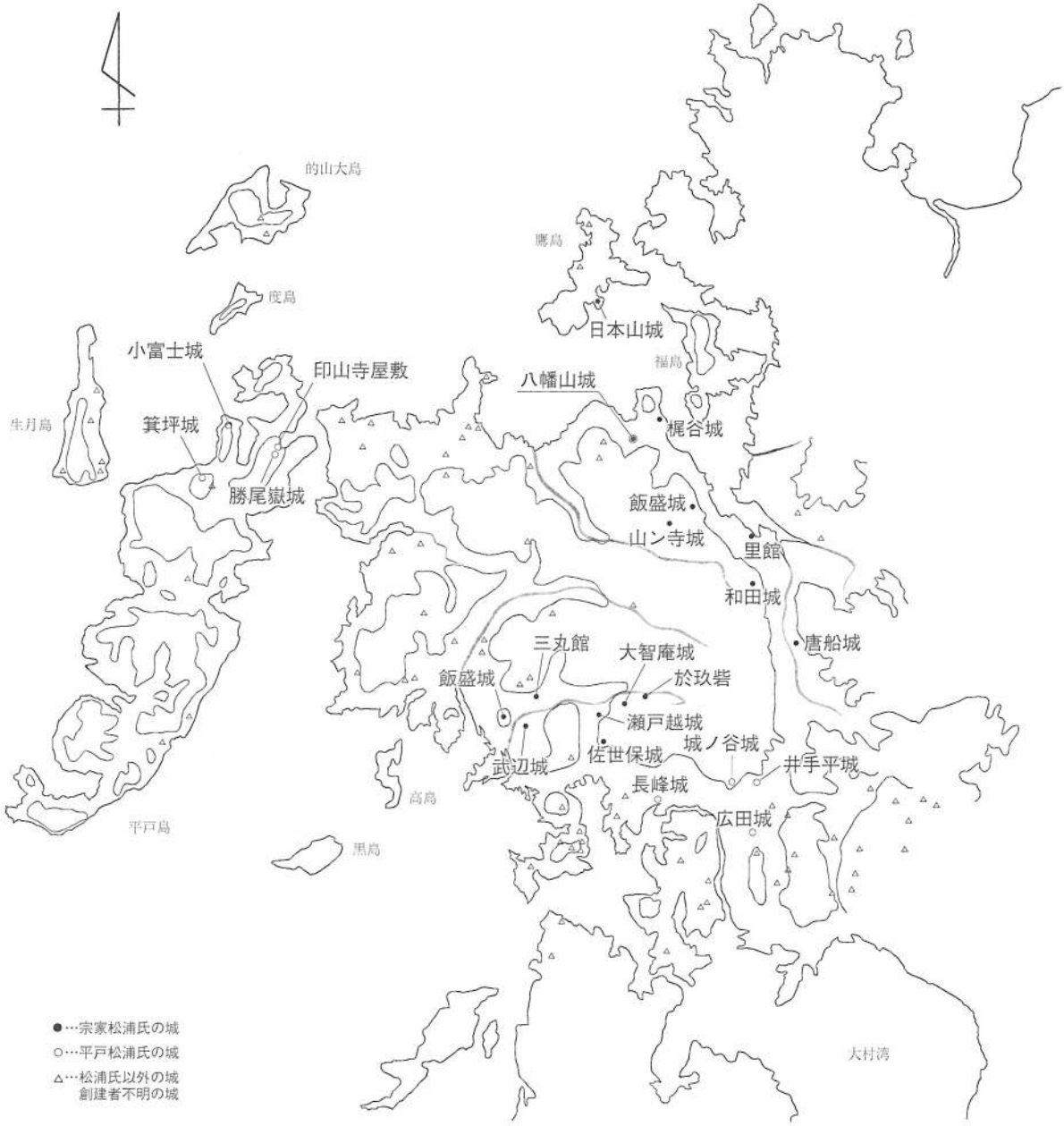
2　歴史的環境（第３～５図）

長崎県北部に位置する松浦市には，先史時代から近現代に至る人々の足跡が連綿として残される。その中でも旧石器～縄文時代にかけての遺跡の分布数が多い。このことは，市内星鹿半島や佐賀県伊万里市腰岳といった黒曜石原産地が近隣に存在し，原石を容易に入手できる地理的要因によるものであったと考えられる。旧石器時代の遺跡としては，ナイフ型石器・台形石器等が確認された楼楷田遺跡・寺ノ尾Ｃ遺跡・田口高野遺跡，今福町域にあっては満場遺跡・大塔遺跡・柳池遺跡等が所在する。縄文時代では，縄文前期の轟式土器・曽畑式土器や石鏃・石斧等が確認された姫神社遺跡，縄文中期終末から後期初頭に位置づけられる坂の下式土器とともに多数の石鏃・つまみ形石器・石鋸等が確認された田川遺跡が知られ，今福町域では石鏃・石核等が確認された北平遺跡のほか，城山山麓遺跡・山川遺跡・雨久保遺跡が所在する。弥生時代においては，縄文晩期から弥生前期にかけての包含層が確認され，柱穴・箱式石棺墓・甕棺墓等の遺構及び西平式土器・刻目突帯文土器・板付Ⅱ式土器等の遺物が確認された池田遺跡，水田畦畔工事の際に甕棺墓等が確認された栢ノ木遺跡が知られ，今福町域では弥生・中世にかけての今福小学校遺跡を掲げることができる。古墳時代では，昭和62年度の確認調査において古墳３基が確認された小嶋古墳群，箱式石棺墓・竪穴式住居跡・溝状遺構等が検出された宮ノ下り遺跡が所在する。古代から中世にかけては松浦党に関連する遺跡数が多くなる。肥前松浦地方に出現した武士団については平安時代の末に「松浦党」の名で文献に登場している。このころ日本各地には魚貝・果物等の産物を贄として天皇や神に納めた御厨が置かれていたが，宇野御厨は現在の長崎県松浦市・平戸市・佐世保市北部・五島市・北松浦郡・南松浦郡及び佐賀県伊万里市を包含する地域に設置され，その後漸次荘園的要素も加わって宇野御厨荘とよばれるようになった。松浦党は漁業や海外交易に経済的な基盤を置き，その活動の中心は宇野御厨の領域にあったと考えられている。松浦氏の出自については諸説あり断定することはできないが，江戸時代に編纂された松浦氏の家譜である『松浦家世伝』によれば，延久元年（1069），嵯峨源氏の子孫である源久なる人物が摂津国渡辺荘から肥前国松浦郡志佐郷今福に下向・土着し宇野御厨検校ならびに検非違使となり，やがて松浦を称したのが松浦氏の始まりとする。源久以前にも長和５年（1016）肥前守に補任された「源聞」や寛仁３年（1019）刀伊の入寇の際に松浦地方で戦った前肥前介の「源知」（『小右記』），さらに宇野御厨の贄人「源順」（『東南院文書』）等の源姓一字名の人物が文献に散見されることから，確証はないものの受領国司あるいは在庁官人が下向・土着し勢力を拡大していく流れが窺える。源久の後，その子孫は宇野御厨を中心に独立・分散割拠して松浦党を形成する。なお，源久の嫡子とされる源直の八子のうち，次男清は今福に居住して惣領家（宗家松浦）の家督を相続し，五男披は伊万里峯邑に居住して平戸松浦氏及び田平峯氏の祖となった。平安末ころ強力な水軍を保有して平家に服従していた松浦一族は，鎌倉時代に入ると幕府によって所領安堵のうえ個別に地頭・御家人に補任されている。南北朝時代以降は松浦地域も合戦の舞台となり，松浦氏は一族あるいは他氏と抗争を展開したが，所領保全等の必要から他氏との戦いに力を傾注する場面ではしばしば一族間で一揆契諾を結んでいる。14世紀に宗家松浦丹後守勝が有田（佐賀県西有田町）を併領して後，宗家松浦丹後守盛は本拠地を今福から松浦郡相神浦（佐世保市相浦）に移し，武辺城を築城する。移転の理由について，佐世保市教育委員会『武辺城跡発掘調査報告書（第二次）』には「第一の理由は消極的理由で，平戸松浦氏による圧迫である。南北朝・室町時代，五島の小値賀，平戸島北部，田平の海上航路を掌握していた平戸



1 八幡山城跡
2 中ノ瀬遺跡
3 今福遺跡
4 北平遺跡
5 満場遺跡
6 ぎぎが浜遺跡
7 松浦党梶谷城跡
8 城山山麓遺跡
9 山川遺跡
10 今福小学校遺跡
11 大塔遺跡
12 柳池遺跡
13 雨久保遺跡
14 若宮神社
15 松浦丹後守勝の墓
16 松浦丹後守盛の墓
17 文禄の役
松浦家供養塔
18 八幡神社
19 今福（歳の宮）神社
20 旧宛陵寺跡
21 今宮神社
22 平戸街道　御厨筋

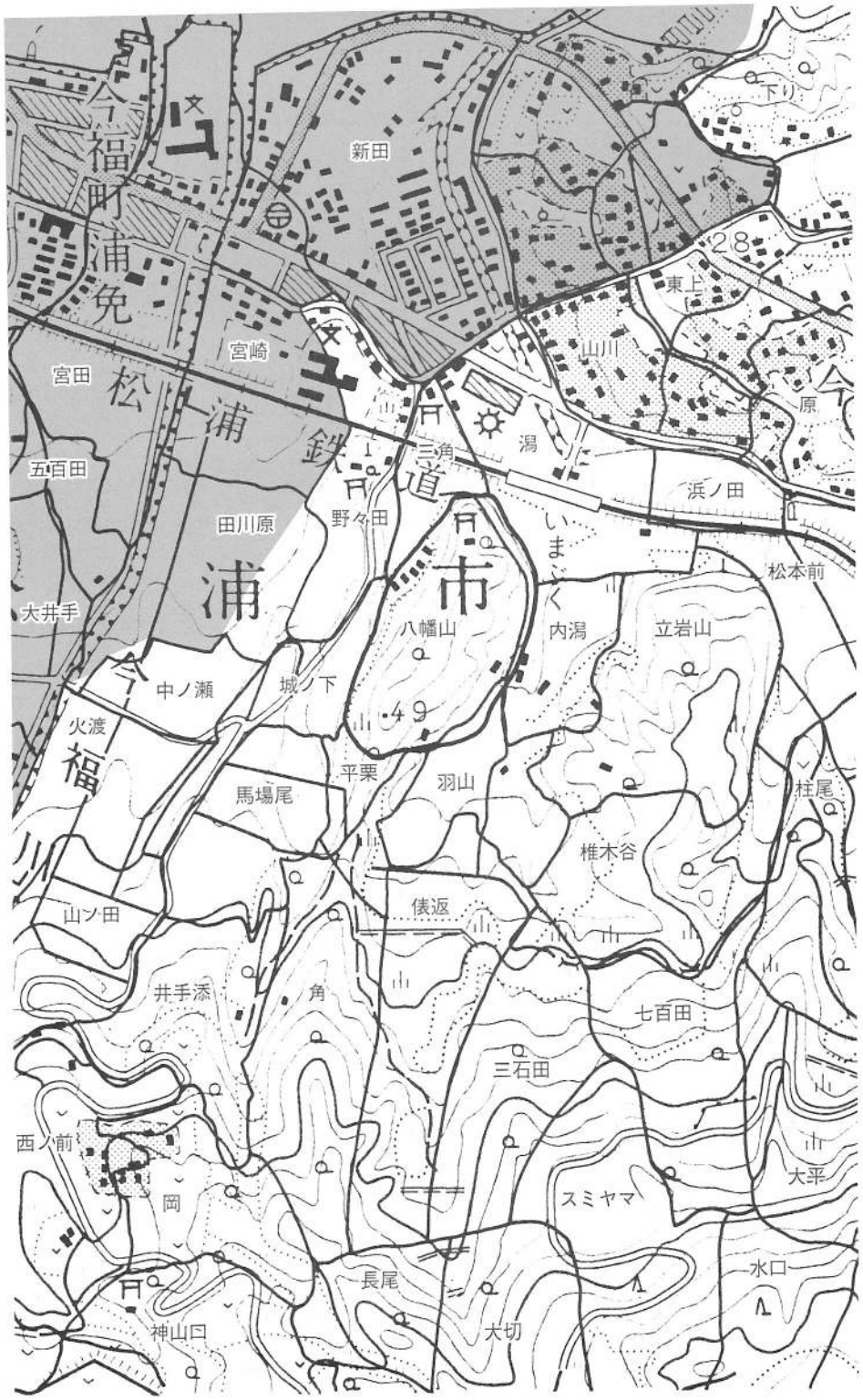
第３図　八幡山城跡の位置と周辺遺跡等（Ｓ＝１/25,000）



※創築年代が天正年間までの城を示し，創建者ごとに分類してある。

【参考文献】
外山幹夫他　1980『日本城郭大系』17　新人物往来社
長崎県教育委員会　2010『長崎県中近世城館跡分布調査報告書』Ⅰ
長崎県文化財調査報告書第206集

第４図　九州西北部の山城分布図（Ｓ＝１/400,000）



海岸線の推定ライン

※松浦市教育委員会提供。

【参考文献】金子武巧　1984『今福郷土史』芸文堂

第５図　八幡山城跡周辺の字名図

松浦氏及び同じ峯一族の田平氏が勢力を拡大したことによって南下を余儀なくされた。第二の理由は積極的理由で，朝鮮・中国との貿易のための港を求めて相神浦へ進出した。」とある。平戸松浦氏との覇権をめぐる抗争，貿易の利潤確保という課題を解決するため本拠地の移転を敢行したとするのは一つの考え方として肯定できる。その後，宗家松浦氏は武辺城から大智庵城に移ったとされるが，明応７年（1498），宗家松浦政は一族の平戸松浦弘定に討たれ大智庵城は落城する。政の子幸松丸（親）とその母は平戸松浦氏の人質となるものの，次第に勢力を盛りかえし飯盛城を築城する。永禄６年（1563），平戸松浦隆信は飯盛城攻めを開始し，永禄８年（1565）に陥れるとともに，今福についても平戸松浦氏の領国に編入し，宗家松浦氏と平戸松浦氏の永年にわたる覇権争いは終焉を迎えた。今福には，源久が今福下向の際その第一歩をしるしたと伝えられるぎぎが浜，源久の居宅跡を寺院としたことにはじまり，後に宗家松浦氏の墓所となった旧宛陵寺跡，宗家松浦氏中興の祖ともいわれる松浦勝を祀る若宮神社など，宗家松浦氏と極めて関係の深い史跡が点在していることから，この地が永らく松浦氏にとって重要な地域であったことが窺える。県北の松浦党関連城館跡は松浦市・平戸市・佐世保市・北松浦郡域に展開する。主なものとしては，平安時代末に比定され初期の松浦党の居城と考えられる松浦党梶谷城跡（松浦市），鎌倉時代の里城跡（平戸市），室町時代の陣内城跡（松浦市），勝尾嶽城跡（平戸市），箕坪城跡（平戸市），鳥屋城跡（佐々町），直谷城跡（佐世保市），武辺城跡（佐世保市），大智庵城跡（佐世保市），飯盛城跡（佐世保市），広田城跡（佐世保市），井手平城跡（佐世保市）等を挙げることができ，その多くが交通の要衝に築かれている。当該遺跡に関する文献は確認されておらず断定はできないが，中世後半において一族間の内訌あるいは龍造寺氏をはじめとする近隣諸勢力との緊張関係の中で，必要に迫られて築造された可能性も考えられる。今福は江戸時代の初期には平戸藩領であったが，宗家松浦氏と平戸松浦氏の和睦統合があったといい，寛永12年（1635）年に松浦信貞は３代将軍徳川家光の旗本となり，寛文４年（1664）平戸藩領より今福村1500石が分地されたが，寛政２年（1790）には知行地支配が平戸藩に委任された。今福の中心産業の一つは炭鉱業であった。寛延２年（1749）に今福浦赤岩に坑口が開かれてから昭和42年の飛島炭坑閉山に至るまで217年間にわたり今福の財政を支え続けた。（荒井）

【参考・引用文献】

池田和博　1997「第７章宗家松浦の歴史」『武辺城跡発掘調査報告書（第二次）』
平成８年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書　佐世保市教育委員会

今里順一郎・柴田妃三光他　2008『武辺城跡・末永遺跡』一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第２集　長崎県教育委員会

金子武巧　1984『今福郷土史』芸文堂

長崎県教育委員会編　1997『原始・古代の長崎県』通史編・資料編Ⅱ

中田敦之　2003『松浦市内遺跡確認調査(4)』　史跡松浦党梶谷城跡確認調査報告書
松浦市文化財調査報告書第19集　松浦市教育委員会

中田敦之　2009『松浦市内遺跡確認調査(2)』松浦市文化財調査報告書第３集　松浦市教育委員会

中田敦之・高原愛　1997『田川遺跡』　竜尾川地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
松浦市文化財調査報告書第12集　松浦市教育委員会

中田敦之・高原愛　1998『松浦・今福遺跡』　国営農地再編整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
松浦市文化財調査報告書第14集　松浦市教育委員会

Ⅲ　調査の概要

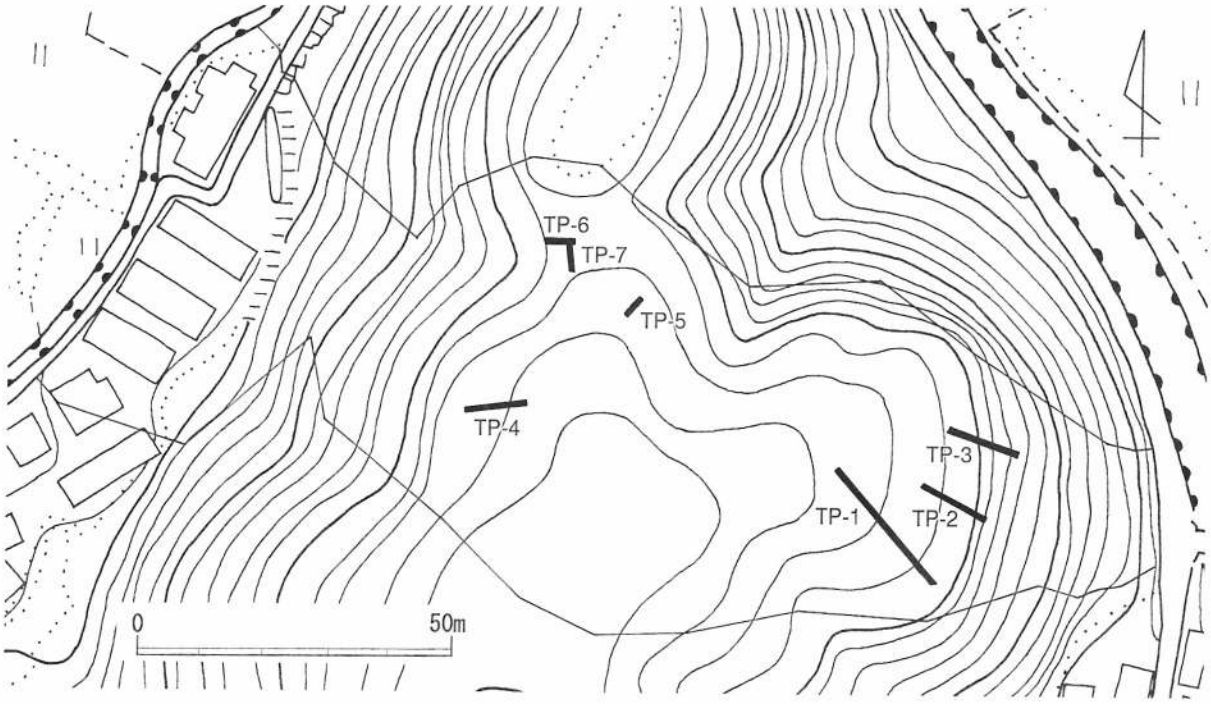
1　平成20年度の調査（第６図　第３表）

県教育庁佐世保文化財調査事務所では，平成20年５月19日から６月20日まで，工事区域内の72㎡について試掘坑を７箇所設定し，範囲確認調査を実施した。調査では表土から人力による掘削を行っている。各試掘坑（ＴＰ）の面積を第３表に示す。調査結果は次のとおりである。

試掘坑	長さ×幅(m)	面積（㎡）	備考
ＴＰ－１	21×１	21	東部傾斜地
ＴＰ－２	12×１	12	東部傾斜地
ＴＰ－３	12×１	12	東部傾斜地
ＴＰ－４	10×１	10	西部傾斜地
ＴＰ－５	５×１	５	東部傾斜地
ＴＰ－６	７×１	７	鞍部
ＴＰ－７	５×１	５	鞍部
	計	72	

第３表　試掘坑一覧

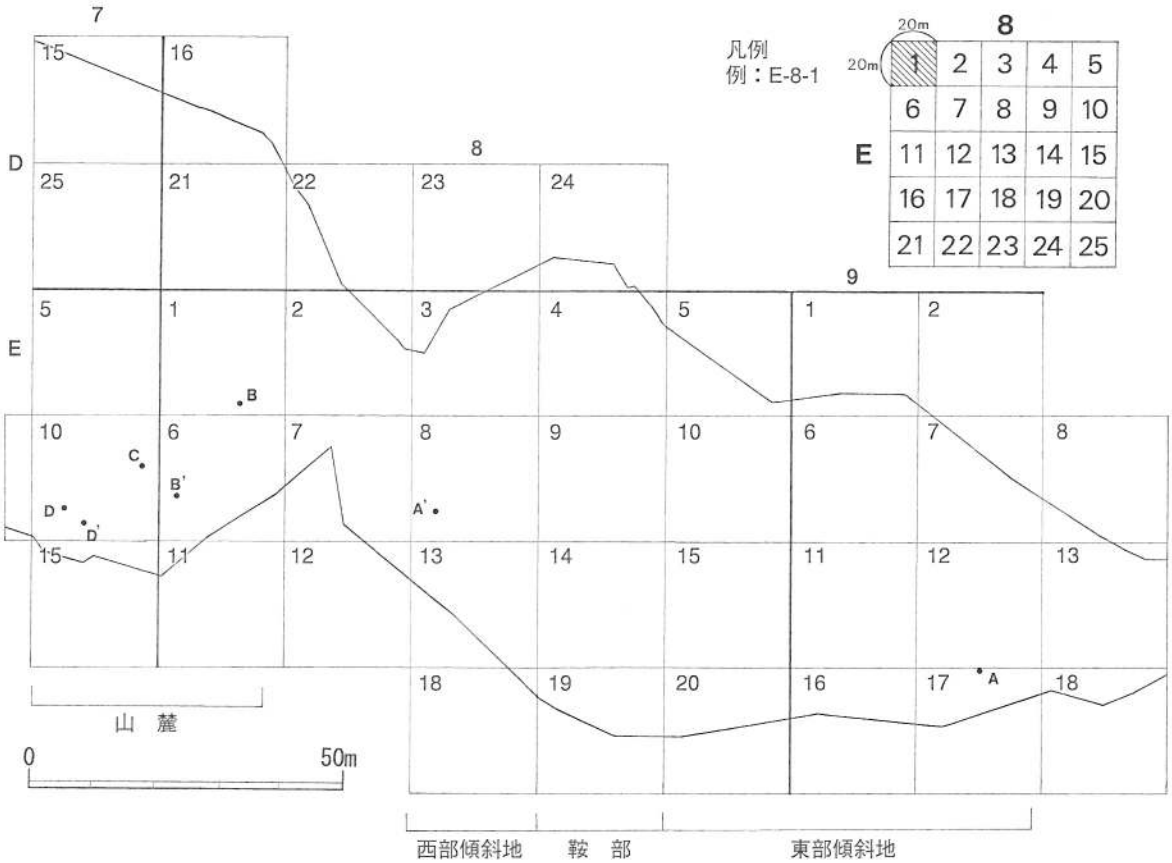
ＴＰ－１～３に係る斜面部は，当初堀切・土塁と推定していたが，調査の結果，切岸として形成されたこと，さらに切岸造成時の残土と地形による雨水の影響により，土塁状の低い高まりを形成したことが推定された。ＴＰ－４は東から西への緩やかな斜面部分に平場の可能性があったため設定したが遺構は確認されなかった。八幡神社周辺は平場の展開が想定され，その南側に位置するＴＰ－５～７は狭小地にあたる。この南北を結ぶ通路の確認を行うため試掘坑を設定したが，通路は確認できなかった。遺物は，ＴＰ－３の３層より腰岳産黒曜石剥片が，ＴＰ－４の２層からは青花片，青磁片，３層より星鹿産黒曜石の未製品，４層より星鹿産黒曜石原石が出土した。黒曜石を使用した未製品が出土したことから，縄文時代の遺構の展開も想定された。ＴＰ－５～７では遺物の出土はなかった。中世城郭遺構については切岸以外の遺構の展開も想定されることから，可能な限り広範囲にわたる調査を実施する必要があると判断した。



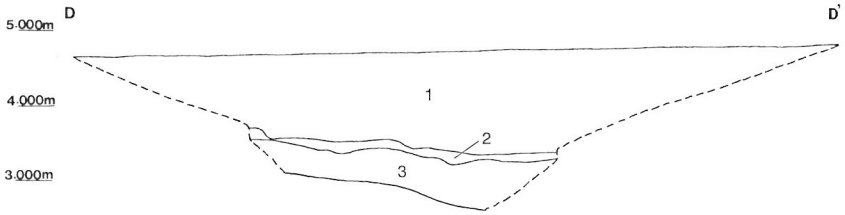
第６図　試掘坑配置図（Ｓ＝１/1,200）

2　平成21年度の調査（第７～９図）

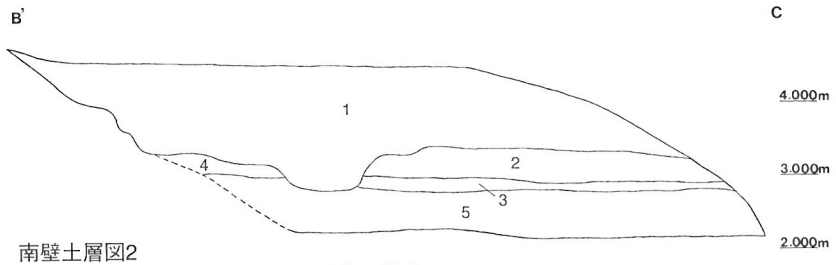
平成21年度は平成20年度の調査結果を踏まえ，平成21年６月19日から平成22年３月15日まで，工事区域内の8,257㎡について発掘調査業務を国際文化財株式会社及び株式会社三基の共同企業体に委託した。調査区は，国土座標系に合わせて南北を主軸とする100mの大グリッドを設定し，東西を１～９，南北をＡ～Ｅと符号した。さらに大グリッド内を20m方眼で区画して中グリッドを設定し，１～25の番号を付した。また，便宜上，遺跡の東側斜面を東部傾斜地，山頂部を鞍部，西側斜面を西部傾斜地，調査区西側の平地部を山麓とした。東部傾斜地・鞍部・西部傾斜地については，すべて人力掘削により調査を行い，腐植土（Ｉ層）を除去した後，崩落土（Ｉｂ層）を掘削した。なお，調査の進捗とともに，遺構等の確認のため必要に応じて試掘坑を設定している。試掘坑は，平成20年度の調査時に設定したものに引き続いて番号を付し，平成21年度はＴＰ－８～23及び全体的な土層のつながりを確認するために八幡山上の調査区を東西に横断する中央トレンチを設定した。主な遺構としては，東部傾斜地及び西部傾斜地において切岸を３箇所で検出している。また，炭化物の集中部を検出し，性格不明遺構（ＳＸ）として記録を行った。採取した炭化物による分析の結果（Ⅶ章），新しい時代のものと古木効果による影響のものと判断したため，挿図等は省略した。遺物は旧石器～弥生時代・中世・近世の遺物が出土し，時期的には中世後半の遺物が主体である。山麓については重機掘削後に精査を行ったが，遺構は確認されなかった。（荒井）



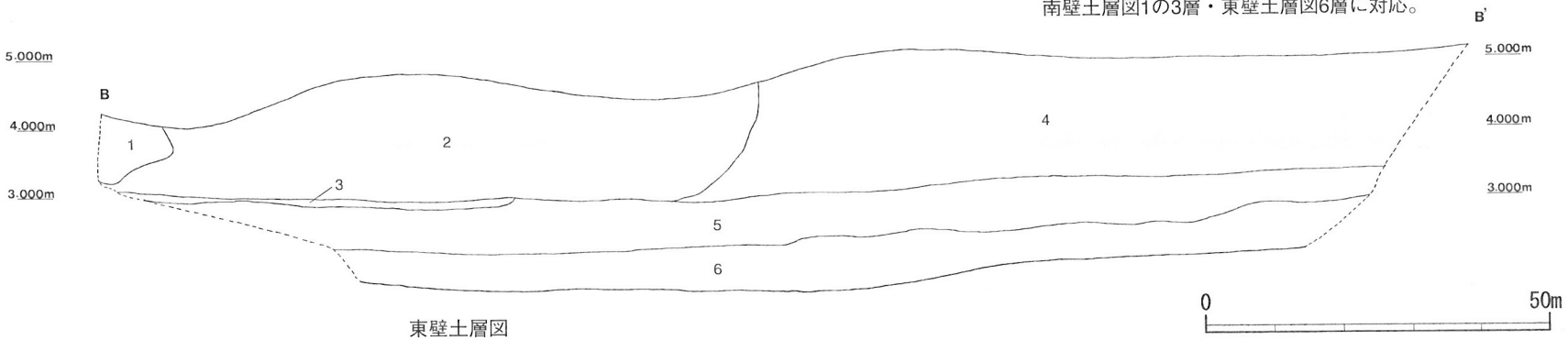
第７図　調査区とグリッド配置図（Ｓ＝１/1,200）



南壁土層図1
1 暗褐色粘質土　表土，住宅の基礎。
2 明褐色粘質土　南壁土層図2の2層・東壁土層図3層に対応。
3 明褐色粘質土　φ1～5cmの小礫と，φ20～70cm程度の礫が多量に混ざる。
南壁土層図2の5層・東壁土層図6層に対応。

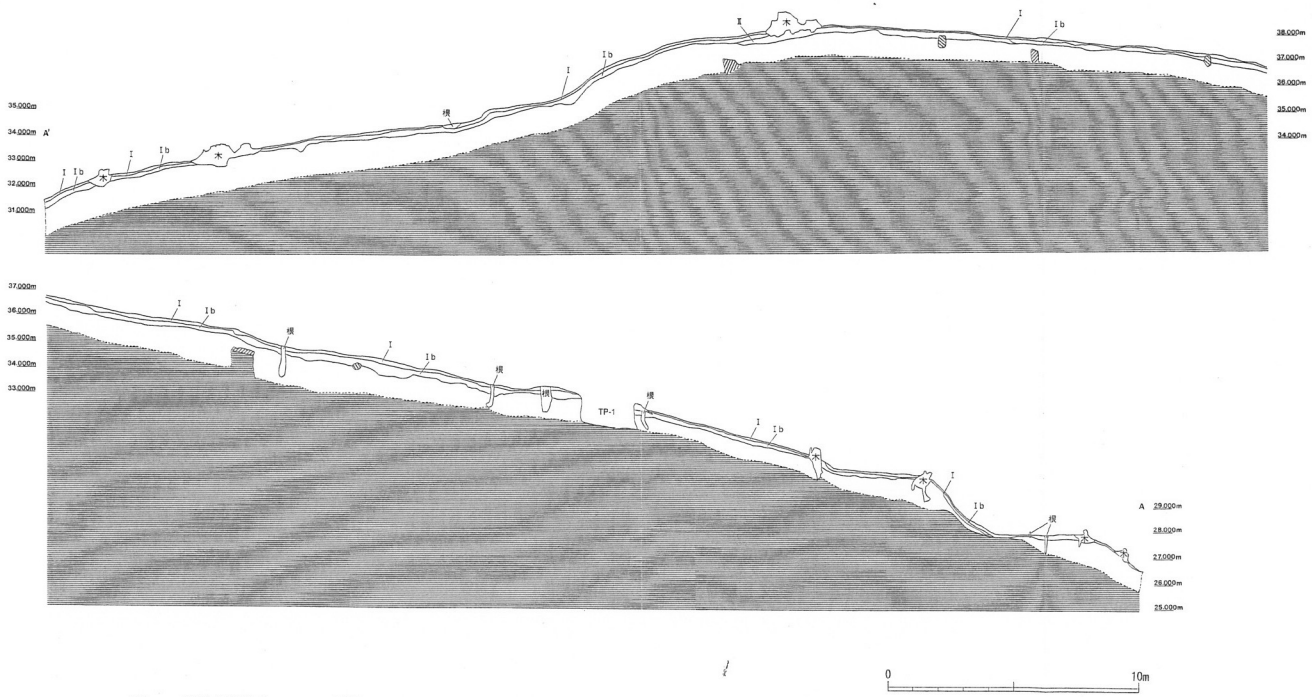


南壁土層図2
1 暗褐色粘質土　表土，住宅の基礎。
2 明褐色粘質土　南壁土層図1の2層・東壁土層図3層に対応。
3 暗オリーブ黒色粘土　田の床土又は沼の底に溜まった土。
4 オリーブ灰色粘土　東壁土層図5層に対応。
5 灰オリーブ色シルト　φ1～5cmの小礫とφ20～70cm程度の礫が多量に混ざる。
南壁土層図1の3層・東壁土層図6層に対応。



東壁土層図
1 暗褐色粘質土　撹乱
2 褐色粘質土　崩落土？
3 明褐色粘質土　南壁土層図1の2層・南壁土層図2の2層に対応。
4 褐色粘質土
5 オリーブ灰色粘土　南壁土層図2の5層に対応。
6 灰オリーブ色シルト　φ1～5cmの小礫とφ20～70cm程度の礫が多量に混ざる。
南壁土層図1の3層・南壁土層図2の5層に対応。

第8図　山麓南壁土層図・山麓東壁土層図（S＝1/100）



Ⅰ層	黒褐色土や褐色土	腐植土。しまりのない土。木の根など多く含む。
Ⅰb層	褐色粘質土や赤褐色粘質土	崩落等による2次堆積土。ブロックを含む。φ5cm程度の小礫を含み，φ40cm大の礫も含む。
Ⅰc層	褐色粘質土	中世以前の2次堆積土。切岸1・2で確認され，黒曜石が出土した。切岸形成以前の堆積と考えられるが，Ⅰb層と明確な区分はできない。礫をほとんど含まずしまりは強い。ブロックを含まない。
Ⅱ層	褐色粘質土	縄文時代の包含層。φ20cm以下の自然礫を多く含む。
Ⅱ層以下	明褐色粘質土や赤褐色粘質土 にぶい赤褐色礫土	八幡山形成層。ブロックを含み，φ2～20cm程度の礫を含む。岩盤近くでは岩盤風化土や風化礫を多く含む。礫層で構成される部分もある。

第９図　中央トレンチ（東部傾斜地～西部傾斜地）北壁土層図（Ｓ＝１/150）

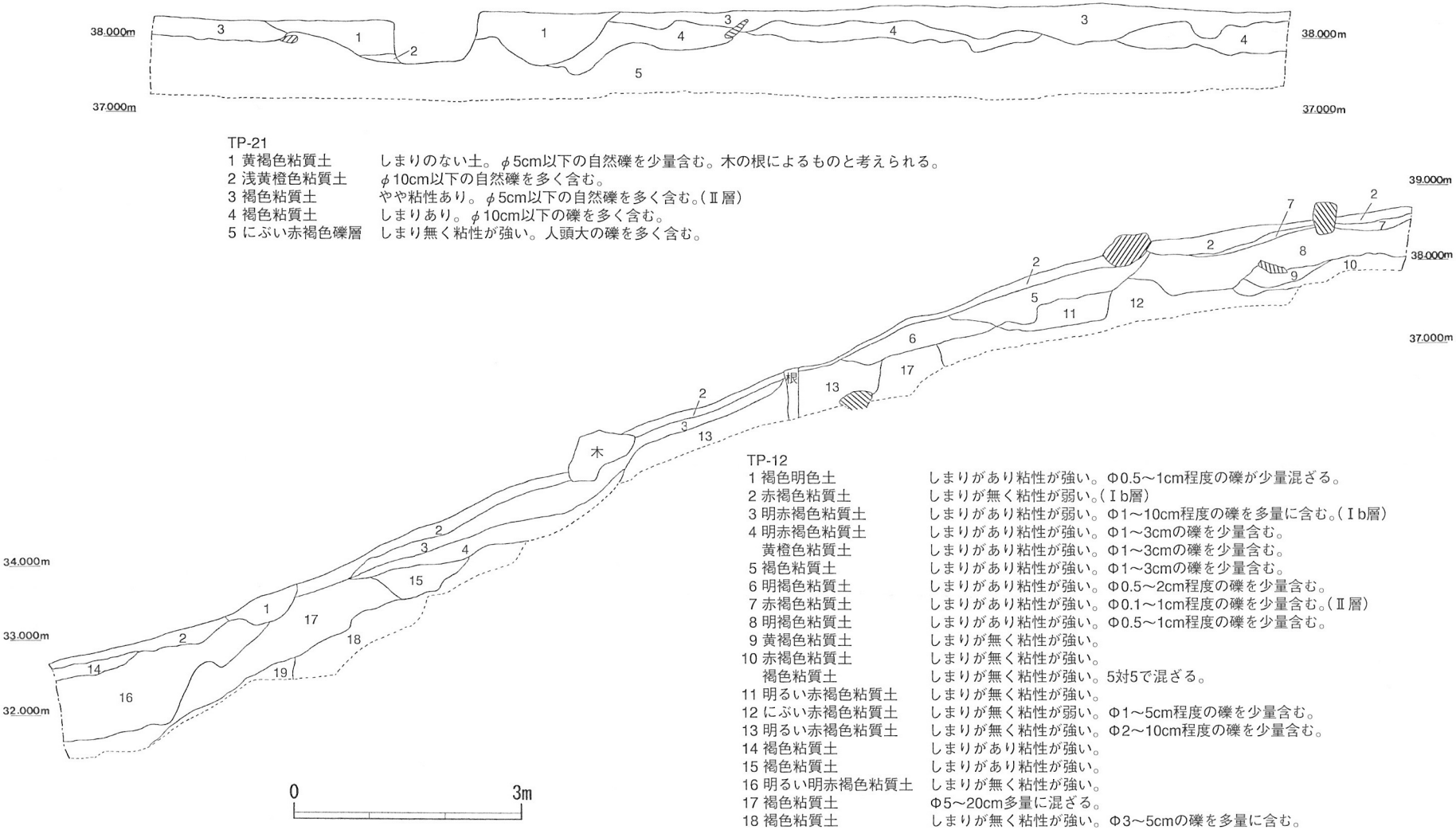
Ⅳ　遺構・遺物

1　遺　構（第10～19図　図版１・３～８）

（１）　包含層（第10・11図　図版３）

中世の遺物に次いで出土したのは，縄文時代の遺物である。出土した遺物は砕片も多いが，石鏃や削器など製品を含む石器である。石器はⅠｂ層掘削中に広範囲で出土が確認され（第35・36図），さらに西部傾斜地では細石刃が３点出土した。このため，堆積が厚く比較的安定と考えられる鞍部に，包含層や遺構が残存していると考え，範囲を設定し，この層をⅡ層とし掘削を行った。石器の集中的な出土は確認されず，遺構も確認できなかった。

第10図　遺構配置図（Ｓ＝１/600）



TP-21

1 黄褐色粘質土	しまりのない土。φ5cm以下の自然礫を少量含む。木の根によるものと考えられる。
2 浅黄橙色粘質土	φ10cm以下の自然礫を多く含む。
3 褐色粘質土	やや粘性あり。φ5cm以下の自然礫を多く含む。(Ⅱ層)
4 褐色粘質土	しまりあり。φ10cm以下の礫を多く含む。
5 にぶい赤褐色礫層	しまり無く粘性が強い。人頭大の礫を多く含む。

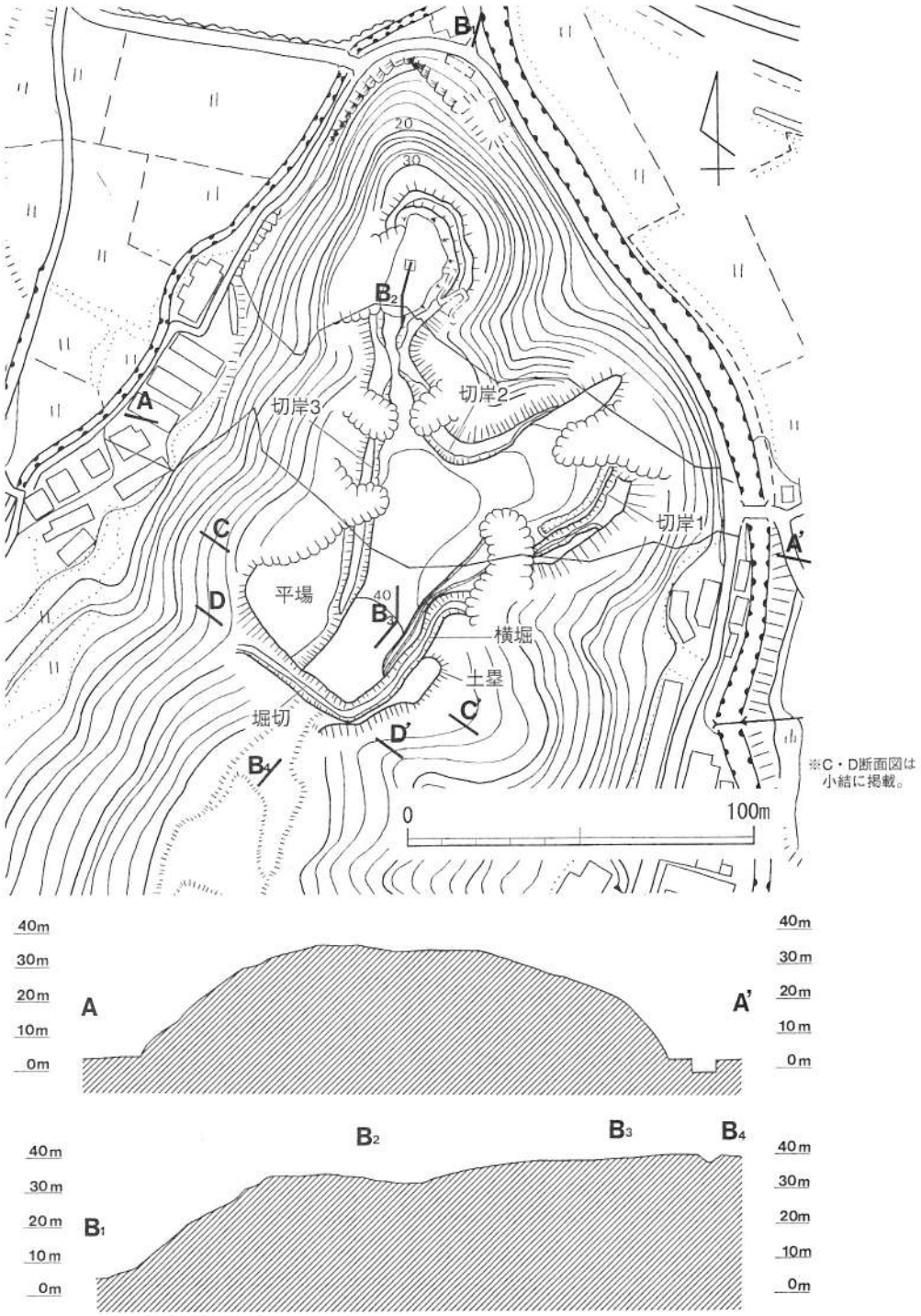
TP-12

1 褐色明色土	しまりがあり粘性が強い。Φ0.5～1cm程度の礫が少量混ざる。
2 赤褐色粘質土	しまりが無く粘性が弱い。(Ⅰb層)
3 明赤褐色粘質土	しまりがあり粘性が弱い。Φ1～10cm程度の礫を多量に含む。(Ⅰb層)
4 明赤褐色粘質土	しまりがあり粘性が強い。Φ1～3cmの礫を少量含む。
黄橙色粘質土	しまりがあり粘性が強い。Φ1～3cmの礫を少量含む。
5 褐色粘質土	しまりがあり粘性が強い。Φ1～3cmの礫を少量含む。
6 明褐色粘質土	しまりがあり粘性が強い。Φ0.5～2cm程度の礫を少量含む。
7 赤褐色粘質土	しまりがあり粘性が強い。Φ0.1～1cm程度の礫を少量含む。(Ⅱ層)
8 明褐色粘質土	しまりがあり粘性が強い。Φ0.5～1cm程度の礫を少量含む。
9 黄褐色粘質土	しまりが無く粘性が強い。
10 赤褐色粘質土	しまりが無く粘性が強い。
褐色粘質土	しまりが無く粘性が強い。5対5で混ざる。
11 明るい赤褐色粘質土	しまりが無く粘性が強い。
12 にぶい赤褐色粘質土	しまりが無く粘性が弱い。Φ1～5cm程度の礫を少量含む。
13 明るい赤褐色粘質土	しまりが無く粘性が強い。Φ2～10cm程度の礫を少量含む。
14 褐色粘質土	しまりがあり粘性が強い。
15 褐色粘質土	しまりがあり粘性が強い。
16 明るい明赤褐色粘質土	しまりが無く粘性が強い。
17 褐色粘質土	Φ5～20cm多量に混ざる。
18 褐色粘質土	しまりが無く粘性が強い。Φ3～5cmの礫を多量に含む。
19 橙色シルト	しまりが無く粘性が強い。

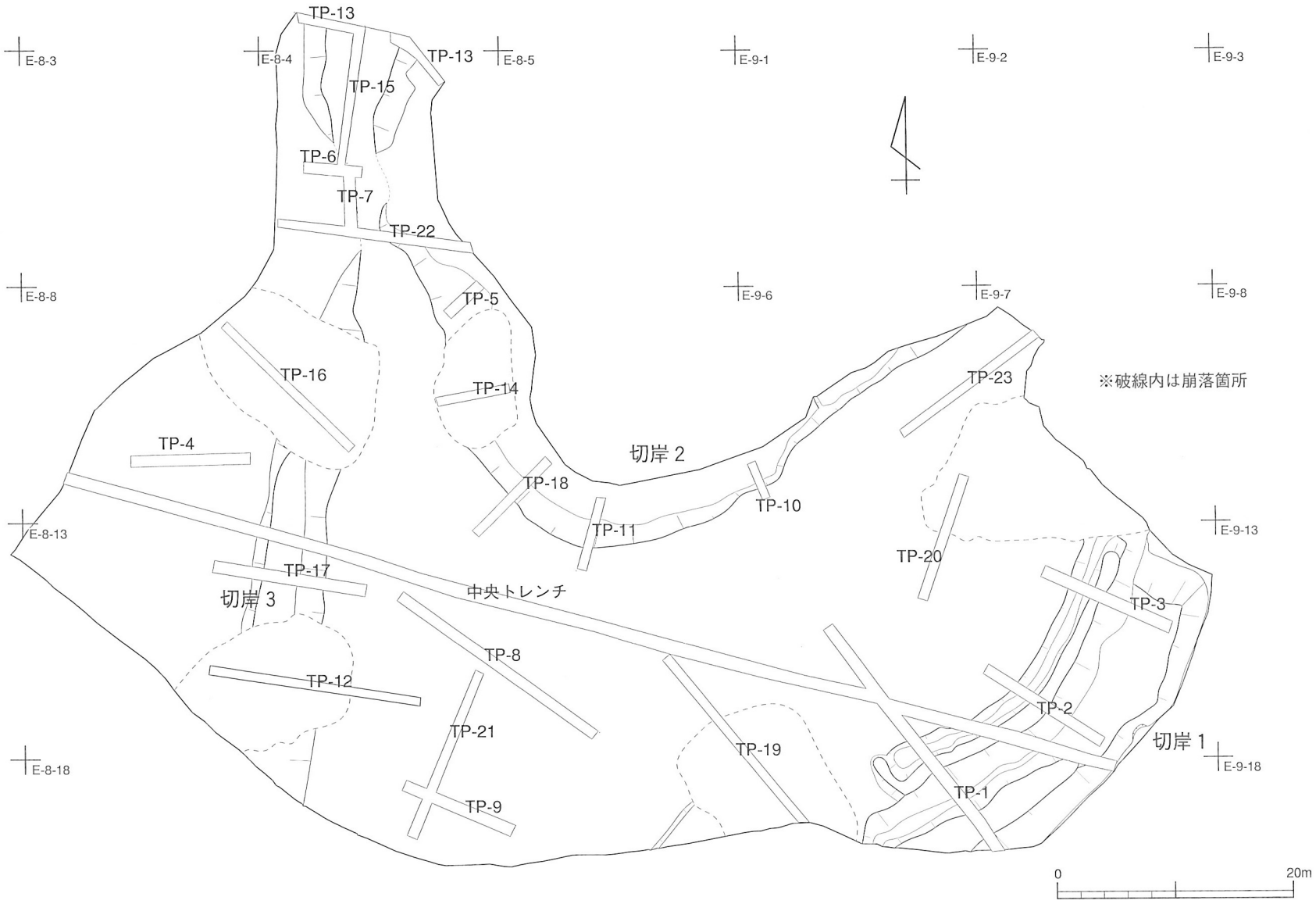
第11図　ＴＰ－12北壁土層図・ＴＰ－21西壁土層図（Ｓ＝１/80）

（2） 山城跡（第12～19図　図版１・４～８）

八幡山は南北に長く伸びた舌状の丘陵部である。山城は尾根筋を堀切で区切られた北部（北城）と南部（南城）に分かれ，本調査区は北城の一部に設定される。検出した遺構は，東部傾斜地と西部傾斜地において切岸を３箇所で確認した。切岸は傾斜地を利用して造られ，いずれも曲輪に連続しない特異な構造を呈し，尾根筋を取り囲むように配置される。端部は自然地形を活かし，急崖となって深い谷筋に接する。



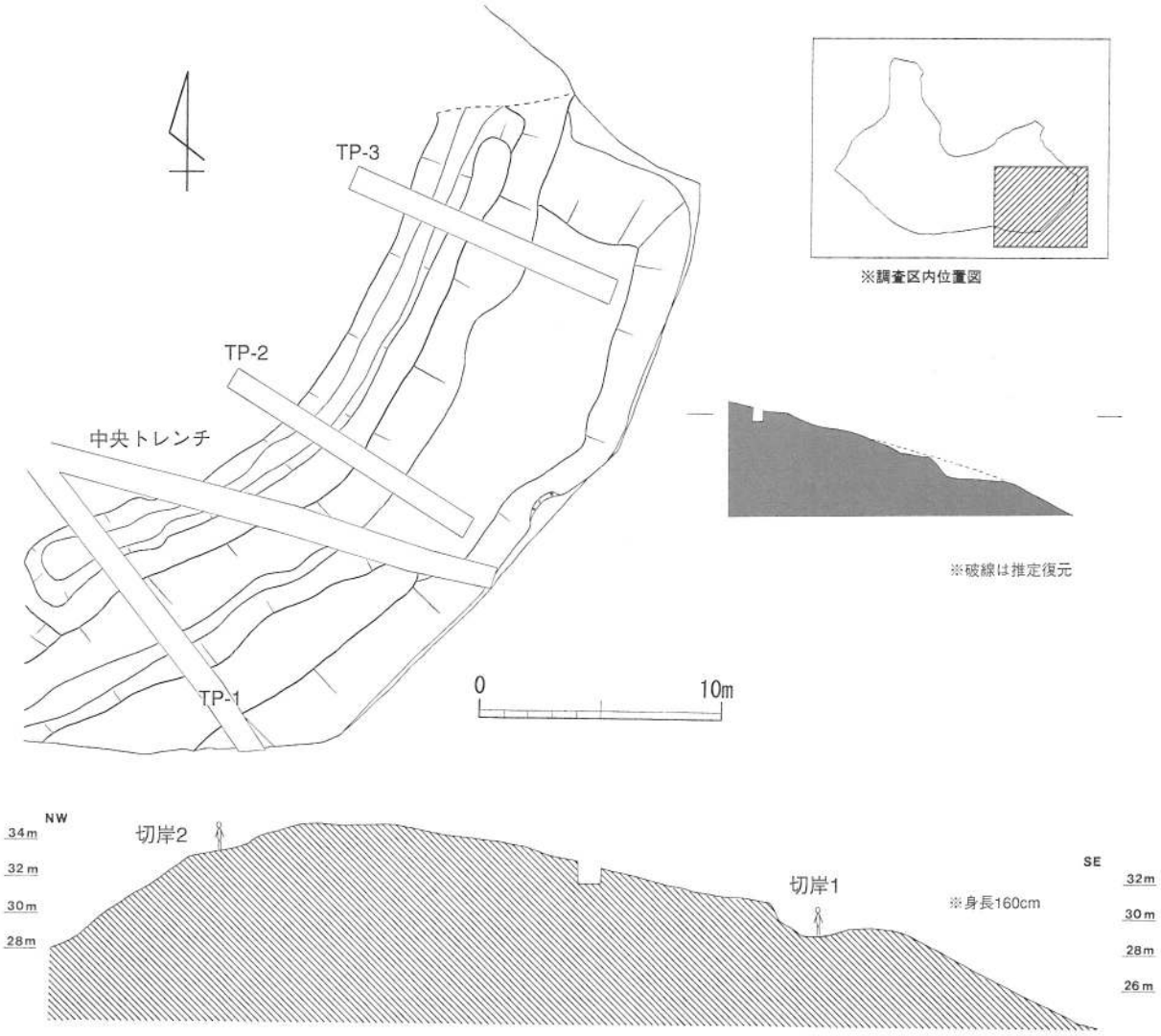
第12図　八幡山城跡（北城）と断面模式図（S＝1/2,000）



第13図　遺構配置図（S＝1/500）

・切岸１

調査区東側に位置し，切岸上に平坦面をもつ。最も急峻な部分では，裾部に対し，高さ約２ｍ，40°～70°を呈する。切岸下の平坦面には，切岸造成時の残土を使用したと考えられる土塁が築かれる。東斜面側に土塁をめぐらすが，明瞭でなく，わずかに南東側に確認される。土塁は残土が薄く，遺物は確認されなかった。



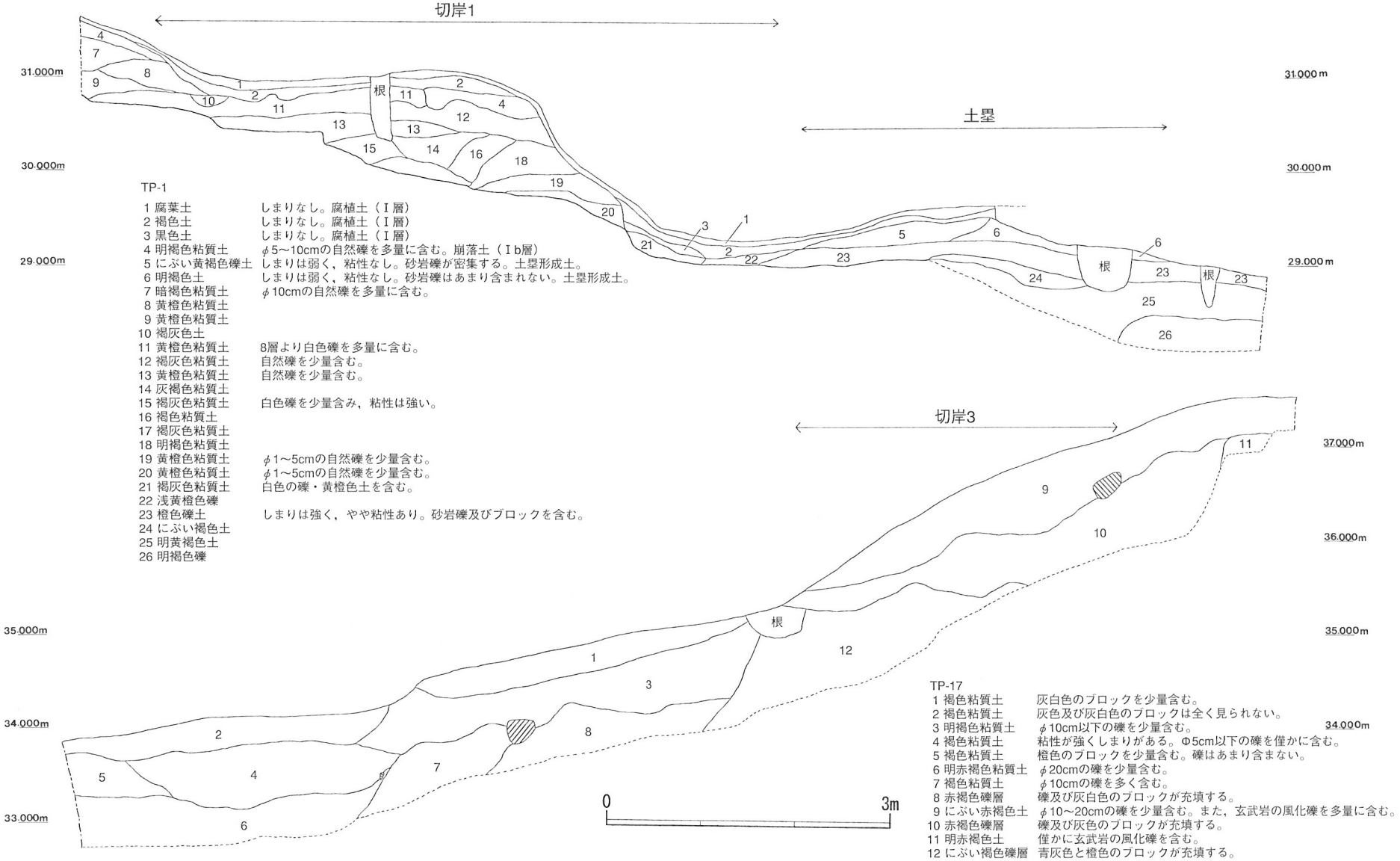
第14図　切岸１平面図（Ｓ＝１/300）と切岸１・２の位置関係

・切岸２

東部傾斜地の北側に位置する。北東端から派生し，北側へ延び，現在の八幡神社を囲み，切岸３へと連続すると推定される。最も急峻な部分では，裾部に対し，高さ約2.5m，約50°を呈する。

・切岸３

鞍部の西側に位置する。崩落が著しく，やや不明瞭な箇所もあるが，北端から南側へと延び，北城の南端の堀切に接する。最も急峻な部分では，裾部に対し，高さ約2.5m，約40°を呈する。



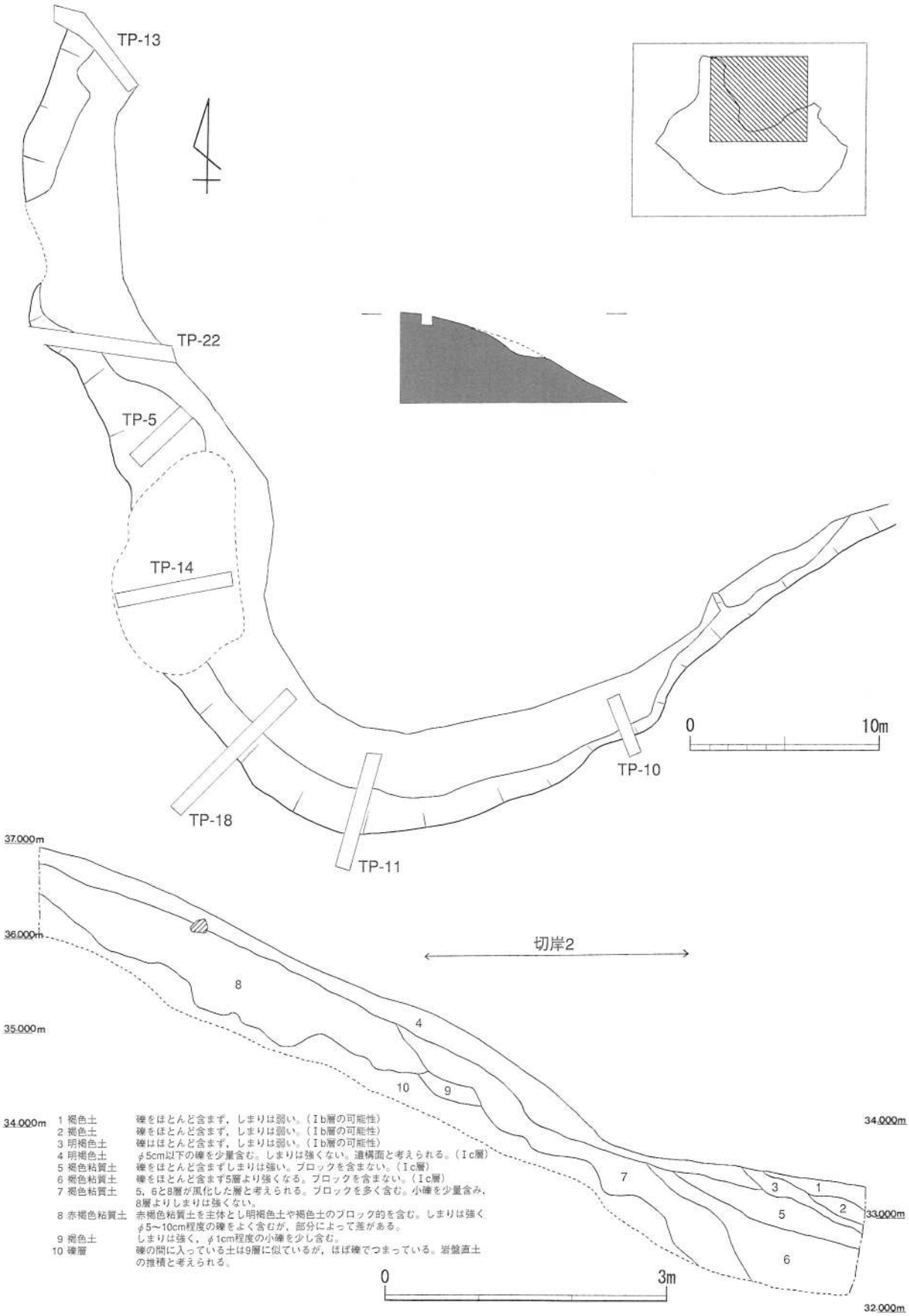
TP-1

1 腐葉土	しまりなし。腐植土（Ⅰ層）
2 褐色土	しまりなし。腐植土（Ⅰ層）
3 黒色土	しまりなし。腐植土（Ⅰ層）
4 明褐色粘質土	φ5～10cmの自然礫を多量に含む。崩落土（Ⅰb層）
5 にぶい黄褐色礫土	しまりは弱く，粘性なし。砂岩礫が密集する。土塁形成土。
6 明褐色土	しまりは弱く，粘性なし。砂岩礫はあまり含まれない。土塁形成土。
7 暗褐色粘質土	φ10cmの自然礫を多量に含む。
8 黄橙色粘質土	
9 黄橙色粘質土	
10 褐灰色土	
11 黄橙色粘質土	8層より白色礫を多量に含む。
12 褐灰色粘質土	自然礫を少量含む。
13 黄橙色粘質土	自然礫を少量含む。
14 灰褐色粘質土	
15 褐灰色粘質土	白色礫を少量含み，粘性は強い。
16 褐色粘質土	
17 褐灰色粘質土	
18 明褐色粘質土	
19 黄橙色粘質土	φ1～5cmの自然礫を少量含む。
20 黄橙色粘質土	φ1～5cmの自然礫を少量含む。
21 褐灰色粘質土	白色の礫・黄橙色土を含む。
22 浅黄橙色礫	
23 橙色礫土	しまりは強く，やや粘性あり。砂岩礫及びブロックを含む。
24 にぶい褐色土	
25 明黄褐色土	
26 明褐色礫	

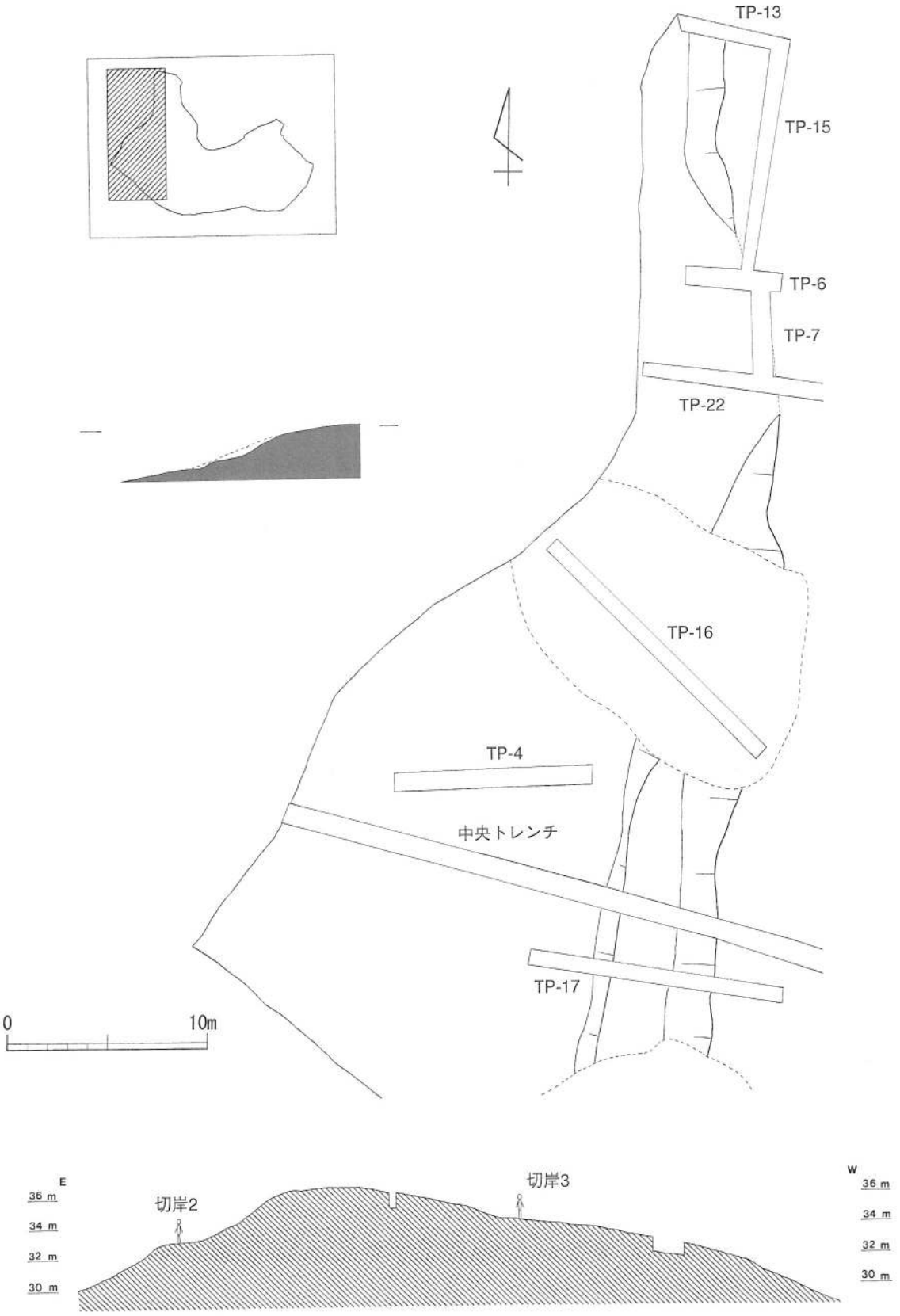
TP-17

1 褐色粘質土	灰白色のブロックを少量含む。
2 褐色粘質土	灰色及び灰白色のブロックは全く見られない。
3 明褐色粘質土	φ10cm以下の礫を少量含む。
4 褐色粘質土	粘性が強くしまりがある。Φ5cm以下の礫を僅かに含む。
5 褐色粘質土	橙色のブロックを少量含む。礫はあまり含まない。
6 明赤褐色粘質土	φ20cmの礫を少量含む。
7 褐色粘質土	φ10cmの礫を多く含む。
8 赤褐色礫層	礫及び灰白色のブロックが充填する。
9 にぶい赤褐色土	φ10～20cmの礫を少量含む。また，玄武岩の風化礫を多量に含む。
10 赤褐色礫層	礫及び灰色のブロックが充填する。
11 明赤褐色土	僅かに玄武岩の風化礫を含む。
12 にぶい褐色礫層	青灰色と橙色のブロックが充填する。

第15図　ＴＰ－１北壁土層図（切岸１）・ＴＰ－17北壁土層図（切岸３）（Ｓ＝１/60）



第16図　切岸２平面図（Ｓ＝１/300）とＴＰ－18北壁土層図（Ｓ＝１/60）



第17図　切岸３平面図（Ｓ＝１/300）と切岸２・３の位置関係

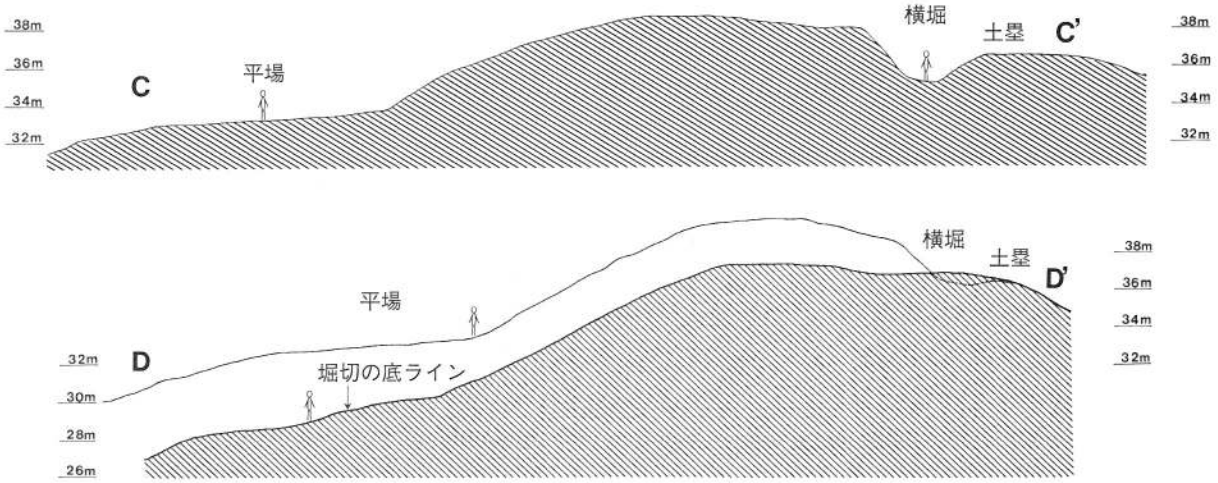
（3） 小　結

今回の調査では遺構や遺物が鞍部に集中することも想定されたが，遺構や遺物はほとんど確認されなかった。これは山麓の調査区で，住宅基礎の埋土から拳大の黒曜石の石核が出土したように，八幡山を形成する堆積土の流失があったためと考えられる。Ⅱ章で触れたように，地すべりが発生しやすいこの地域は，近代においても大規模な地すべりが発生している。また，八幡山の東西は急峻な崖で形成され，緩斜地は多くない。その結果，崩落が各所で見られ，崩落等による２次堆積土（Ⅰｂ層）が調査区全体を包含するような状況であった。

Ⅰｂ層を除去すると，山城の遺構である切岸を３箇所で確認できた。切岸は傾斜地を利用して造られ，いずれも平場に連続しない構造を呈し，尾根筋を取り囲むように配置される。切岸で囲まれた尾根筋は平坦ではなく，南から北・東方向へと緩斜する。つまり，平場と防御施設（切岸等）が伴っておらず，平場と一体化していない切岸の様相は特異である。さらに北城で確認された３箇所の切岸のうち，その形態は２種類あり，切岸１と切岸２・３は構成が異なる。切岸１が切岸上の平坦面と土塁を備えるのに対し，切岸２・３はそのどちらも備えていない。

北城を調査区外まで見てみると，切岸２は八幡神社のある北端を囲み，切岸３まで連続すると推定される。現在，八幡神社が位置しているこの北端は，眺望に富むことから，見張り台のような役割を担っていたと想定される。切岸３は北端から尾根筋に沿って南へと延びる。このため，南西側の平場は切岸３より外側に位置する。また，この平場の南端に沿って堀切が形成される。北城と南城を区切るこの堀切は，東側で北へ屈曲し，横堀となって，東側の谷筋に合流する。このように北城は，平場・切岸・横堀等で構成される。

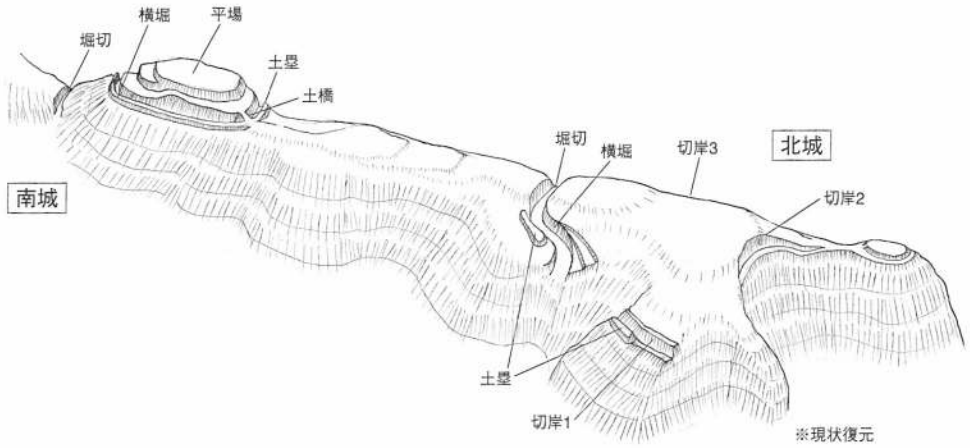
第18図は，南西側の平場と横堀・土塁，堀切の関係を断面的に示している。これは切岸１の断面図（第14図）と類似し，切岸１と横堀は東側を意識して備えられたと想定される。南城について少し触れると，南城は尾根を削平した平場を東側から取り囲む横堀と土塁で防御されている。これは北城の切岸１と横堀の様相と共通している。



第18図　北城の平場と横堀・堀切の断面図・断面見通図（Ｓ＝１/400）

山上氏によると「16世紀前半までの西日本の山城は曲輪形成が未発達で，防御拠点と駐屯地が分離した遺構が長く築城される。～尾根上の曲輪形成と防御拠点・駐屯地の一体化という，一般的な中世城郭の成立期という側面からみると，天文期の末頃がその確立期」としている（山上1990）。八幡山城跡の検出した切岸の形態差や北城・南城の共通性は，山上氏のいう防御施設と駐屯地が分離された時期とその後，防御施設と駐屯地が一体化した時期が存在するという可能性を示すと捉えられる。

廃棄年代を示す山城にとって，その痕跡が残った理由には，①大規模に改修する必要性がなかった（臨時的な城），②改修する対象箇所でないため残った（戦略的役割の変化），③時間的制約（諸勢力の強襲）があった可能性が考えられる。次章で触れる遺物についても，遺物の時期幅があることから，山城の古段階の痕跡を残す貴重な資料といえるかもしれない。（矢葺）



第19図　八幡山城跡俯瞰図（北東から）

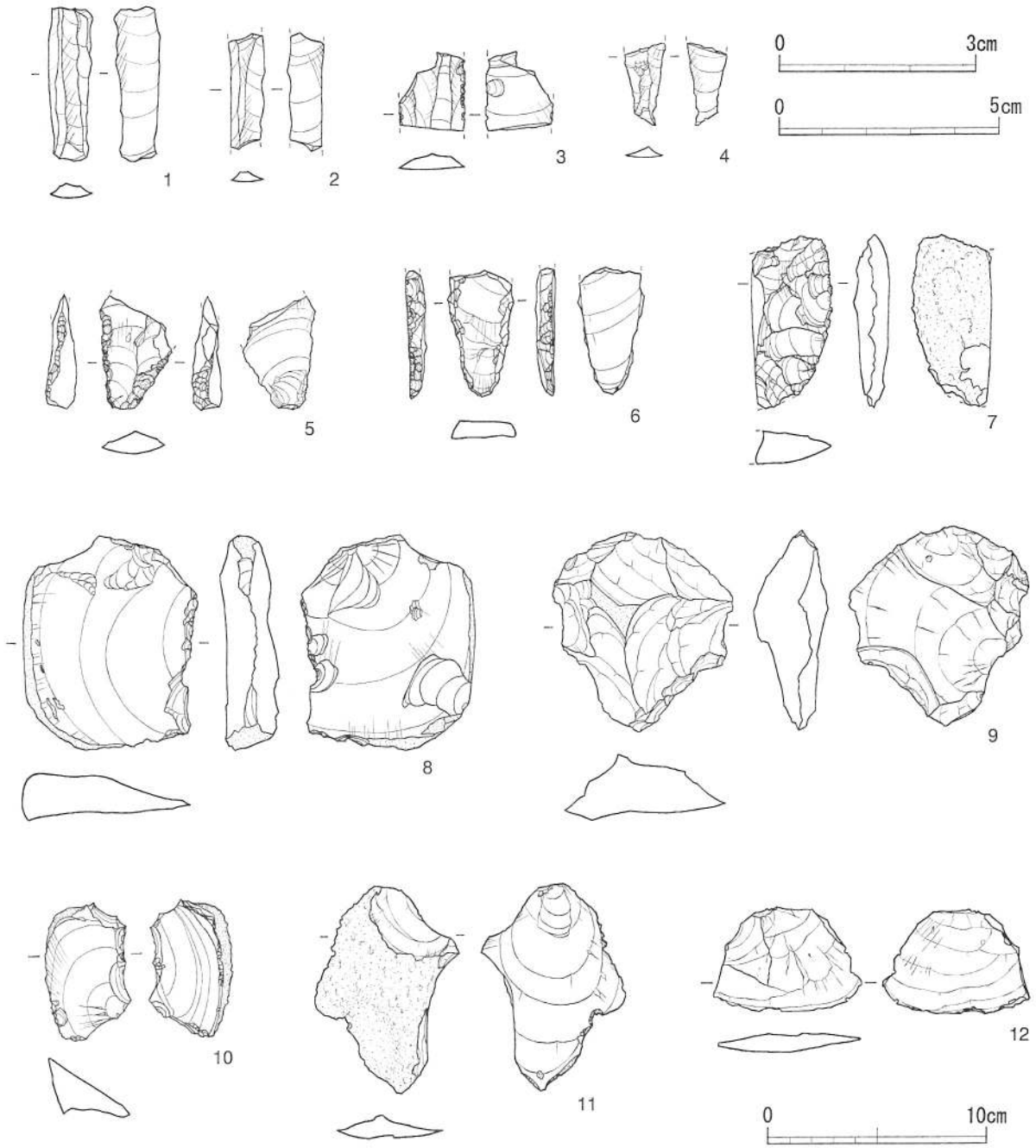
【参考文献】

千田嘉博　2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
西股総生　2009「縄張研究における遺構認識と年代観」『戦国時代の城 - 遺跡の年代を考える - 』高志書院
久村貞男　2000『井手平城跡』平成11年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書　佐世保市教育委員会
山上雅弘　1990「戦国時代の山城 - 西日本を中心とする15世紀後半～16世紀前半の山城について - 」『中世城郭研究論集』新人物往来社
2002「戦国時代前半の中世城郭の構造と変遷」『新視点中世城郭研究論集』新人物往来社

2　遺　物（第20～40図　第４～22表　図版14～26）

当該調査により，旧石器時代・縄文時代・弥生時代・中世・近世の遺物が約300点出土した。遺物は遺構からは確認されず，腐植土（Ⅰ層）と崩落等による二次堆積土（Ⅰｂ層）から主に出土した。各時代ごとに区分して報告する。

（１）　旧石器時代の遺物（第20図　第４表　図版14）



第20図　旧石器時代の遺物（１～４はＳ＝１/１，５～８・10はＳ＝２/３，９・11・12はＳ＝１/３）

1～4は細石刃である。1～3は表面に平坦部分が見られ，台形の断面を呈する。4は表面に鋭角な頂点を有するため三角形の断面を呈する。5・6はナイフ形石器である。5は二側縁に微細なブランティング加工を施す。6はブランティング加工がより急斜で，断面は台形を呈する。7・8・10はスクレイパーである。7・8は不純物が無く腰岳産の黒曜石と考えられる。7は表面右側縁に刃部を作り出す。表面は粗く二次加工を施し，裏面には自然面を残す。8は表面右側縁に刃部を作り出す。左側縁の一部に自然面を残す。9は安山岩製の両面調整石器である。10は表面右側縁に二次加工を施す。裏面右側縁に自然面を残す。11は安山岩製の剥片である。裏面右側縁に剥離部分が認められ刃部の可能性がある。表面に自然面を残す。12は安山岩製の剥片である。9～12は未製品の可能性がある。

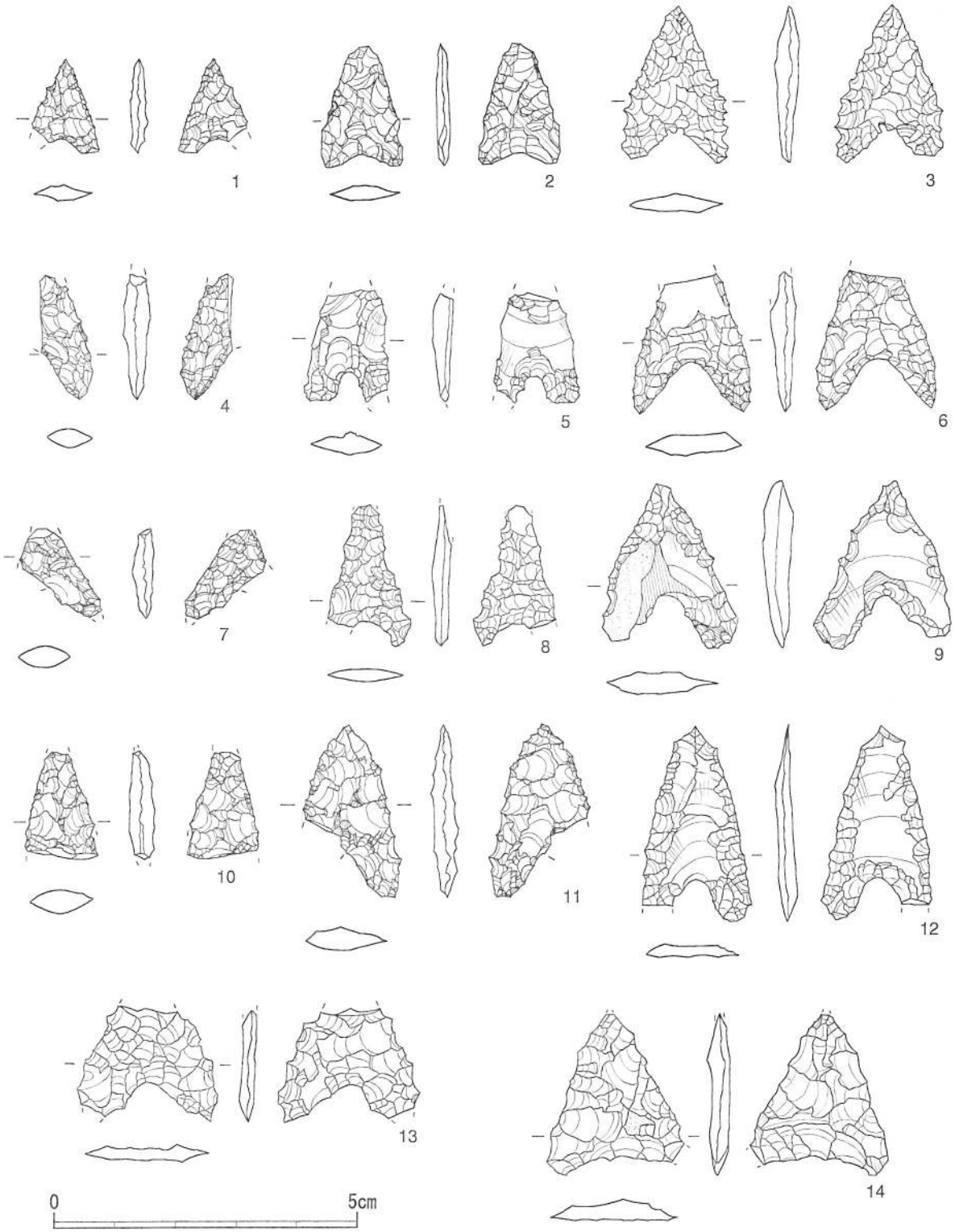
番号	調査地区	層位	器種	石種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	取上番号	備考
1	E－8－13	Ⅰb	細石刃	黒曜石	23.7	7.1	2.0	0.23	No.84	
2	E－8－13	Ⅰb	細石刃	黒曜石	18.0	5.8	1.9	0.13	No.250	
3	E－8－13	Ⅰb	細石刃	黒曜石	12.0	10.1	2.5	0.34	No.101	
4	E－8－14	Ⅱ	細石刃	黒曜石	12.7	6.5	1.8	0.06	No.209	
5	TP－3	Ⅰb	ナイフ形石器	黒曜石	26.5	16.1	5.0	2.01	－	腰岳産　範囲確認時に出土。
6	TP－4	Ⅰb	ナイフ形石器	黒曜石	29.0	15.0	4.3	2.22	－	腰岳産　範囲確認時に出土。
7	E－8－14	Ⅰb	スクレイパー	黒曜石	39.9	18.0	7.1	5.66	No.167	縄文時代の可能性あり。
8	E－8－14	Ⅱ	スクレイパー	黒曜石	49.5	40.5	11.5	28.67	No.210	
9	E－8－10	Ⅰc	両面調整石器	安山岩	92.2	82.6	30.5	158.00	No.201	
10	E－8－13	Ⅰb	スクレイパー	黒曜石	31.0	18.0	11.0	6.38	No.298	
11	E－8－15	Ⅰb	剥片	安山岩	95.4	65.8	10.8	69.09	No.164	
12	E－8－15	Ⅱ	剥片	安山岩	47.0	67.0	9.0	29.86	No.189	

第4表　遺物観察表（旧石器時代の遺物）

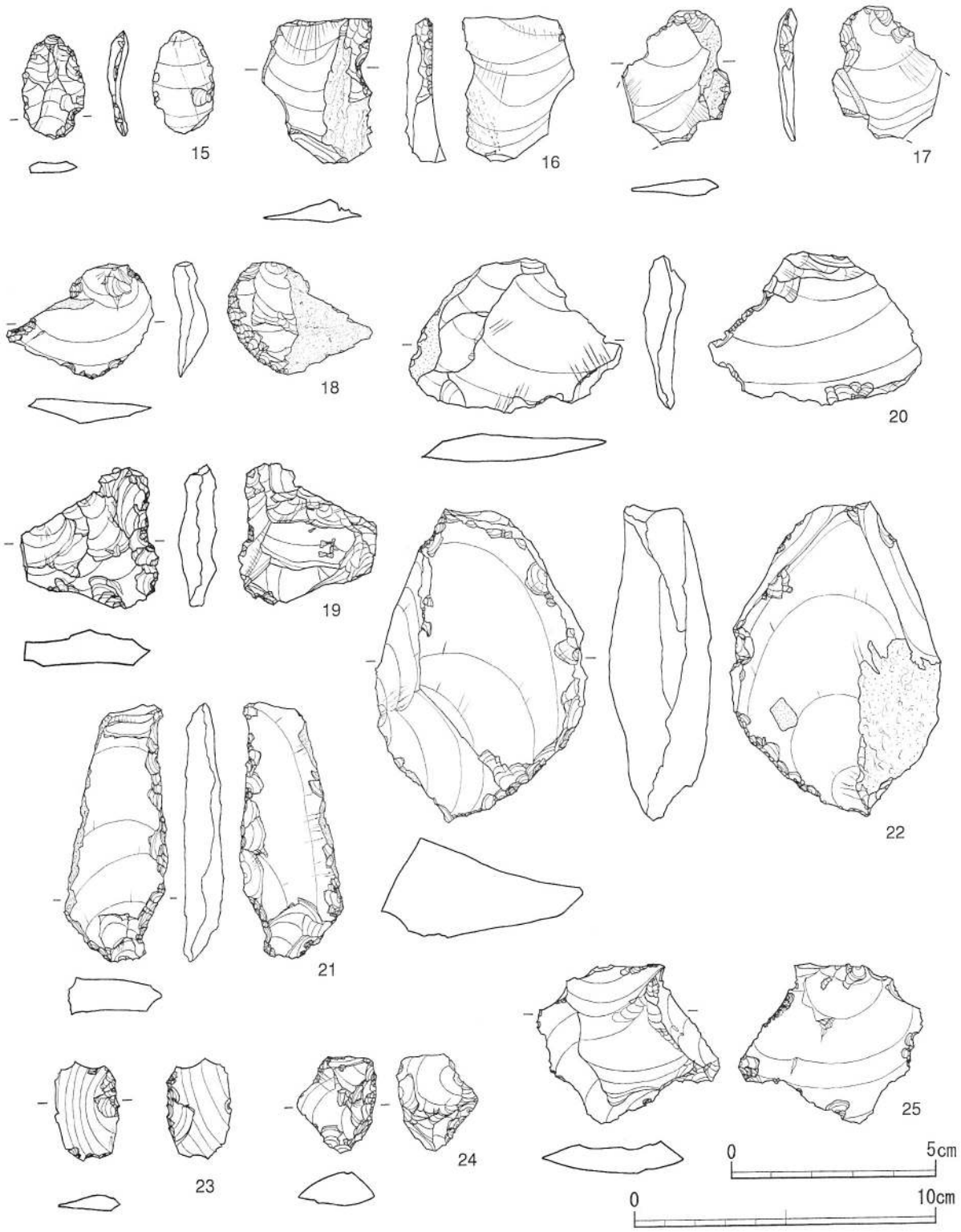
（2）　縄文時代の遺物（第21～23図　第5表　図版15～17）

1～14は黒曜石製の石鏃である。1は脚部を一部欠損する。2は抉りが浅い。胴部を中心に研磨を施し，厚さは均一である。局部磨製石鏃である。3は粗く二次加工を施す。両側縁は鋸歯状を呈する。4は全体の半分を欠損する。5は先端部と片脚の一部を欠損する。脚部は角状を呈する。剥片鏃である。6は先端部を欠損する。深い抉りが確認できる。7は先端部と両脚の一部を欠損する。8は先端部と片脚を欠損する。抉りが浅く，全体が二等辺三角形を呈する。9は抉りが深く，脚部は平坦で丸みを呈する。基部両面に研磨を施した局部磨製石鏃である。10は先端部と脚部を欠損する。11は片脚を欠損する。両側縁は粗く二次加工が施され鋸歯状を呈する。12は片脚の一部を欠損する。脚部は平坦で丸みを呈し，抉りはU字型を呈する。13は先端部と片脚の一部を欠損する。抉りは深い。14は先端部と片脚の一部を欠損し，抉りは浅い。研磨が僅かに確認できるが，意図的に行われたかは不明である。局部磨製石鏃の可能性がある。15～17はノッチである。15は表面の側縁に連続しない二次加工を施す。16は表面右側縁に抉りを入れ，刃部を作り出す。17は裏面左側縁に抉りを入れ，刃部を作り出す。18～25はスクレイパーである。18は裏面左側縁に二次加工を施す。刃部は弧状に外彎する。19は表面左側縁に細かな二次加工を施す。20は裏面左側縁に二次加工を施し，刃部を作り出す。21は両面から二次加工を施し裏面左側縁に刃部を作り出す。22は表面右側縁に二次加工を施し，刃部を作り出す。刃部は弧状に外彎する。23は裏面左側面に二次加工を施す。24は表面右側面に細かな二次加工

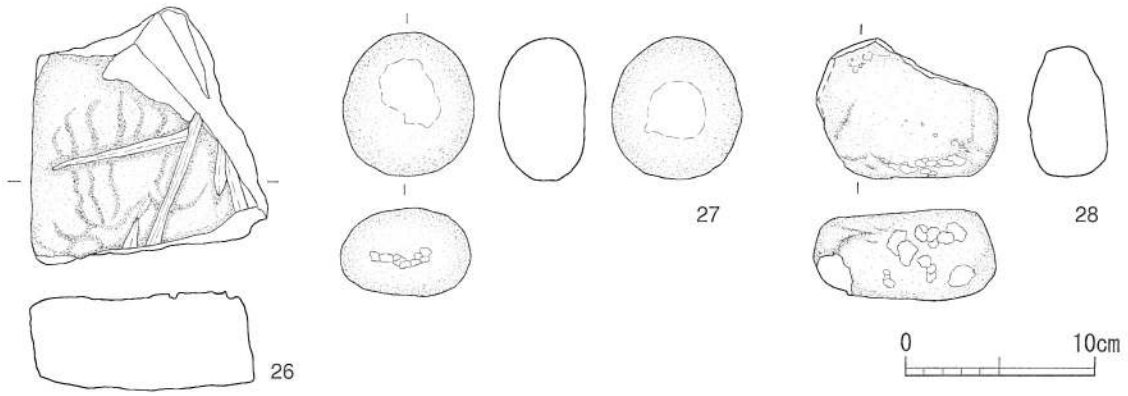
を施す。二重パティナが見られ旧石器時代の再利用品と考えられる。**25**は裏面左側縁に二次加工を施し，刃部を作り出す。**26**は砥石である。表面に溝が確認できる。**27**は磨石である。円形を呈し，両面に研磨痕，側面に敲打痕が確認できる。**28**は敲石である。側面に敲打痕が確認できる。



第21図　縄文時代の遺物①（S＝1／1）



第22図　縄文時代の遺物②（15～20・23～25はＳ＝２／３，21・22はＳ＝１／２）



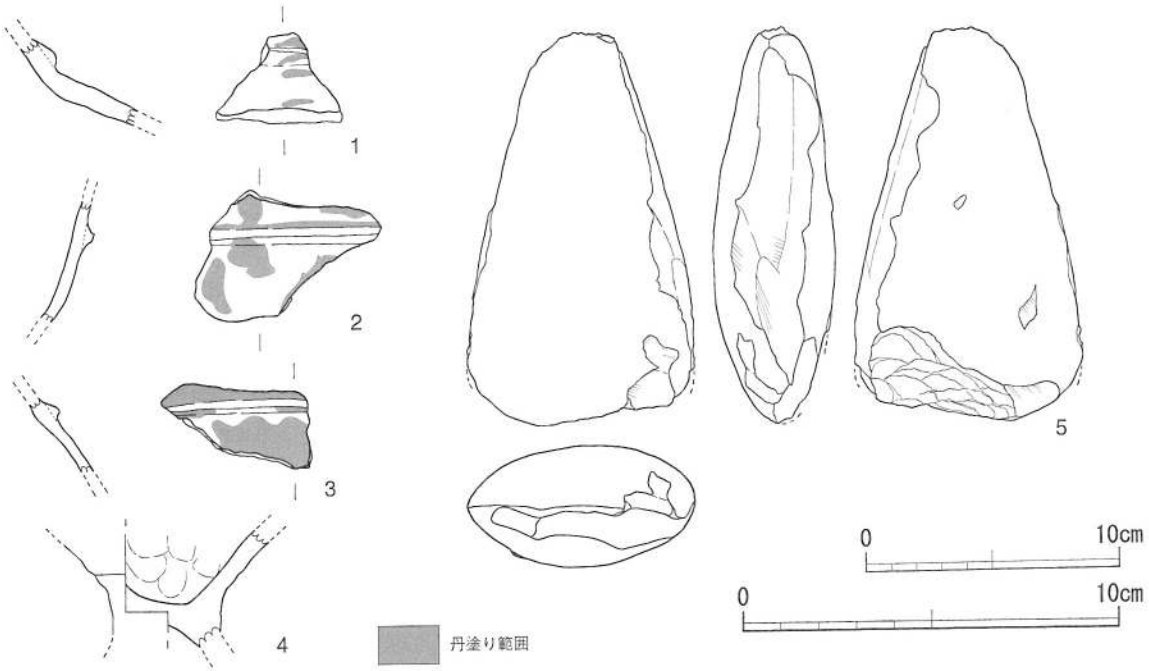
第23図　縄文時代の遺物③（S＝1／4）

番号	調査地区	層位	器種	石種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	取上番号	備考
1	E－8－13	Ⅰb	石鏃	黒曜石	15.0	11.0	2.5	0.24	No.257	
2	E－8－8	Ⅰ	石鏃	黒曜石	1.95	1.4	2.0	0.49	No.48	局部磨製石鏃
3	E－9－6	Ⅰb	石鏃	黒曜石	3.05	1.7	3.5	1.00	No.174	
4	E－8－8	Ⅰb	石鏃	黒曜石	20.5	8.5	3.2	0.46	No.255	
5	E－8－9	Ⅰb	石鏃	黒曜石	18.0	13.0	3.0	0.62	No.177	剥片鏃
6	E－8－9	Ⅱ	石鏃	黒曜石	23.0	16.0	3.5	1.06	No.67	
7	E－8－13	Ⅰb	石鏃	黒曜石	15.0	13.3	3.0	0.36	No.265	
8	E－8－10	Ⅰb	石鏃	黒曜石	23.5	14.0	3.0	0.58	No.105	
9	E－9－11	Ⅰb	石鏃	黒曜石	27.5	18.0	3.5	1.54	No.172	剥片鏃　局部磨製か。
10	E－9－11	Ⅰ	石鏃	黒曜石	18.0	12.0	4.0	0.69	No.1	
11	E－9－11	Ⅰb	石鏃	黒曜石	28.5	16.0	3.8	1.11	No.232	
12	E－8－4	Ⅰb	石鏃	黒曜石	32.5	15.5	2.5	1.24	－	
13	E－8－9	Ⅰb	石鏃	黒曜石	19.0	21.0	3.0	1.00	－	
14	－	表採	石鏃	黒曜石	27.0	22.0	35.0	1.96	No.3	
15	E－8－8	Ⅰb	ノッチ	黒曜石	26.0	15.0	5.0	1.30	No.114	
16	E－8－4	Ⅰb	ノッチ	黒曜石	35.5	25.0	5.0	5.80	No.40	
17	E－8－9	Ⅰb	ノッチ	黒曜石	33.0	27.0	5.0	2.84	No.149	
18	E－8－9	Ⅱ	スクレイパー	黒曜石	28.2	36.5	6.1	4.28	No.205	
19	E－8－10	Ⅰb	スクレイパー	黒曜石	35.0	34.5	9.0	10.04	No.166	
20	E－9－11	Ⅰb	スクレイパー	黒曜石	37.0	53.0	10.0	12.54	No.7	
21	E－8－8	Ⅰb	スクレイパー	安山岩	83.2	34.3	12.0	34.42	No.54	弥生時代の可能性あり。
22	E－8－8	Ⅰ	スクレイパー	安山岩	103.0	69.0	32.5	215.00	No.52	弥生時代の可能性あり。
23	E－8－15	Ⅰ	スクレイパー	黒曜石	24.0	16.0	3.0	1.05	No.28	
24	E－8－13	Ⅰb	スクレイパー	黒曜石	24.0	19.8	7.8	3.24	No.43	旧石器時代の再利用品か。
25	E－8－15	Ⅰ	スクレイパー	黒曜石	39.1	44.5	7.5	8.60	No.9	
26	表採	－	砥石	砂岩	120.5	120.5	51.0	980.00	－	
27	表採	－	磨石	安山岩	74.5	69.5	45.0	357.00	－	
28	E－9－11	Ⅰb	敲石	蛇紋岩	73.5	95.2	41.5	490.00	No.182	

第5表　遺物観察表（縄文時代の遺物）

（3）　弥生時代の遺物（第24図　第6表　図版17）

1～3は甕もしくは壺の胴部である。**1～3**は外面に僅かに丹塗りが見られる。内外面にナデを施す。**4**は杯の底部である。外面上部はナデを施し外面下部は磨滅する。内面にはナデを施し指頭圧痕が残る。底部内面はシボリ痕が残る。**5**は蛇紋岩製の磨製石斧である。



第24図　弥生時代の遺物（1～4はS＝1/3，5はS＝1/2）

番号	調査地区	層位	種類	器種	法量（cm）			調整		焼成	色調		胎土	取上番号	備考
					口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			
1	E－8－8	Ⅰb	弥生土器	甕か壺	－	－	3.5	ナデ	ナデ	良好	橙色	明黄褐色	やや粗雑 角閃石・石英・雲母	No.136	外面丹塗り
2	E－8－8	Ⅰb	弥生土器	甕か壺	－	－	4.8	ナデ	ナデ	良好	明赤褐色	にぶい橙色	やや粗雑 長石・石英・角閃石・雲母	No.270	外面丹塗り
3	E－8－8	Ⅰb	弥生土器	甕か壺	－	－	3.0	ハケ	ナデ	良好	明赤褐色	にぶい橙色	やや粗雑 長石・石英・角閃石・雲母	No.117	外面丹塗り
4	E－9－12	－	弥生土器	杯	－	－	1.8	ナデ	ナデ	良好	にぶい褐色	にぶい橙色	やや粗雑 長石・赤色粒子	No.184	
番号	調査地区	層位	器種	石種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	取上番号	備考					
5	E－8－4	Ⅰ	磨製石斧	蛇紋岩	105.0	60.0	32.0	23.50	No.141	縄文時代の可能性あり。					

第6表　遺物観察表（弥生時代の遺物）

	細石刃	ナイフ形石器	石鏃	スクレイパー	ノッチ	敲石	砥石	磨石	石斧	剥片	砕片	石核	原石	合計
旧石器時代	4	2		3						11	9	2		31
縄文時代			14	8	3	1	1	1		21	45	2	3	99
弥生時代									1					1

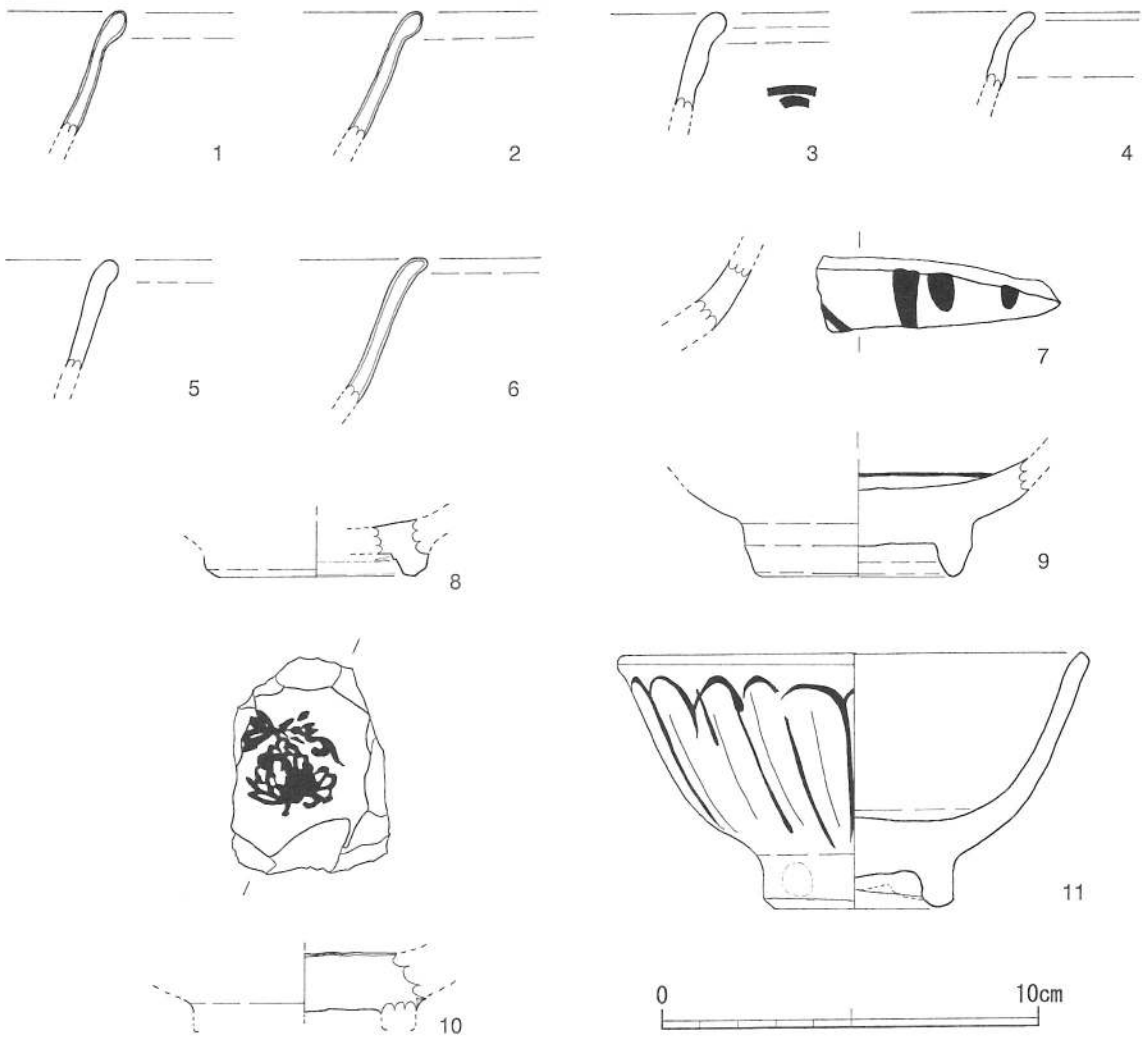
第7表　石器組成表

（4）　中世の遺物（第25～31図　第8～15表　図版18～24）

・中世の遺物①　青磁（第25図　第9表　図版18）

1～11は碗である。1・2は口縁部から体部上半まで残存し玉縁状口縁を呈する。**1**は施釉が厚く，胎土は赤褐色で白色粒子が混入する。**2**は灰色の胎土に白色粒子の混入が見られる。胎土の一部が赤

色を呈する。3～5は口縁部が残存する。3・4は口縁部が外反する。**3**は口縁部外面に沈線を2条施す。**4**の施釉は透明度が高く貫入が入る。**5**の釉調はオリーブ灰色で貫入が入る。**6**は口縁部から体部下半まで残存する。口縁部は外反し，釉は厚く施す。**7**は体部である。片切彫もしくは丸彫りで蓮弁を表現するが蓮弁の盛り上がりは無い。**8**は底部である。高台畳付の釉は削り取らず，高台内面は露胎である。**9**は底部である。見込みに沈線が1条巡る。高台内外面から内傾して削るため畳付きの幅は狭い。施釉は高台内面の釉を輪状に削り取る。**10**は底部が残存する。見込みに印花文を施す。高台内面は露胎である。**11**は体部が高台から直線的に立ち上がり，口縁部はやや外反する。片切彫もしくは丸彫で蓮文を施すが蓮弁の盛り上がりは無い。高台内面は露胎である。



第25図　中世の遺物①（S＝1／2）

種類	輸入					国産			合計
	中国			朝鮮					
	青磁	白磁	青花	磁器	陶器	陶器	瓦質土器	土師質土器	
点数(点)	25	31	34	0	11	7	6	30	144
割合(%)	17.4	21.5	23.6	0.0	7.6	4.9	4.2	20.8	100.0

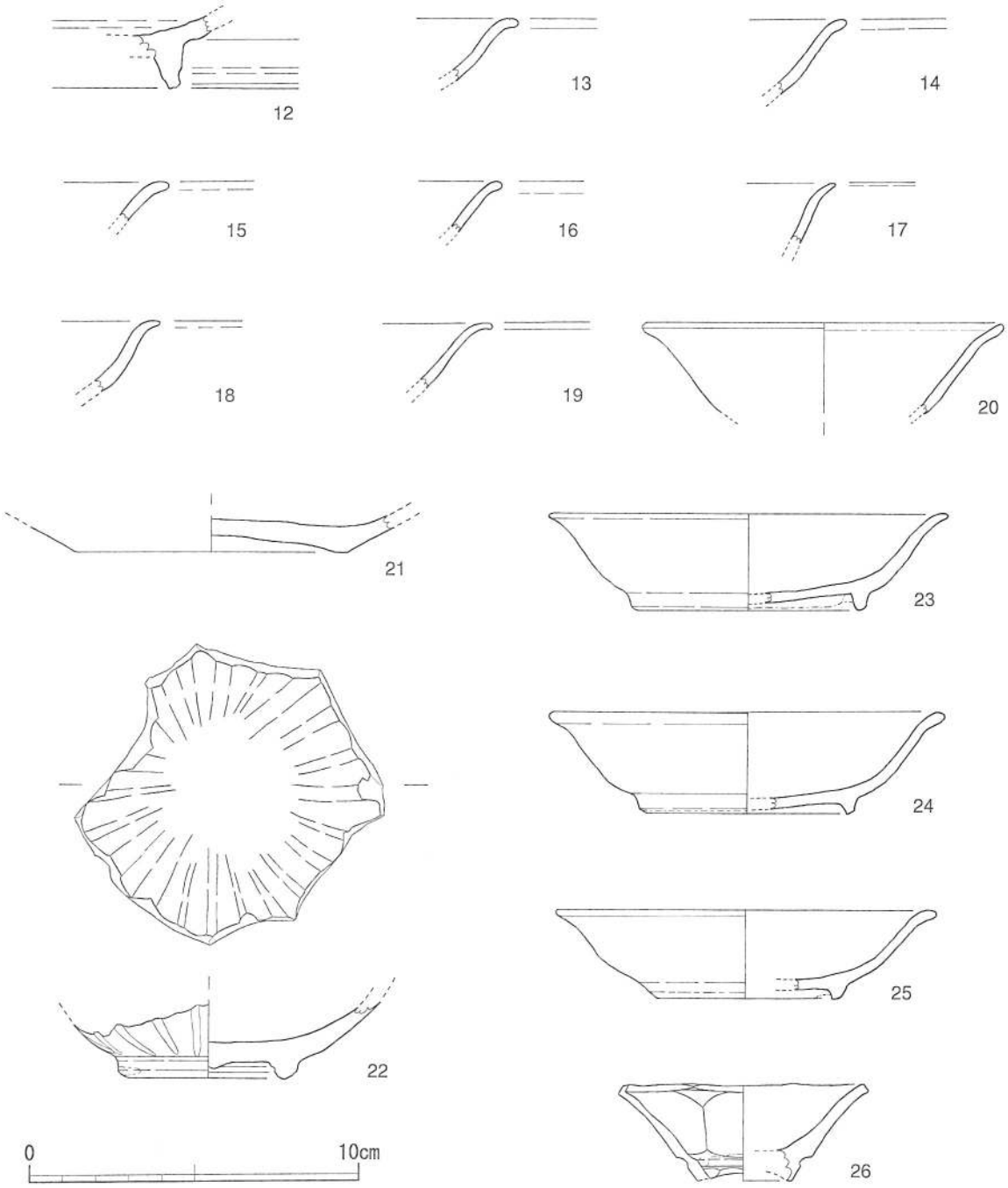
第8表　中世の遺物組成表

番号	調査地区	層位	種類	器種	法量（cm）			胎土	色調		取上番号	備考
					口径	底径	器高		外面	内面		
1	E-8-14	Ⅰ	青磁	碗	－	－	3.3	精緻 白色粒子	灰オリーブ色	オリーブ黄色	No.14 他	
2	E-8-19	Ⅰb	青磁	碗	－	－	3.3	やや精緻 白色粒子	オリーブ灰色	オリーブ灰色	No.286	龍泉窯系
3	E-8-13	Ⅰb	青磁	碗	－	－	2.3	精緻 黒色粒子	灰白色	灰オリーブ色	No.71	龍泉窯系　D類
4	E-8-14	Ⅰ	青磁	碗	－	－	2.1	精緻	オリーブ灰色	灰色	No.139	龍泉窯系　D類か。
5	TP4	2	青磁	碗	－	－	2.9	精緻 白色粒子	オリーブ灰色	オリーブ灰色	－	龍泉窯系　C類
6	E-8-14	Ⅰ	青磁	碗	－	－	3.8	精緻 黒色粒子	明緑灰色	明緑灰色	No.23	龍泉窯系　D類
7	E-8-15	Ⅰ	青磁	碗	－	－	1.9	やや精緻 黒色粒子	オリーブ黄色	灰オリーブ色	No.16	龍泉窯系　B類
8	E-8-13	Ⅰ	青磁	碗	－	－	1.5	精緻	明オリーブ色	暗緑灰色	No.64	龍泉窯系
9	E-8-8	Ⅰ/Ⅰb	青磁	碗	－	5.0	3.1	精緻	明緑灰色	明オリーブ灰色	No.46他	龍泉窯系
10	E-8-13	Ⅰb	青磁	碗	－	－	1.6	精緻	灰オリーブ色	オリーブ灰色	No.32	龍泉窯系
11	E-8-13他	Ⅰb	青磁	碗	12.1	4.3	6.7	精緻	灰オリーブ色	灰オリーブ色	No.42他	龍泉窯系　B類

第9表　遺物観察表（中世の遺物①）

・中世の遺物②　白磁（第26図　第10表　図版19）

12は碗底部である。施釉は灰オリーブ色を呈し，高台内面は露胎である。ケズリによる沈線が見込みに2条，高台外面に1条確認出来る。高台断面は三角形を呈する。13～25は皿で，13～19・23～25は端反りの口縁部である。**13**は体部下半まで残存する。口縁部はケズリによって丸みがある。胎土は黒色粒子を含み，施釉は灰白色を呈する。16に類似する。**14**は体部下半まで残存する。**15**は胎土が精緻で，施釉はやや緑がかった灰白色を呈する。25に類似する。**16**の口縁部はケズリによってやや丸みがある。外面の一部に焼成時の融着が見られる。**17**の施釉は灰白色を呈し光沢が無い。**18**は体部下半まで残存する。釉は光沢があり，やや黄みがかった灰白色を呈する。**19**は器壁が薄く，口縁部はケズリによって角がある。施釉は浅黄橙色を呈し光沢が無い。**20**は口禿げ口縁で外面に成形の際についた起伏が確認できる。口縁部は外反する。**21**は体部下半から底部まで残存する。底部は上げ底を呈する。施釉は光沢があるが，見込みには貫入が見られ気泡を含む。外面は露胎である。胎土はやや粗雑で灰色を呈する。**22**は体部下半から底部まで残存する菊皿である。内外面ともケズリによって花弁を表す。高台内は粗く削り取り，中央部がやや突出する。施釉はやや緑がかった灰白色を呈し貫入が入る。胎土は黄褐色で粗い。**23**は口縁部から底部まで残存する。高台畳付きのみ露胎である。**24**は口縁部から底部まで残存する。高台畳付きのみ露胎である。外面に成形の際のケズリが確認できる。施釉は淡黄色を呈する。**25**は口縁部から底部まで残存する。高台畳付きのみ露胎である。施釉はやや緑がかった灰白色を呈し，胎土は黒色粒子を含む。**26**は杯である。外面に面取りを施し多角を呈する。口縁部は端部を斜めに成形し角状を呈する。体部下半を露胎とし，高台に弧状の抉り込みを入れる。施釉は灰白色を呈し光沢がある。



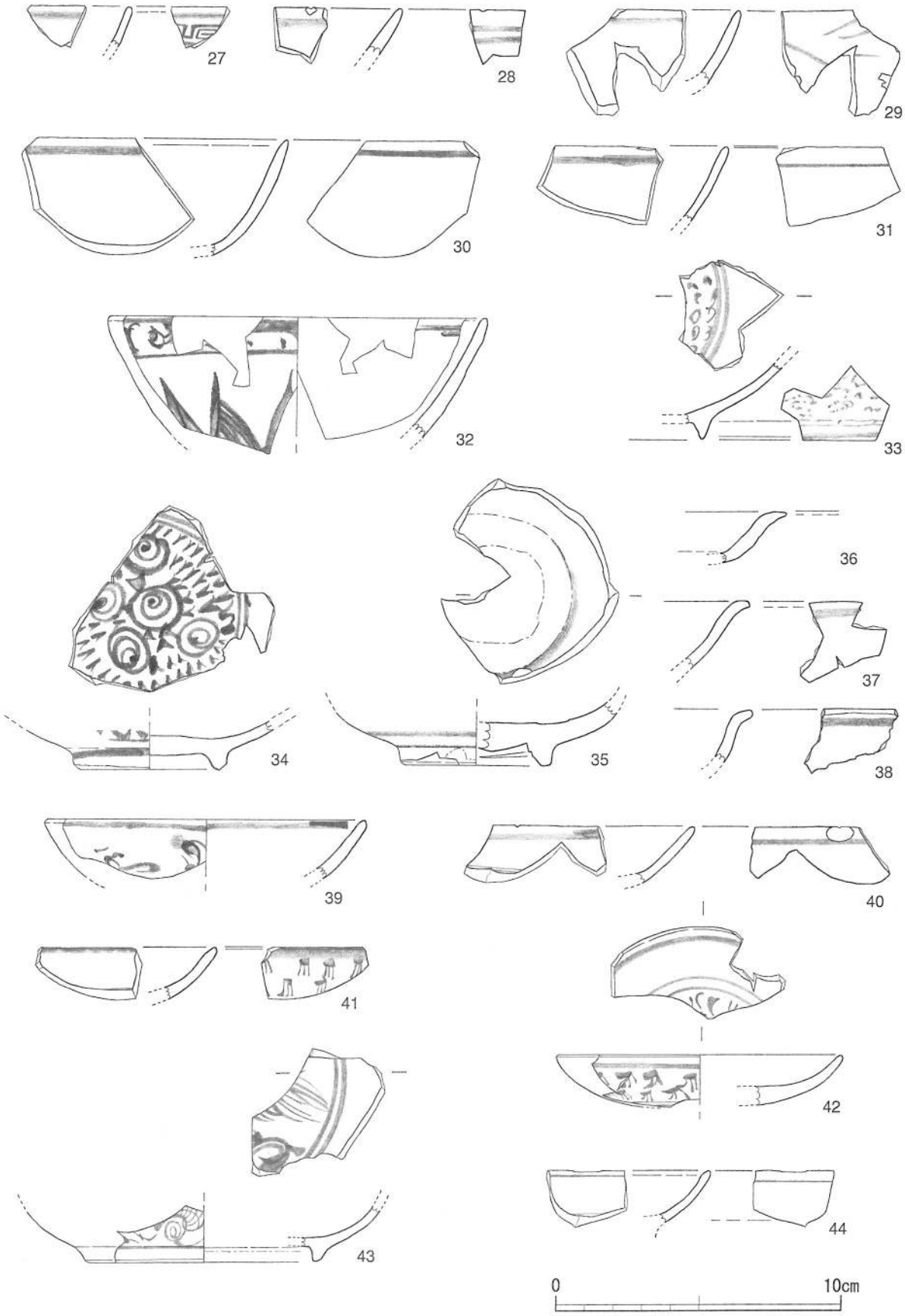
第26図　中世の遺物②（S＝1／2）

番号	調査地区	層位	種類	器種	法量（cm）			胎土	色調		取上番号	備考
					口径	底径	器高		外面	内面		
12	E-8-8	Ⅰb	白磁	碗	－	－	2.2	精緻 黒色粒子	明オリーブ 灰色	明オリーブ 灰色	No.158	福建産か。
13	E-8-14	Ⅰb	白磁	皿	－	－	1.8	精緻 黒色粒子	灰白色	灰白色	No.142	E群か。
14	E-8-8	Ⅰb	白磁	皿	－	－	2.0	精緻 黒色粒子	灰白色	灰白色	No.55	E－2群
15	E-8-13	Ⅰb	白磁	皿	－	－	1.2	精緻	灰白色	灰白色	No.104	E－2群
16	E-8-13	Ⅰb	白磁	皿	－	－	1.5	精緻	灰白色	灰白色	No.300	E群か。
17	E-8-8	Ⅰb	白磁	皿	－	－	1.8	精緻 黒色粒子	灰白色	灰白色	No.161	E－2群
18	E-8-8	Ⅰb	白磁	皿	－	－	2.1	精緻	灰白色	灰白色	No.191	E－2群
19	E-8-8	Ⅰb	白磁	皿	－	－	2.0	精緻 黒色粒子	浅黄橙色	淡黄色	No.281	E－2群
20	E-8-9	Ⅰb	白磁	皿	10.9	－	2.6	精緻 黒色粒子	灰白色	灰白色	No.70	A群
21	E-8-4	Ⅰ	白磁	皿	－	－	1.1	やや精緻 黒色粒子	灰色	灰褐色	No.24	A群か。
22	E-8-8	Ⅰb	白磁	皿	－	4.6	2.4	精緻	灰白色	灰白色	No.235	E－4群　福建産か。
23	E-8-8	Ⅰb	白磁	皿	11.9	－	2.9	精緻	灰白色	灰白色	No.56他	E－2b群
24	E-8-8	Ⅰb	白磁	皿	11.9	6.0	3.0	精緻	淡黄色	淡黄色	No.147他	E－2b群
25	E-8-13 他	Ⅰ/Ⅰb	白磁	皿	11.4	－	2.4	精緻 黒色粒子	灰白色	灰白色	No.36 他	E－2b群
26	E-8-13	Ⅰb	白磁	杯	7.2	－	2.9	精緻	灰白色	灰白色	No.93他	D群　多角杯

第10表　遺物観察表（中世の遺物②）

・中世の遺物③　青花（第27図　第11表　図版20・21）

27～35は碗である。**27**は口縁部片で直口縁である。施文は口縁部内外面に一重圏線，外面に雷文を描く。施釉はやや厚く，胎土は黄味がかる。**28**は口縁部片で直口縁である。施文は口縁部外面に二重圏線，口縁部内面に一重圏線を描く。胎土は黄白色で黒色粒子を含む。**29**は口縁部から体部上半まで残存する。口縁部はやや内湾する。施文は内外面に描き，内面は一重圏線を施す。胎土は黄白色で，施釉は淡黄色を呈する。**30**は口縁部から体部下半まで残存する。施文は口縁部内外に一重圏線を描く。施釉は光沢があり，口縁部外面に厚く掛かる。**31**は口縁部から体部上半まで残存する。施文は口縁部内外面に一重圏線を描く。**32**は口縁部から体部上半まで残存する。施文は内外面に描き，外面には芭蕉葉文を施す。貫入が全面に入り光沢がある。胎土はやや粗雑でにぶい黄橙色を呈する。**33**は体部下半から高台まで残存する。見込みがやや高台内に凹むことから蓮子碗と考えられる。施文は外面と見込みに小花文と思われる文様を密に描く。施釉はやや厚い。畳付は釉剥ぎを施す。胎土はやや粗雑で，にぶい黄橙色を呈する。**34**は体部下半から底部まで残存する。施文は見込みに渦状と矢羽状の文様を描く。畳付には砂が付着する。**35**は体部下半から底部まで残存する。見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。高台内面が露胎である。施釉は均等に施されず呉州の発色が悪い。36～44は皿である。**36**は口縁部から体部下半まで残存し，口縁部は外反する。外面は成形の際に出来た起伏が見られる。胎土は黄白色で施釉は浅黄橙色を呈し貫入が入る。**37**は口縁部から体部上半まで残存し口縁部は外反する。施文は口縁部外面に一重圏線を描く。全面に貫入が入る。胎土は黄白色で施釉は灰白色を呈する。38に類似する。**38**は口縁部から体部上半まで残存し口縁部は外反する。施文は口縁部内外面に一重圏線を描く。



第27図　中世の遺物③（S＝1／2）

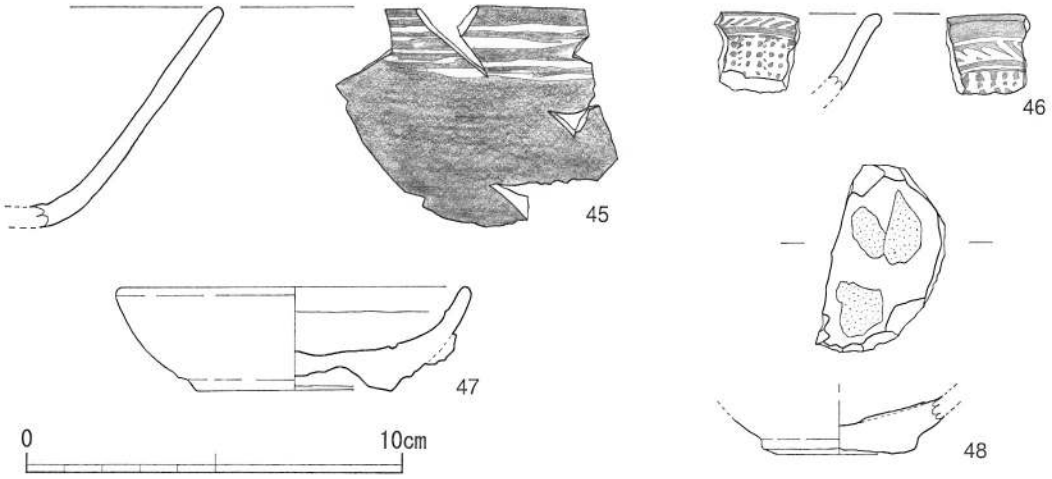
全面に貫入が入る。胎土は黄白色で施釉は灰白色を呈する。**39**は口縁部から体部上半まで残存する。施文は内外面に施す。施釉は口縁部外面に厚く掛かる。施釉に気泡が見られる。**40**は口縁部から体部下半まで残存し内湾する。内外面に一重圏線を施し，見込みにも施文が僅かに確認できる。全面に貫入が入る。胎土はやや粗雑で灰黄色を呈する。**41**は口縁部から体部下半まで残存する。施文は口縁部内外面に一重圏線を施し，体部外面に梵字文を描く。施釉は口縁部内外面に厚く掛かる。**42**は口縁部から体部下半まで残存する。施文は口縁部内外面に一重圏線，体部外面に梵字文を描く。施釉はやや厚い。**43**は体部下半から底部まで残存する。施文は見込みに描いた玉取獅子が僅かに確認できる。高台内面の一部と畳付は露胎である。**44**は口縁部から体部下半が残存する。施文は口縁部内外面と見込みに一重圏線を描く。

番号	調査地区	層位	種類	器種	法量（cm）			胎土	色調		取上番号	備考
					口径	底径	器高		外面	内面		
27	E-8-13	Ⅰb	青花	碗	－	－	1.4	精緻	灰白色	灰白色	No.228	福建産
28	E-8-13	Ⅰb	青花	碗	－	－	1.6	精緻 黒色粒子	浅黄色	灰黄色	No.263	福建産
29	E-8-8	Ⅰ	青花	碗	－	－	2.6	やや精緻 黒色粒子	淡黄色	淡黄色	No.131 他	福建産
30	E-8-8	Ⅰ	青花	碗	－	－	4.0	精緻	明緑灰色	明緑灰色	No.65他	景徳鎮窯系
31	E-8-13	Ⅰb	青花	碗	－	－	2.7	精緻	灰白色	明緑灰色	No.287	景徳鎮窯系
32	E-8-8	Ⅰb/2	青花	碗	13.2	－	4.8	やや精緻	灰白色	灰白色	No.271	福建産
33	E-8-13	Ⅰ/Ⅰb	青花	碗	－	－	2.7	やや精緻	明緑灰色	明オリーブ灰色	No.25他	景徳鎮窯系　C群(Ⅲ)
34	E-8-8	Ⅰ/Ⅰb	青花	碗	－	4.8	1.75	精緻 黒色粒子	明緑灰色	明緑灰色	No.137 他	福建産
35	E-8-8	Ⅰb	青花	碗	－	5.0	2.25	精緻 黒色粒子	浅黄橙色	浅黄色	No.108 他	福建産
36	E-8-13	Ⅰ	青花	皿	－	－	1.8	精緻 黒色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	No.78 他	福建産
37	E-8-8	Ⅰb	青花	皿	－	－	2.4	精緻	灰白色	灰白色	No.125他	福建産
38	E-8-13	Ⅰb	青花	皿	－	－	1.8	精緻	灰白色	灰白色	No.269	福建産
39	E-8-13	Ⅰb	青花	皿	6.2	－	2.05	やや精緻	灰白色	明オリーブ灰色	No.45他	福建産
40	E-8-13	Ⅰ/Ⅰb	青花	皿	－	－	2.0	やや精緻	明オリーブ色	明オリーブ色	No.81他	福建産
41	E-8-13	Ⅰb	青花	皿	－	－	1.8	精緻	明緑灰色	明青灰色	No.216	景徳鎮窯系か。C群(Ⅱ)
42	E-8-13	Ⅰb	青花	皿	9.8	－	1.8	精緻	明青灰色	明青灰色	No.61他	景徳鎮窯系　C群(Ⅱ)
43	E-8-8	Ⅰb	青花	皿	－	8.0	2.0	精緻	明青灰色	明オリーブ灰色	No.187	景徳鎮窯系　B_1群(Ⅶ)
44	E-8-13	Ⅰ	青花	皿	－	－	2.0	精緻	灰白色	灰白色	No.138	福建産

第11表　遺物観察表（中世の遺物③）

・中世の遺物④　朝鮮系陶器（第28図　第12表　図版21）

45・46・48は碗である。**45**は口縁部から体部下半まで残存する。体部は直線的な器形で口縁部も直口を呈する。外面には白化粧土による刷毛目を施す。胎土は灰黄色で白色粒子を含む。**46**は口縁部が残存し，やや外反する。文様は菊花文をつないだ集団連圏文を施し，白化粧土で表す。**47**は皿である。内面にケズリによって凸線が１条巡る。見込みと高台内面に重ね焼きの痕跡が認められる。体部外面に別個体の融着が見られる。**48**は底部が残存する。見込みと高台に砂目跡が見られる。灰黄色の胎土に白色粒子を含む。



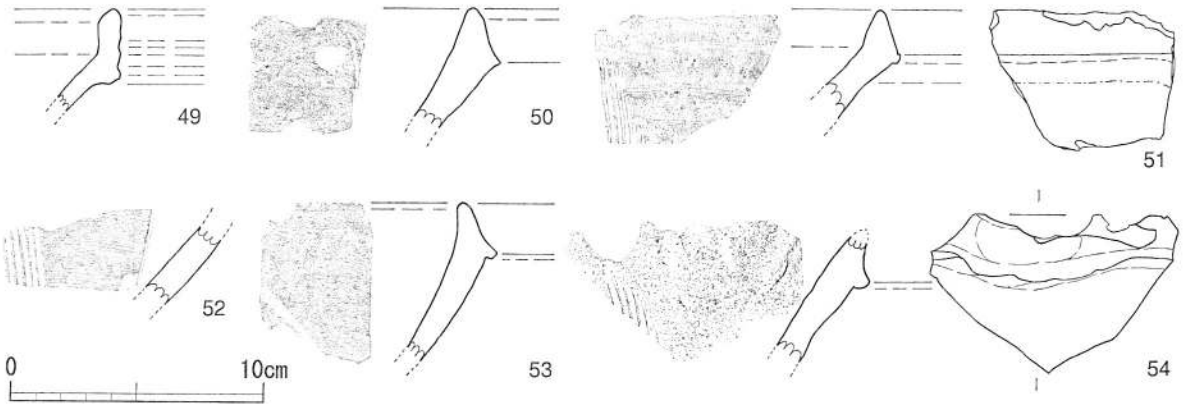
第28図　中世の遺物④（S＝1／2）

番号	調査地区	層位	種類	器種	法量（cm）			胎土	色調		取上番号	備考
					口径	底径	器高		外面	内面		
45	E-8-8他	I/Ib	陶器	碗	－	－	5.7	やや精緻白色粒子	灰オリーブ色	灰オリーブ色	No.75他	朝鮮系
46	E-8-13	Ib	陶器	碗	－	3.0	1.5	やや精緻白色粒子	オリーブ灰色	緑灰色	No.98	朝鮮系
47	E-8-8	Ib	陶器	皿	9.0	5.0	2.7	やや精緻白色粒子	淡黄色	淡黄色	No.221	朝鮮系
48	E-8-8	Ib	陶器	碗	－	－	2.0	やや精緻	灰色	灰色	No.252	朝鮮系

第12表　遺物観察表（中世の遺物④）

・中世の遺物⑤　備前産陶器（第29図　第13表　図版22）

49～54は擂鉢である。**49**は口縁部が残存する。口縁帯の厚さは一様で真上に向かう。口縁部外面に2条の凹線，内面にナデを施す。胎土は灰赤色で雲母と白色粒子を含む。**50**は口縁部が残存する。口縁帯は断面が菱形で口端上角と下角が突出する。内外面にナデ，内面に擂目が確認できる。口縁部外面と体部の色調差が僅かに見られる。胎土は灰褐色を呈する。54に類似。**51**は口縁部から体部上半まで残存する。口縁帯は上方への拡張が強まる。擂目は6条確認できる。内外面にナデを施す。口縁部

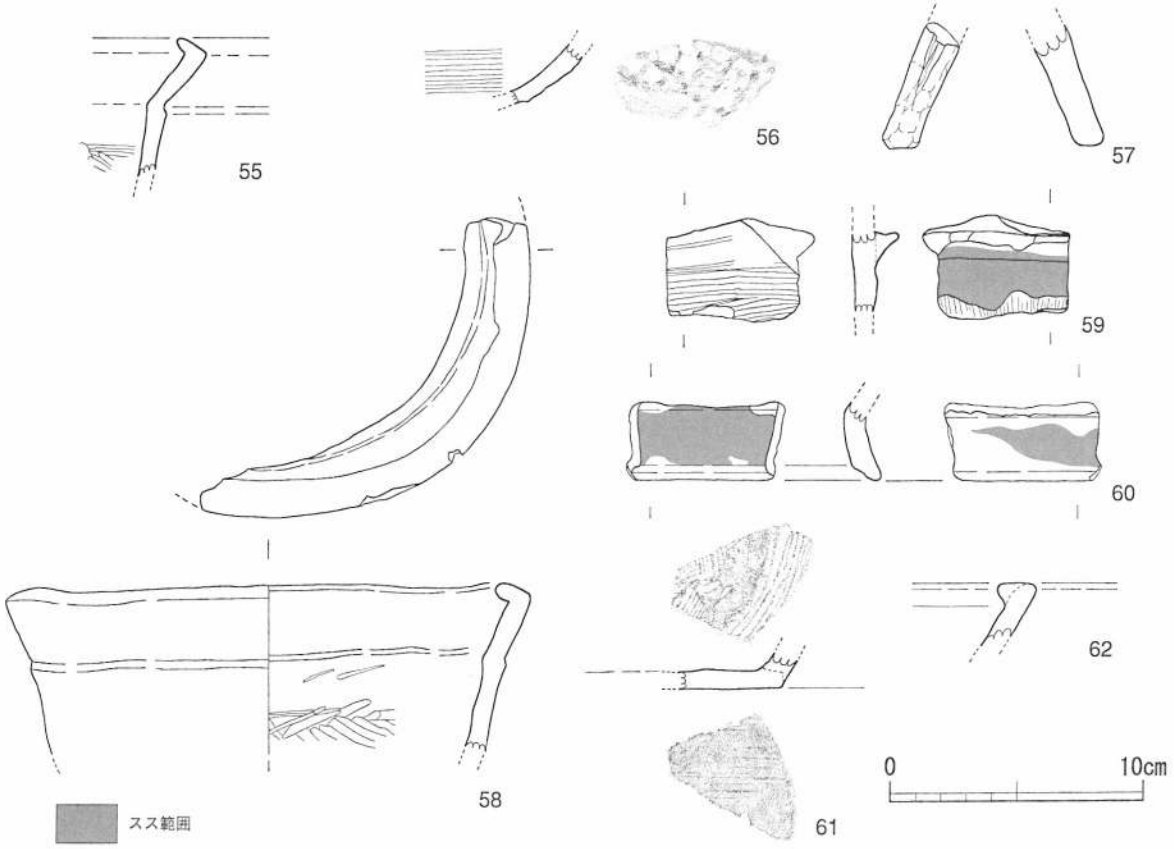


第29図　中世の遺物⑤（S＝1／3）

外面はにぶい橙色，体部外面上半は灰褐色で色調差が見られる。**52**は体部が残存する。擂目は6条確認できる。内外面にナデを施す。胎土はにぶい褐色で砂粒を含む。**53**は口縁部から体部上半まで残存する。口縁帯は上方への拡張が強まり，他に比べやや薄い。内外面にナデを施す。内面に僅かに擂目が確認できる。口縁部外面と体部に色調差が見られる。胎土は灰白色を呈する。54に類似する。**54**は口縁部から体部上半まで残存する。口縁帯は口端上角と下角が同等に突出する。擂目は6条確認できる。内外面にナデが見られる。口縁部外面と体部の色調差は無い。胎土は灰褐色を呈する。

番号	調査地区	層位	種類	器種	法量（cm）			胎土	色調		取上番号	備考
					口径	底径	器高		外面	内面		
49	E-8-8	Ⅰb	陶器	擂鉢	－	－	4.1	やや精緻 雲母・白色粒子	灰赤色	暗赤褐色	No.245	備前　中世5b期 or 中世6期
50	E-8-8	Ⅰb	陶器	擂鉢	－	－	4.8	粗雑 砂粒	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	No.157	備前　中世3b期
51	表採	－	陶器	擂鉢	－	－	5.5	やや精緻 砂粒	にぶい橙色	灰黄褐色	－	備前　中世4期
52	E-8-15	Ⅰb	陶器	擂鉢	－	－	3.2	やや精緻 砂粒	灰褐色	にぶい黄褐色	No.168	備前　中世3期 or 中世4期
53	E-8-13	Ⅰb	陶器	擂鉢	－	－	6.3	やや粗雑 砂粒	にぶい橙色	にぶい橙色	No.268	備前　中世3b期 or 中世4期
54	E-8-8	Ⅰ	陶器	擂鉢	－	－	6.3	やや精緻 石英・長石	赤褐色	にぶい赤褐色	No.95	備前 中世3b期か。

第13表　遺物観察表（中世の遺物⑤）



第30図　中世の遺物⑥（S＝1／3）

・中世の遺物⑥　瓦質土器・土師質土器（第30図　第14表　図版23）

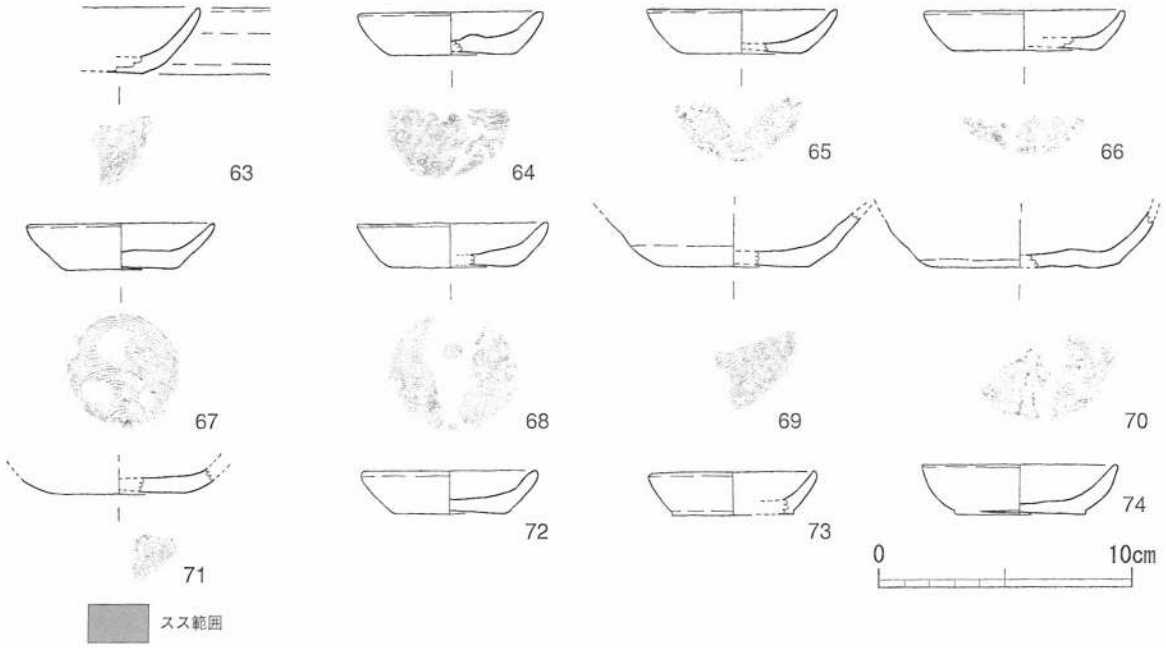
55～58は瓦質土器の足鍋である。**55**は口縁部から体部上半が残存する。口縁部は長く，端部は内側に屈曲する。口縁部内外面と体部外面にはナデ，体部内面にはハケを施す。外面にススが付着する。**56**は体部が残存する。外面には格子状タタキ，内面にはナデを施す。外面にはススが付着する。**57**は脚部が残存する。表面には指頭痕が残り，先端部分にくびれを作る。**58**は口縁部から体部上半まで残存する。口縁部は長く，端部は内側に屈曲する。内面の口縁部と体部の境には蓋受状の段が確認できる。硬く焼きしまる。外面の調整は粗く簡単なナデで仕上がる。口縁部内外面と体部外面にはナデ，体部内面にはハケを施す。上面から見ると歪みが強く，楕円形を呈する。59～62は土師質土器で，59・60は鍋，61・62は擂鉢である。**59**は体部が残存する。貼付の突帯は断面が三角形を呈する。内外面ともにナデとハケを施しススが付着する。**60**は内外面にススが付着しており脚部と考えられる。**61**は底部が残存する。内面にハケ，見込みに卸目を施す。底部は板目痕を確認できる。外面にススが付着する。**62**は口縁部が残存し，外面にススが付着する。口縁端部は内側に肥厚する。外面にススが付着する。胎土は粗雑である。55～58・61・62は周防型と考えられる。

番号	調査地区	層位	種類	器種	法量（cm）			調整		焼成	色調		胎土	取上番号	備考
					口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			
55	E-8-14	Ⅰ	瓦質土器	足鍋	－	－	5.6	ナデ	ナデ/ハケ	良好	灰白色	灰黄色	やや精緻 石英・長石	No.22	周防型Ⅳ型式
56	E-8-13	Ⅰb	瓦質土器	足鍋	－	－	2.3	格子状タタキ	ハケ	良好	黄灰色	灰白色	やや精緻 石英・長石	No.224他	周防型Ⅳ型式か。
57	表採	－	瓦質土器	足鍋	－	－	4.8	ユビオサエ	－	良好	にぶい黄橙色	－	やや粗雑 石英・長石	－	周防型Ⅳ型式
58	E-8-8	Ⅰ/2	瓦質土器	足鍋	18.8	－	6.5	ナデ	ナデ/ハケ	良好	灰色	灰白色	やや精緻 石英・長石	No.49他	周防型Ⅳ型式
59	表採	－	土師質土器	鍋	－	－	3.1	ナデ/ハケ	ナデ/ハケ	良好	にぶい褐色	にぶい橙色	やや精緻 長石・石英・雲母	－	外面にスス付着。
60	E-8-8	Ⅰ	土師質土器	鍋	－	－	3.0	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙色	にぶい黄褐色	やや精緻 石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	No.96	内外面にスス付着。
61	表採	－	土師質土器	擂鉢	－	－	1.4	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙色	浅黄橙色	やや精緻 金雲母・石英	－	周防型か
62	表採	－	土師質土器	擂鉢	－	－	2.5	ナデ	ナデ	良好	灰色	にぶい橙色	やや粗雑 石英・長石	－	周防型か

第14表　遺物観察表（中世の遺物⑥）

・中世の遺物⑦　土師皿（第31図　第15表　図版24）

63～74は皿で底部に糸切り痕が確認できる。**63**は内外面に丁寧なナデを施す。器壁は他に比べ薄い。よく焼き締まる。**64**は内外面にナデを施す。内面は強いナデによりくぼむ。**65**は内外面にナデを施す。**66**は内外面にナデを施す。**67**は体部がやや内湾し，内外面にナデを施す。他に比べ底部が厚い。**68**は外面の磨滅が激しく，調整は不明瞭である。口縁部にススが付着する。**69**は体部下半から底部まで残存する。内外面にナデを施す。外面に成形の際に出来た起伏が見られる。**70**は外内面にナデを施す。強いナデのため内面がくぼむ。磨滅は激しいがよく焼き締まる。**71**は底部が残存する。外面に強いナデを施す。**72**は内外面にナデを施す。**73**は内外面にナデを施し，内面は強いナデによりくぼむ。底部の大半を欠損するが，破片から内面に強いナデによるくぼみが確認できる。**74**は磨滅が激しく調整が不明瞭である。65～68，72・74は重なった状態で出土した。



第31図　中世の遺物⑦（S＝1／3）

番号	調査地区	層位	種類	器種	法量（cm）			調整		焼成	色調		胎土	取上番号	備考
					口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			
63	E-8-13	Ⅰb	土師質土器	Ⅲ	－	－	2.65	ナデ	ナデ	良好	橙色	橙色	やや精緻 黒色粒子	No.144	底部糸切り
64	E-8-8	Ⅰb	土師質土器	Ⅲ	7.1	4.8	1.7	ナデ	ナデ	良好	橙色	浅黄橙色	やや精緻 金雲母・赤色粒子	No.116	底部糸切り
65	E-8-4	Ⅰ	土師質土器	Ⅲ	7.8	5.6	1.6	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙色	橙色	やや精緻 長石・赤色粒子	No.122	底部糸切り
66	E-8-4	－	土師質土器	Ⅲ	7.4	4.6	1.8	ナデ	ナデ	良好	橙色	橙色	やや精緻 金雲母・赤色粒子	No.122	底部糸切り
67	E-8-4	－	土師質土器	Ⅲ	7.2	4.2	1.8	ナデ	ナデ	良好	明黄褐色	橙色	やや精緻 金雲母・長石	No.122	底部糸切り
68	E-8-4	Ⅰ	土師質土器	Ⅲ	7.4	4.8	2.7	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	やや精緻 雲母	No.122	底部糸切り
69	T.P.13	－	土師質土器	Ⅲ	－	6.0	2.1	ナデ	ナデ	良好	橙色	にぶい黄橙色	やや精緻 長石・金雲母	－	底部糸切り
70	E-8-8	Ⅰ	土師質土器	Ⅲ	6.4	4.8	1.7	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙色	橙色	やや精緻 金雲母	No.302	底部糸切り
71	E-8-8	Ⅰb	土師質土器	Ⅲ	－	5.4	1.0	ナデ	ナデ	良好	にぶい黄橙色	橙色	やや精緻 長石・金雲母・赤色粒子	No.47	底部糸切り
72	E-8-4	Ⅰ	土師質土器	Ⅲ	6.7	4.3	1.7	ナデ	ナデ	良好	橙色	橙色	やや精緻	No.122	底部糸切り
73	E-8-14	Ⅰb	土師質土器	Ⅲ	－	6.4	2.2	ナデ	ナデ	良好	橙色	橙色	やや精緻 長石	No.143	底部糸切り
74	E-8-4	－	土師質土器	Ⅲ	7.6	5.1	2.0	ナデ	ナデ	良好	橙色	橙色	やや精緻 雲母	No.122	底部糸切り

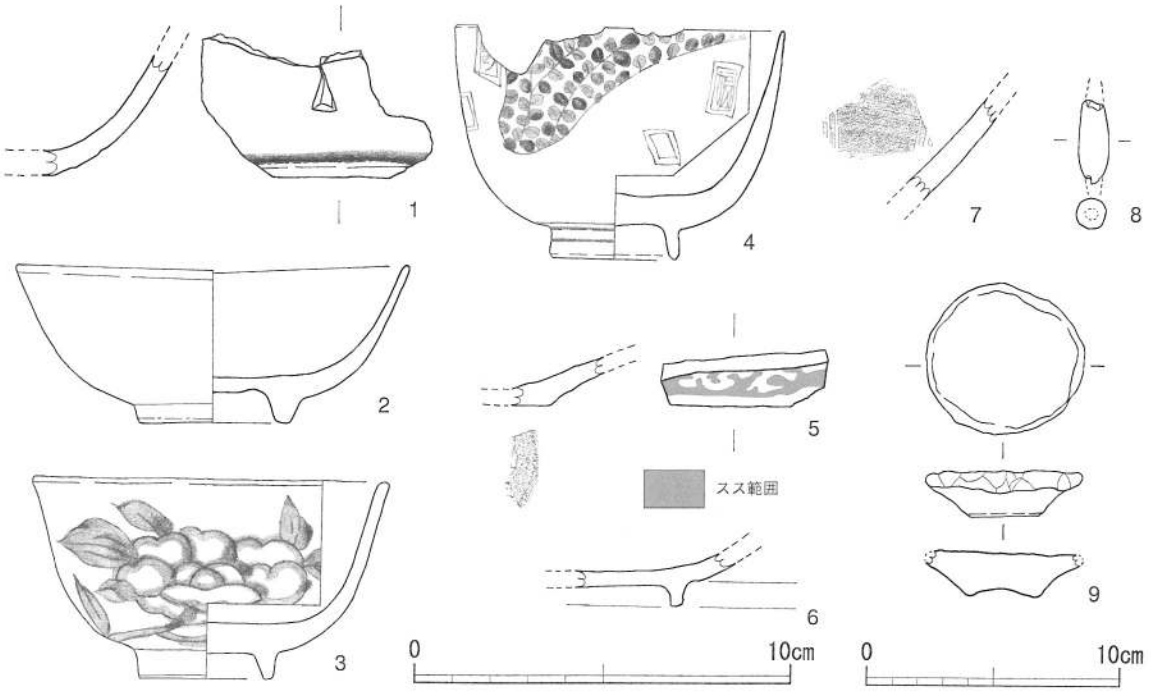
第15表　遺物観察表（中世の遺物⑦）

（5）　近世の遺物（第32・33図　第16～18表　図版25・26）

・近世の遺物①　陶磁器・土製品（第32図　第16表　図版25）

1は体部下半から底部まで残存する染付碗である。底部下半が露胎を呈し，全体に貫入が入る。体部と底部の境に沿い一重圏線を描く。2は完品の陶器碗である。見込みに蛇の目釉剥ぎ，高台畳付に釉剥ぎを施す。3は口縁部から底部まで残存する染付碗である。高台畳付に釉剥ぎを施す。体部外面に花文，裏外面には蝶が描かれる。4は口縁部から底部まで残存する染付碗である。呉州の発色が良く，外面には二重方形枠内に吉祥文字の「福」字が入る。体部下半に一重圏線，高台に二重圏線が描

かれる。外面の一部に融着痕が見られる。**5**は体部下半から底部まで残存する陶器皿である。灰釉を施す。外面にススが付着する。内面はナデ，底部は糸切りを施す。灯明皿か。**6**は体部下半から底部まで残存する白磁皿である。高台畳付に砂が付着する。**7**は体部が残存する擂鉢である。確認できる擂目は4条である。内外面にナデを施す。**8**は土錘である。外面は磨滅し，両端が欠損する。**9**はハマである。表面に小さな空洞が見られる。



第32図　近世の遺物①（1～7はS＝1/2，8・9はS＝1/3）

番号	調査地区	層位	種類	器種	法量（cm）			胎土	色調		取上番号	備考
					口径	底径	器高		外面	内面		
1	E-8-13	Ⅰb	染付	碗	－	－	3.2	やや精緻	明オリーブ色	明オリーブ色	No.30他	
2	E-8-13	Ⅰ	陶器	碗	8.4	4.0	4.1	精緻	暗オリーブ色	暗オリーブ色	No.102	
3	E-8-13	Ⅰ/Ⅰb	染付	碗	3.5	－	5.5	精緻 黒色粒子	明オリーブ色	明オリーブ色	No.58他	肥前系
4	E-8-9	Ⅰ/Ⅰb	染付	碗	8.6	3.2	6.0	精緻	灰白色	灰白色	No.2他	肥前系
5	E-8-13	Ⅰb	陶器	皿	－	－	1.3	精緻	赤褐色	赤灰色	No.41	灯明皿か。外面にスス付着。
6	E-8-8	Ⅰb	白磁	皿	－	－	1.5	精緻 黒色粒子	灰色	灰色	No.297	
7	E-8-13	Ⅰb	陶器	擂鉢	－	－	2.7	精緻	橙色	明赤褐色	No.229	肥前系か。

番号	調査地区	層位	種類	器種	法量（cm）			調整		色調		胎土	取上番号	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
8	表採	Ⅰb	土製品	土錘	－	－	3.4	ナデ	ナデ	橙色	橙色	精緻	－	
9	表採	－	その他	ハマ	－	－	1.8	－	－	明黄褐色	灰黄色	やや精緻	－	

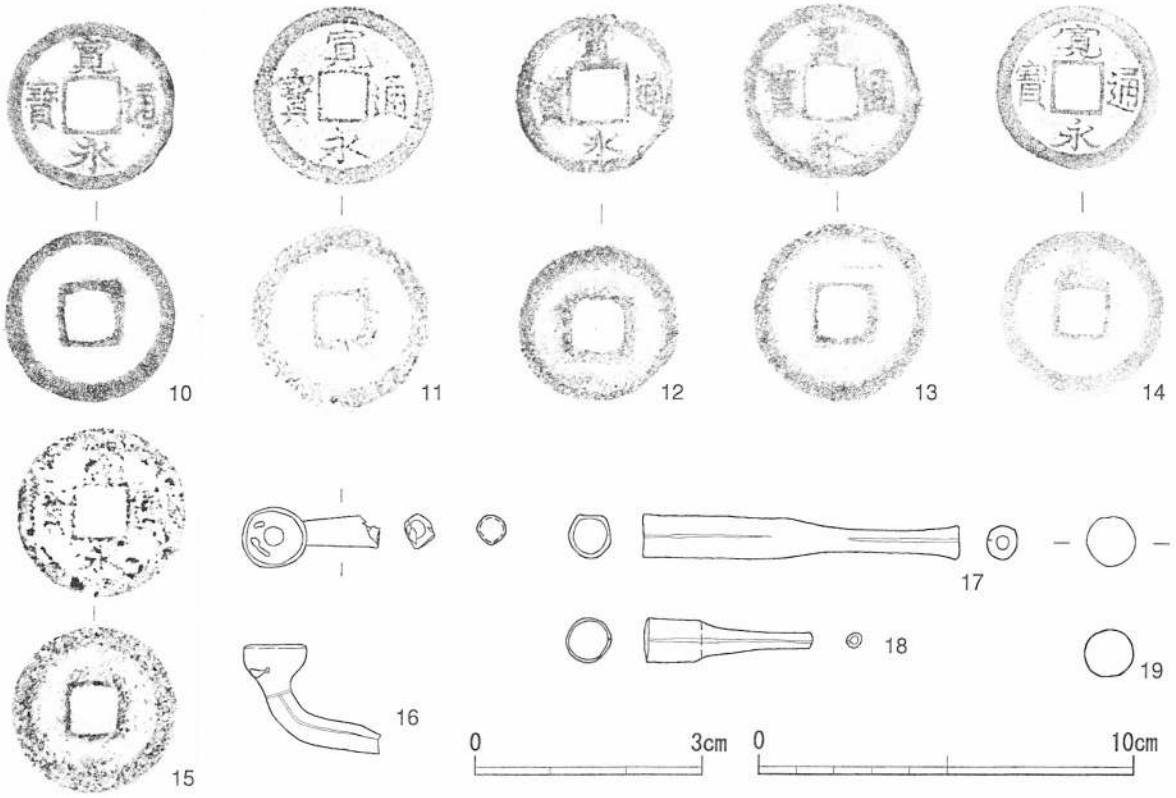
第16表　遺物観察表（近世の遺物①）

・近世の遺物②　金属器（第33図　第18表　図版26）

10～15は寛永通寶の新寛永である。**10**はコ頭通である。11・12は不旧手である。**11**は他に比べ径が大きい。**12**はマ頭通である。背面右上に「一」とあるが明確で無い為，製造工程でついたものと考えられる。**13**はコ頭通である。縁が削れており，他に比べ径が小さい。**14**は背面に大字背足が描かれた

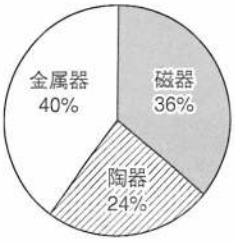
足尾銭である。15は錆ついており詳細は不明である。コ頭通である。16は羅宇キセルの雁首である。補強帯はなく脂返しの湾曲は大きい。17は羅宇キセルの吸口である。吸口内には竹製のラウが残る。18は羅宇キセルの吸口である。吸口は短く，中には竹製のラウが残る。19は直径1.2cmの鉛玉である。

（松田）

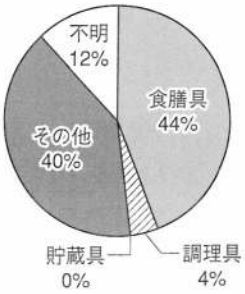


第33図　近世の遺物②（10～15はＳ＝１／１，16～19はＳ＝１／２）

近世		食膳具			調理具		貯蔵具		その他			不明	計
		碗	皿	杯	鍋	鉢	甕	壺	キセル	銭	他		
国産	磁器	5	3									1	9
	陶器	2	1			1						2	6
	金属器								3	6	1		10
小計		7	4	0	0	1	0	0	3	6	1	3	25
合計		11			1		0		10			3	



種類別割合



機能別割合

第17表　近世の遺物構成表

番号	調査地区	層位	器種	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	取上番号	備考
10	表採	－	寛永通寶	23.5	－	1.0	2.53	－	
11	E-8-13	Ⅰb	寛永通寶	25.0	－	1.0	2.83	No.305	
12	表採	Ⅰ	寛永通寶	22.5	－	1.0	1.98	－	
13	表採	－	寛永通寶	25.0	－	1.0	2.76	－	
14	表採	－	寛永通寶	23.0	－	1.0	1.97	－	背「足」　1741年～
15	表採	－	寛永通寶	23.0	－	1.0	2.14	－	
16	E-9-17	Ⅰ	羅字キセル	36.0	16.0	－	4.28	－	
17	表採	－	羅字キセル	84.0	11.0	－	21.19	－	
18	E-8-9	Ⅰb	羅字キセル	44.5	11.5	－	3.49	－	
19	E-8-13	2	鉛玉	13.0	13.0	－	10.30	No.89	

第18表　遺物観察表（近世の遺物②）

【参考文献】

岩崎仁志　1988「防長地域の足鍋について」『山口考古』17号　山口考古学会

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』Ⅱ

江戸遺跡研究会　2000『江戸文化の考古学』　吉川弘文館

小野正敏　1982「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』Ⅱ

川内野篤他　2005『針尾城跡』平成16年度佐世保埋蔵文化財発掘調査報告書　佐世保市教育委員会

北野隆亮　1990「15・16世紀貿易陶磁器」『貿易陶磁研究』Ⅹ

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』　九州近世陶磁学会

竹岡俊樹　2003『旧石器の型式学』　学生社

太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊制ⅩⅤ』　太宰府市教育委員会

中田敦之・高田愛　1997『田川遺跡』松浦市文化財調査報告書　第12集　松浦市教育委員会

乗岡実　2000『備前焼擂鉢の編年について』　第３回中近世備前焼研究会

博多研究会　2000「博多出土の高麗・朝鮮陶器の分類試案　生産地編年を視座として」
『博多研究会誌』　第８号　博多研究会

堀苑孝志　1997「北部九州における周防型瓦質擂鉢の流通とその背景」
『中近世土器の基礎研究Ⅻ』日本中世土器研究会

松尾秀昭・川内野篤　2010『市内遺跡発掘調査報告書』
佐世保市文化財調査報告書　第４集　佐世保市教育委員会

森田勉　1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』Ⅱ

矢部倉吉　1995『古銭と紙幣』　金園社

（6） 小　結

今回の調査で，遺物は旧石器時代・縄文時代・弥生時代・中世・近世の遺物を確認し，約300点が出土した（第19表）。そのうち中世の遺物が出土点数の半分を占め，次に縄文時代，旧石器時代の遺物が続く。遺物は遺構からは確認されず，西部傾斜地～東部傾斜地では腐植土（Ⅰ層）と崩落等による２次堆積土（Ⅰｂ層）から出土した。山麓では，住宅の埋土から近現代の遺物とともに黒曜石の石核が出土した。

旧石器時代・縄文時代の遺物は石器が多く，ナイフ形石器，石鏃，スクレイパーのような狩猟具・加工具が出土し，良好な狩場として利用していたと想定される。弥生時代の遺物は壺か甕の胴部片と杯が出土しているが，時期は明確に判断できない。西側の谷を隔てた丘陵上に位置する中ノ瀬遺跡では，弥生時代の遺構が展開していることから，同時期の可能性がある。

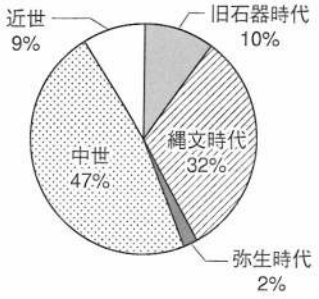
中世の遺物は，貿易陶磁器の碗・皿類と備前焼の擂鉢，周防型の足鍋・擂鉢，産地不明の土師質の皿・鍋・鉢が出土した。貿易陶磁器の詳細は，青磁は片切彫の蓮弁文が施された碗Ｂ類や口縁部が外反する碗Ｄ類が出土し，皿は出土していない（上田 1982）。白磁はいわゆる口禿げの白磁と言われる皿Ａ群，多角の杯Ｄ群，端反りの口縁部をもつ皿Ｅ群が出土し，碗は１点出土している（森田 1982）。青花は蓮子碗と考えられる碗Ｃ群，口縁が外反する皿B_1群，口縁が内湾する皿Ｃ群と福建産と考えられる粗製の碗・皿が出土している（小野 1982）。国産搬入品は，備前焼の擂鉢は中世３ｂ期～４期と中世６期（乗岡 2000）に相当するもの，周防型の鍋はⅣ型式，鉢はⅡ型式（岩崎 1988）のものが出土している。この他に土師質の皿・鍋・鉢が出土しているが，産地は不明である。時期について，土師質の皿は近世の可能性もある。出土地点を考慮し，今回は中世で報告した。また，取上番号 No. 122 の皿は，重なるように出土したが明確な遺構のプランは認められなかった。

近世の遺物は，陶磁器の他にハマや土錘のような土製品と古銭やキセルのような金属製品が出土している。陶磁器の様相からは江戸時代末～明治時代初頭頃と考えられる。

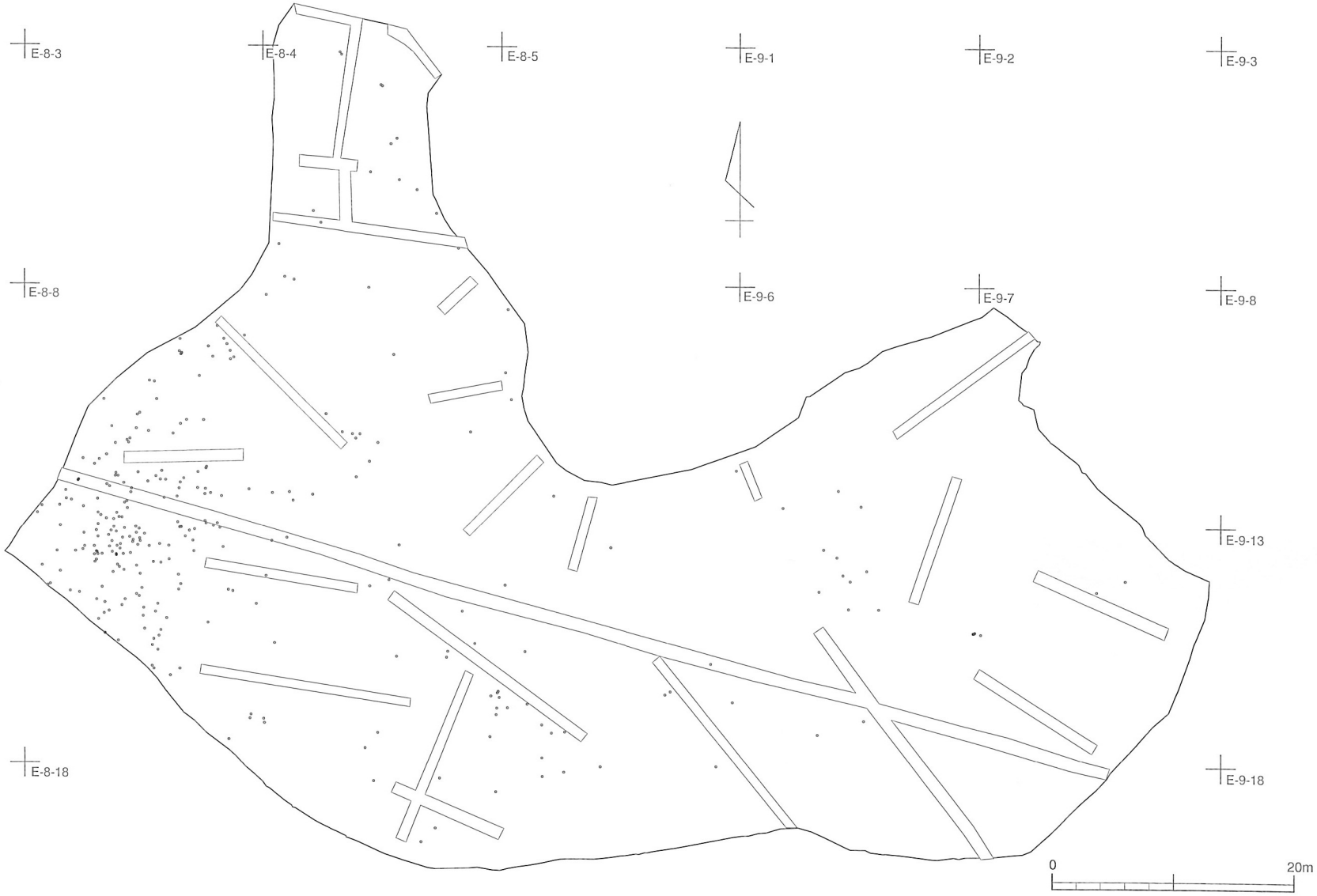
第34図～第39図は，西部傾斜地～東部傾斜地における遺物の出土状況について示している。旧石器～縄文時代の遺物は広範囲に分散するが，中世～近世の遺物は主に西部傾斜地に集中する傾向がある。第40図は西部傾斜地における出土遺物の接合状況を示している。遺物は挿図の範囲内で接合し，近世の遺物は接合によって完品に近いものが確認できる。

中世の遺物が西部傾斜地に集中する理由には，鞍部～西部傾斜地を生活の場として利用した可能性が考えられるが，調査範囲内では，柱穴跡や土坑のような生活遺構は確認されていない。柱穴を伴わ

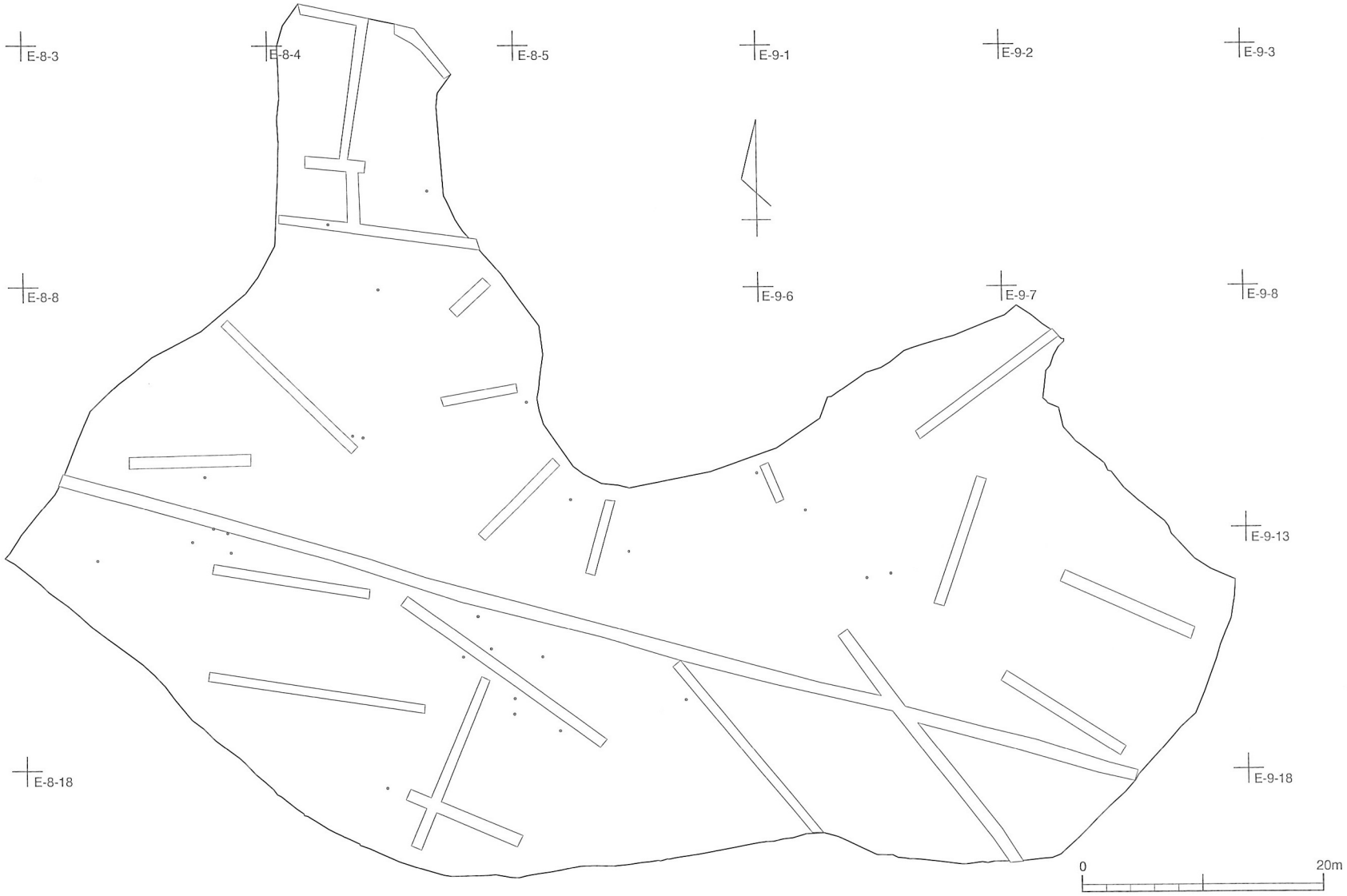
	点数
旧石器時代	31
縄文時代	99
弥生時代	8
中世	144
近世	27
合計	309



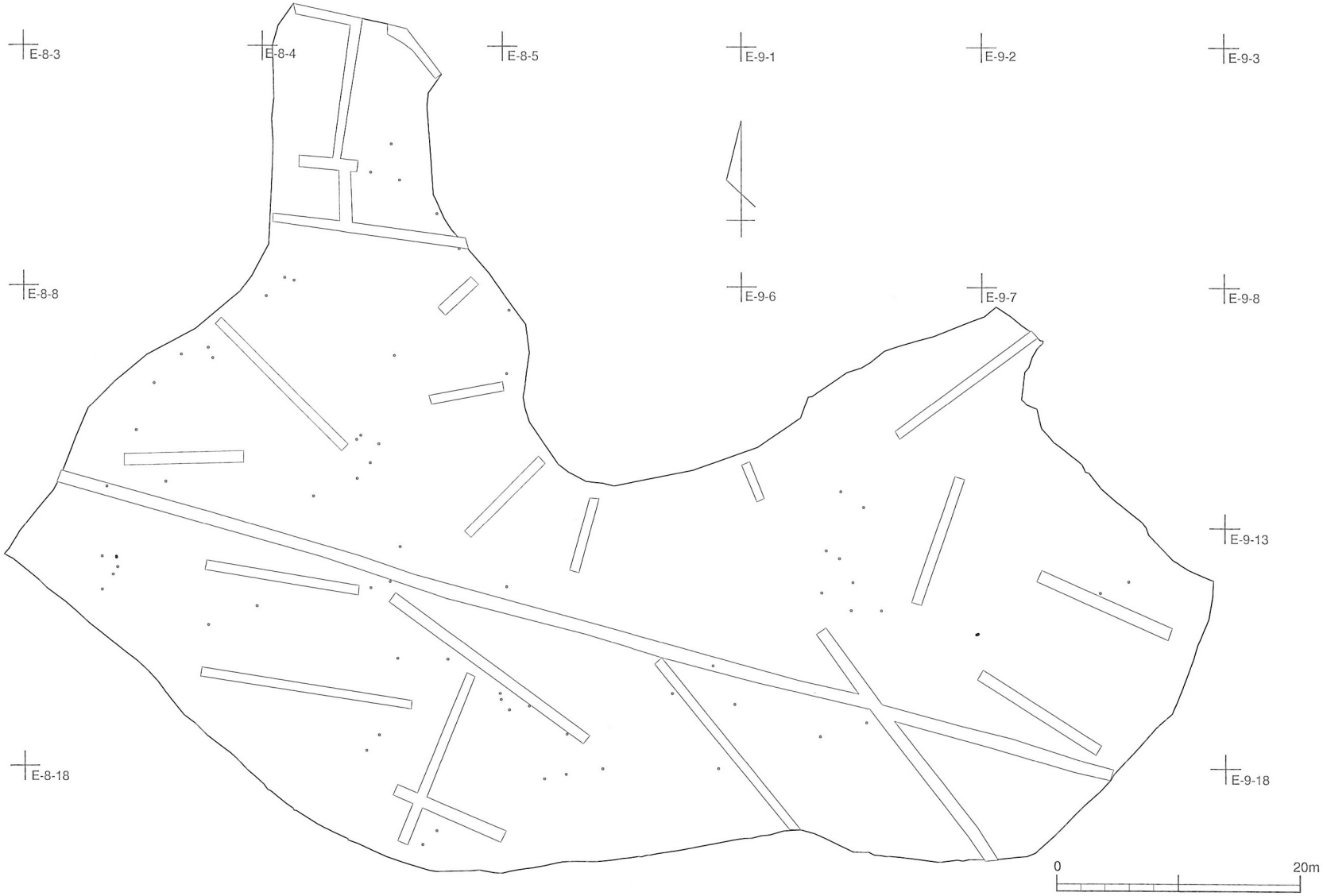
第19表　出土遺物の時代別構成表



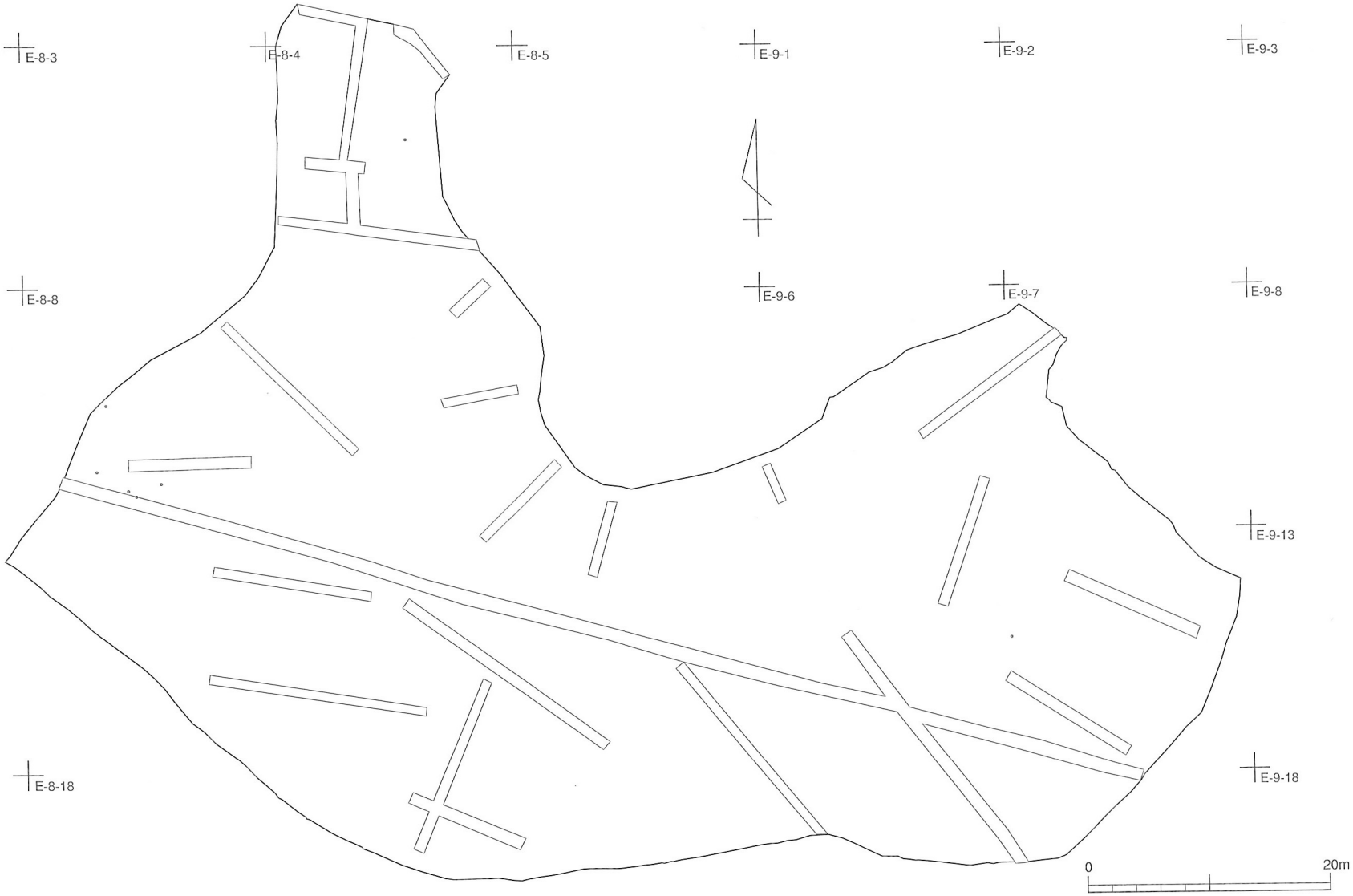
第34図　全体の遺物出土状況（S＝1/500）



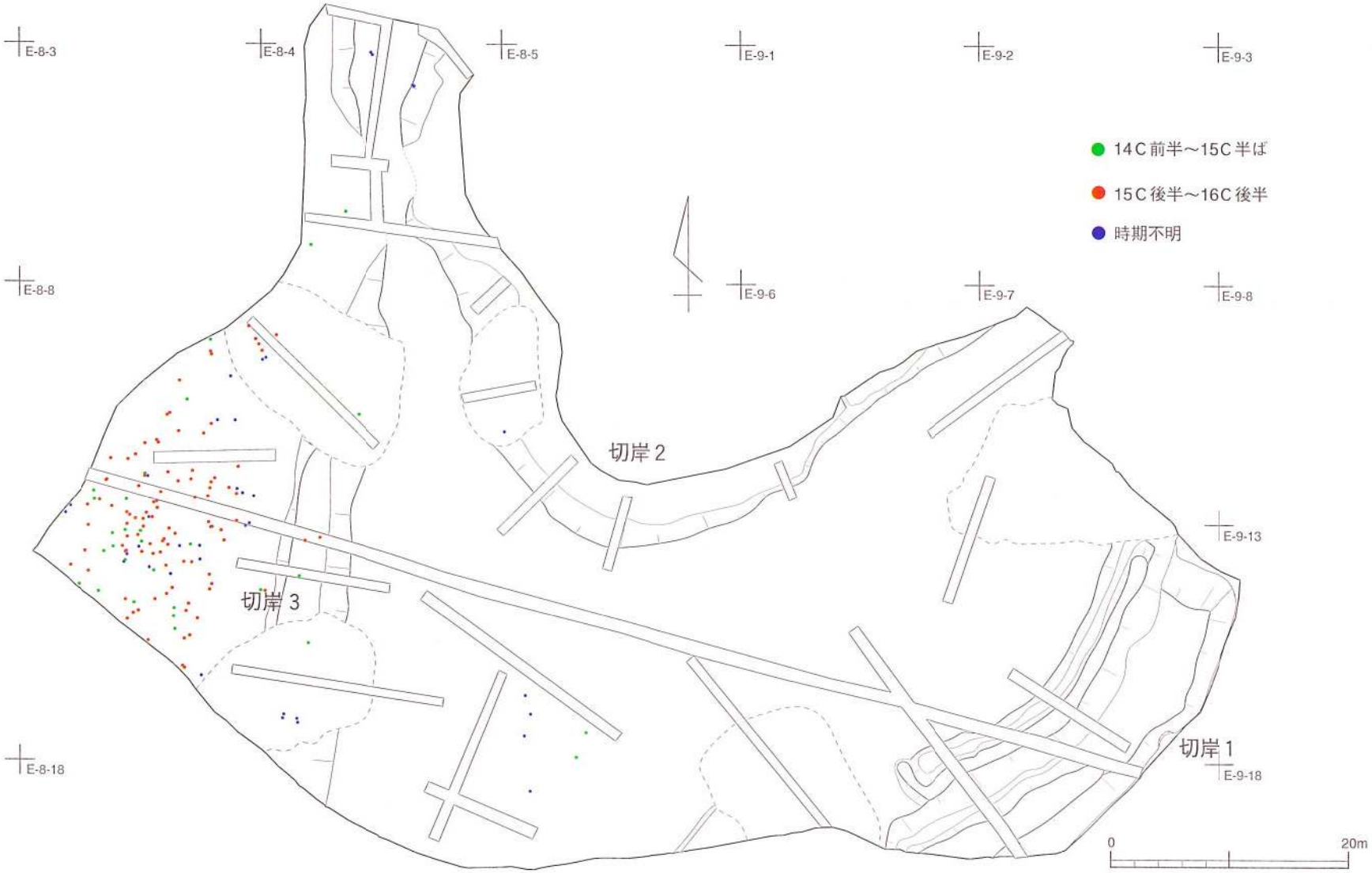
第35図　旧石器時代の遺物出土状況（S＝1/500）



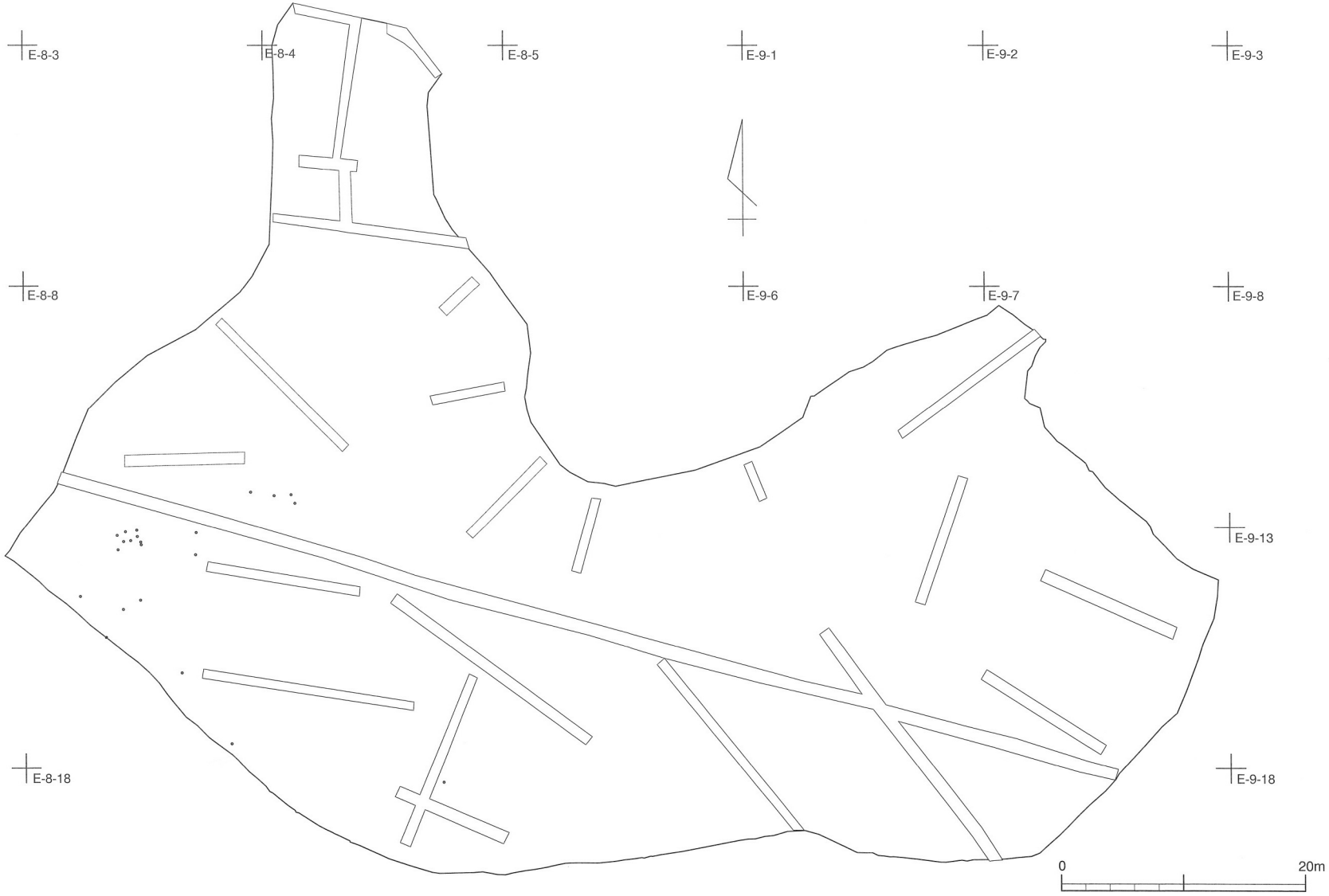
第36図　縄文時代の遺物出土状況（S＝1/500）



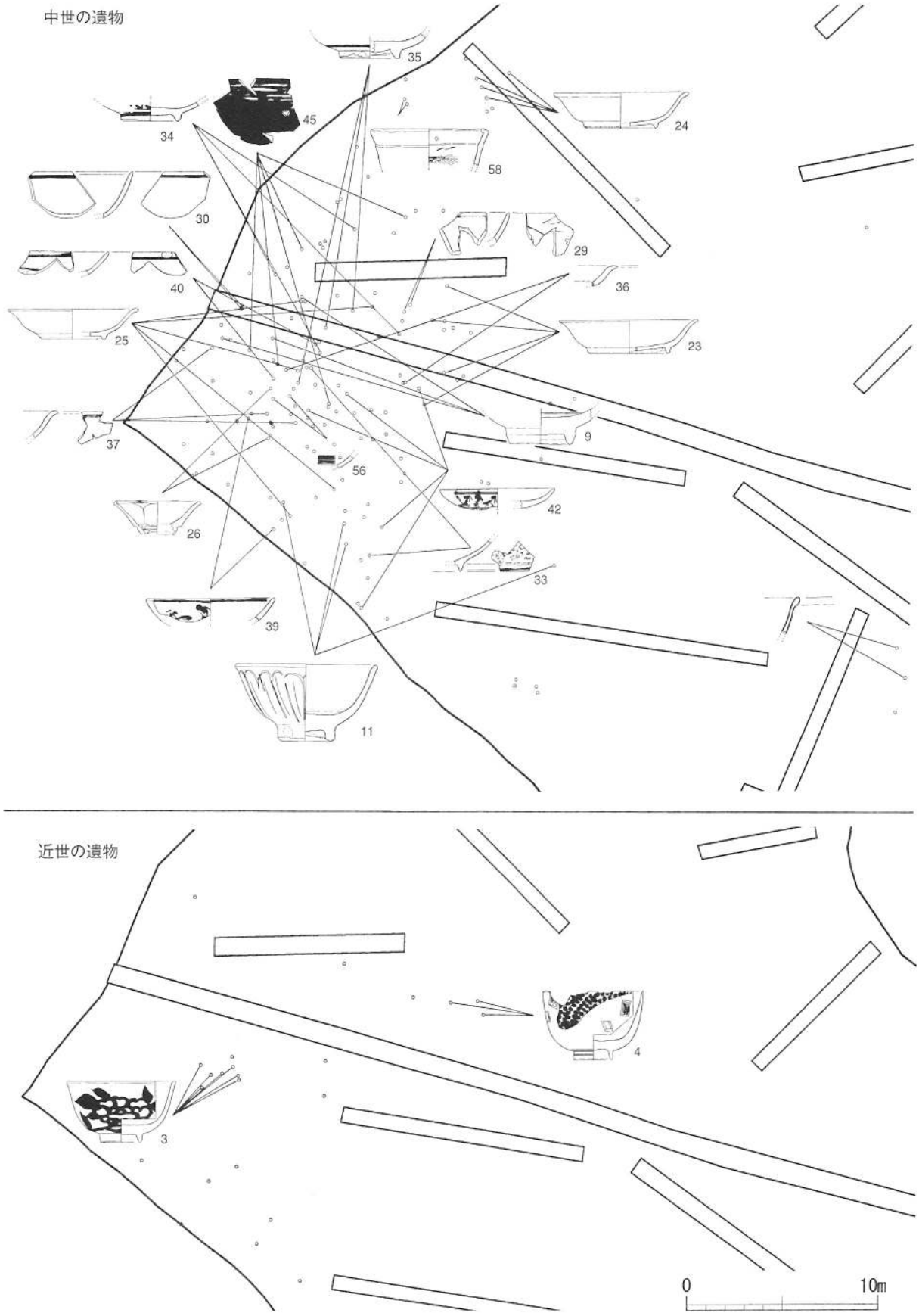
第37図　弥生時代の遺物出土状況（S＝1/500）



第38図　中世の遺物出土状況（S＝1/500）

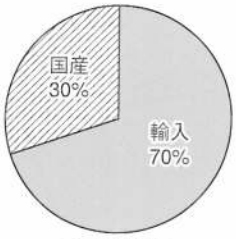


第39図　近世の遺物出土状況（S＝1/500）

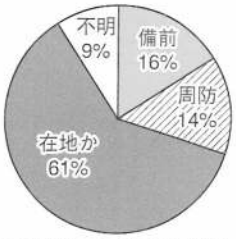


第40図　出土遺物の接合状況（S＝1/300）

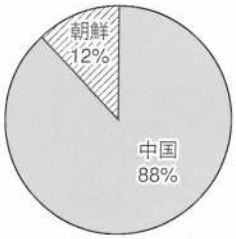
中世		食膳具			調理具		貯蔵具		その他	
		碗	皿	杯	鍋	鉢	甕	壺	不明	小計
中国	青磁	23							2	25
	白磁	2	19	2					8	31
	青花	11	13						10	34
小計		36	32	2	0	0	0	0	20	90
朝鮮	白磁									0
	陶器	8	1						2	11
小計		8	1	0	0	0	0	0	2	11
輸入小計		44	33	2	0	0	0	0	22	101
国産	陶器					7				7
	瓦質土器				5				1	6
	土師質土器		23		2	2			3	30
国産小計		0	23	0	7	9	0	0	4	43
合計		44	56	2	7	9	0	0	26	144



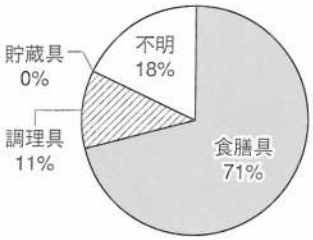
産地別割合



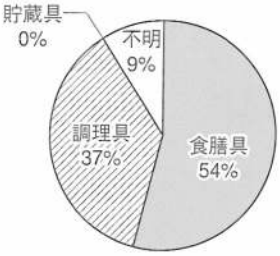
国産陶器・土器産地別割合



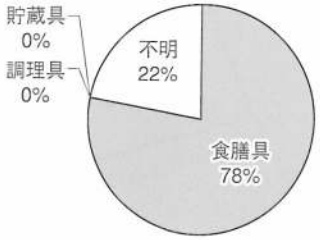
輸入陶磁器産地別割合



機能別割合

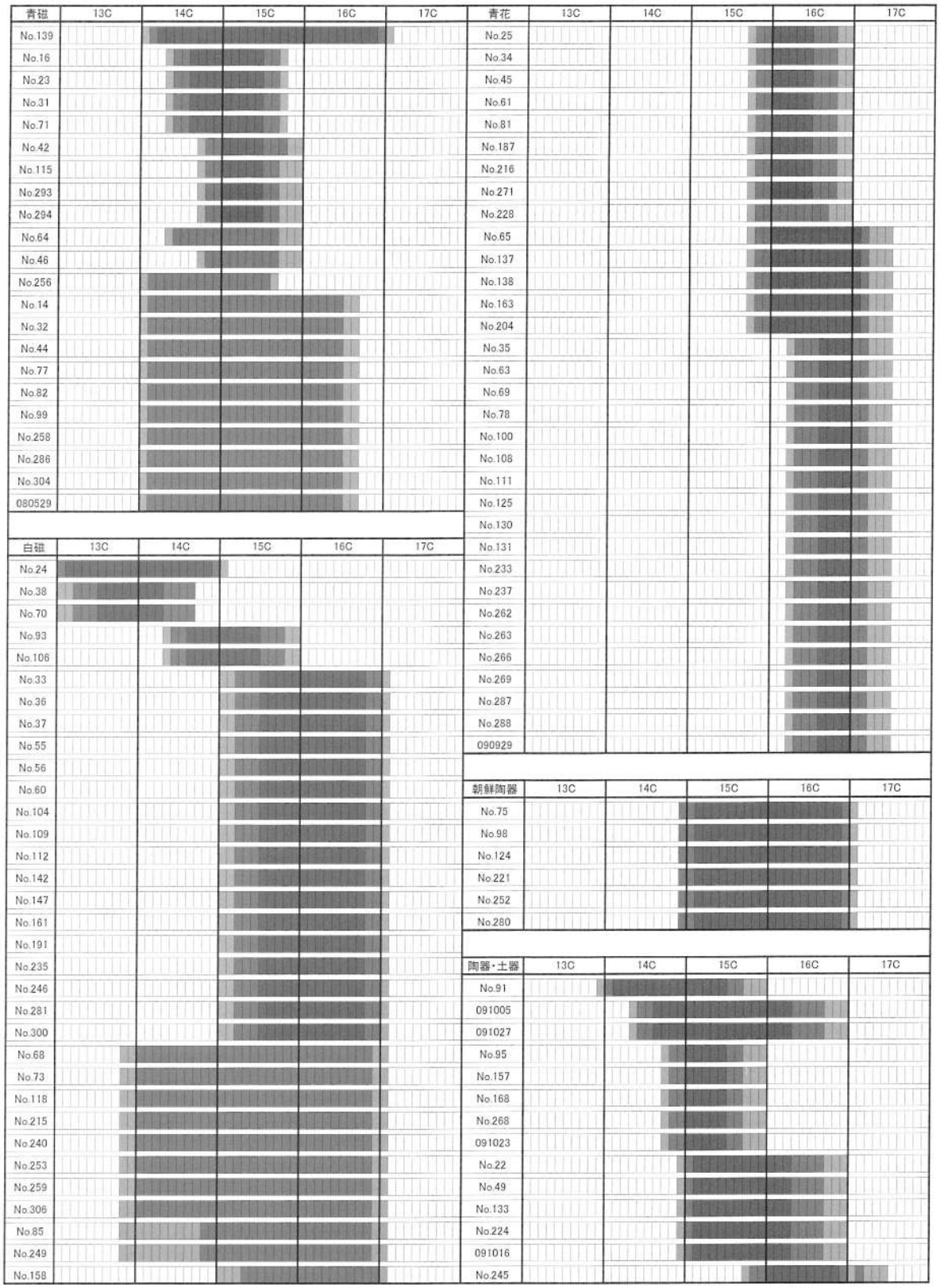


国産陶器・土器機能別割合



輸入陶磁器機能別割合

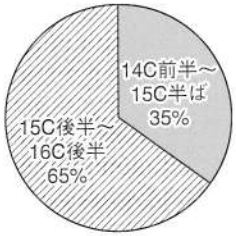
第20表　中世の遺物構成表



第21表　中世の遺物時期細別表

※No. は取上番号を，数字だけのものは取上日を示す。

		14C前半～15C半ば	15C後半～16C後半
貿易陶磁器	青磁	9	0
	白磁	6	16
	青花	0	8
	陶器	0	6
国産	陶器	0	6
	土器	0	8
合計		15	44

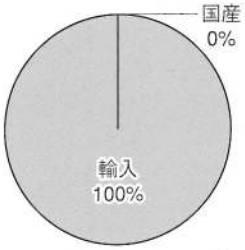


中世における
時期別割合

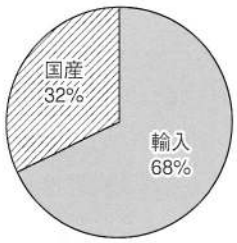
14C前半～15C半ば		食膳具			調理具		貯蔵具		その他	
		碗	皿	杯	鍋	鉢	甕	壺	不明	小計
中国	青磁	9								9
	白磁		4	2						6
	青花									0
小計		9	4	2	0	0	0	0	0	15
朝鮮	白磁									0
	陶器									0
小計		0	0	0	0	0	0	0	0	0
輸入小計		9	4	2	0	0	0	0	0	15
国産	陶器									0
	瓦質土器									0
	土師質土器									0
国産小計		0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		9	4	2	0	0	0	0	0	15

15C後半～16C後半		食膳具			調理具		貯蔵具		その他	
		碗	皿	杯	鍋	鉢	甕	壺	不明	小計
中国	青磁									0
	白磁		16							16
	青花	3	5							8
小計		3	21	0	0	0	0	0	0	24
朝鮮	白磁									0
	陶器	5	1							6
小計		5	1	0	0	0	0	0	0	6
輸入小計		8	22	0	0	0	0	0	0	30
国産	陶器					6				6
	瓦質土器				6					6
	土師質土器					2				2
国産小計		0	0	0	6	8	0	0	0	14
合計		8	22	0	6	8	0	0	0	44

産地別割合

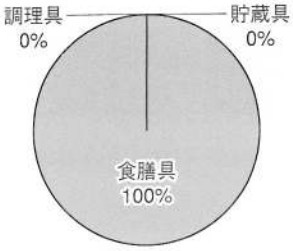


14C前半～15C半ば

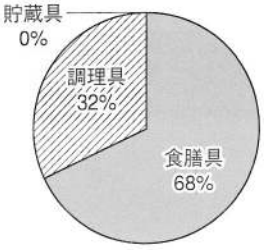


15C後半～16C後半

機能別割合



14C前半～15C半ば



15C後半～16C後半

第22表　中世の遺物時期細別構成表

ない根小屋のようなものか，もしくは南西の平場に遺構が展開する可能性がある。また，他の地点の遺物は切岸形成時の排土とともに処理されたとも考えられる。

第20表は中世の遺物について産地や種類の構成を示している。産地別の割合は国産が約30%，輸入が約70%である。そのうち国産は周防・備前から搬入され，輸入は中国の割合が90%近くを占める。次に碗・皿類を食膳具，鍋・鉢類を調理具，甕・壺類を貯蔵具と機能別に分類すると，食膳具が71%，調理具が11%，貯蔵具が０%を示す。食膳具は輸入の割合が高く，調理具はほぼ国産である。また，調理具と考えられる鍋や鉢は出土しているが，貯蔵具は一点も出土していない。城内に井戸は確認されておらず，立地状況からも真水の確保に貯蔵具は必要であったと考えられる。

中世の遺物のうち，詳細な時期が検討できる約60点について第21表に示した。遺物には時期幅があり，山城においてその間を常駐したとは考えにくい。そこで遺物の時期が重複する集中部をピークとし区分すると，２時期に分けられると判断した。第22表は２時期の遺物についてその構成を示した。時期別の割合は14世紀前半～15世紀半ばが35%，15世紀後半～16世紀後半が65%を示す。産地別の割合は14世紀前半～15世紀半ばは輸入が100%，15世紀後半～16世紀後半は輸入が68%，国産が約32%である。機能別の割合は14世紀前半～15世紀半ばは食膳具が100%，15世紀後半～16世紀後半は食膳具が68%，調理具が32%，貯蔵具が０%である。15世紀後半～16世紀後半の産地別と機能別の割合はそのまま，調理具を国産が，食膳具を輸入で補っていることを示す。時期別での食膳具のセット関係を見てみると，14世紀前半～15世紀半ばでは碗は青磁，皿・杯は白磁を使用する。15世紀後半～16世紀後半では碗は青花・朝鮮系陶器，皿は青花・白磁を使用している。

以上のことから考察すると，14世紀前半～15世紀半ばは食膳具のみで構成され遺物も少ないが，15世紀後半～16世紀後半は食膳具と調理具が出土することから，多少の生活が可能である。共通して貯蔵具が出土していないことは，蓄えを必要としない臨時的な要素として捉えられる。しかし，城の一部の調査であるため，資料の増加によって検討が必要である。

今回は遺物について２時期の区分を行い，その構成や食膳具のセット関係を示した。山城の性格上，遺物を伴わない使用時期もあると考えられるため，遺物から山城の年代特定は限界がある。今後の調査による資料の増加や遺構との再検討によって，詳細が明らかにできるだろう。　（矢葺）

【参考文献】

川口洋平　1997『覩城跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第３集　長崎県教育委員会
1999「長崎県における周防・豊前系雑器の流入について」『西海考古』創刊号
森島康雄　2009「土器・陶磁器編年と城の年代観」『戦国時代の城－遺跡の年代を考える－』高志書院

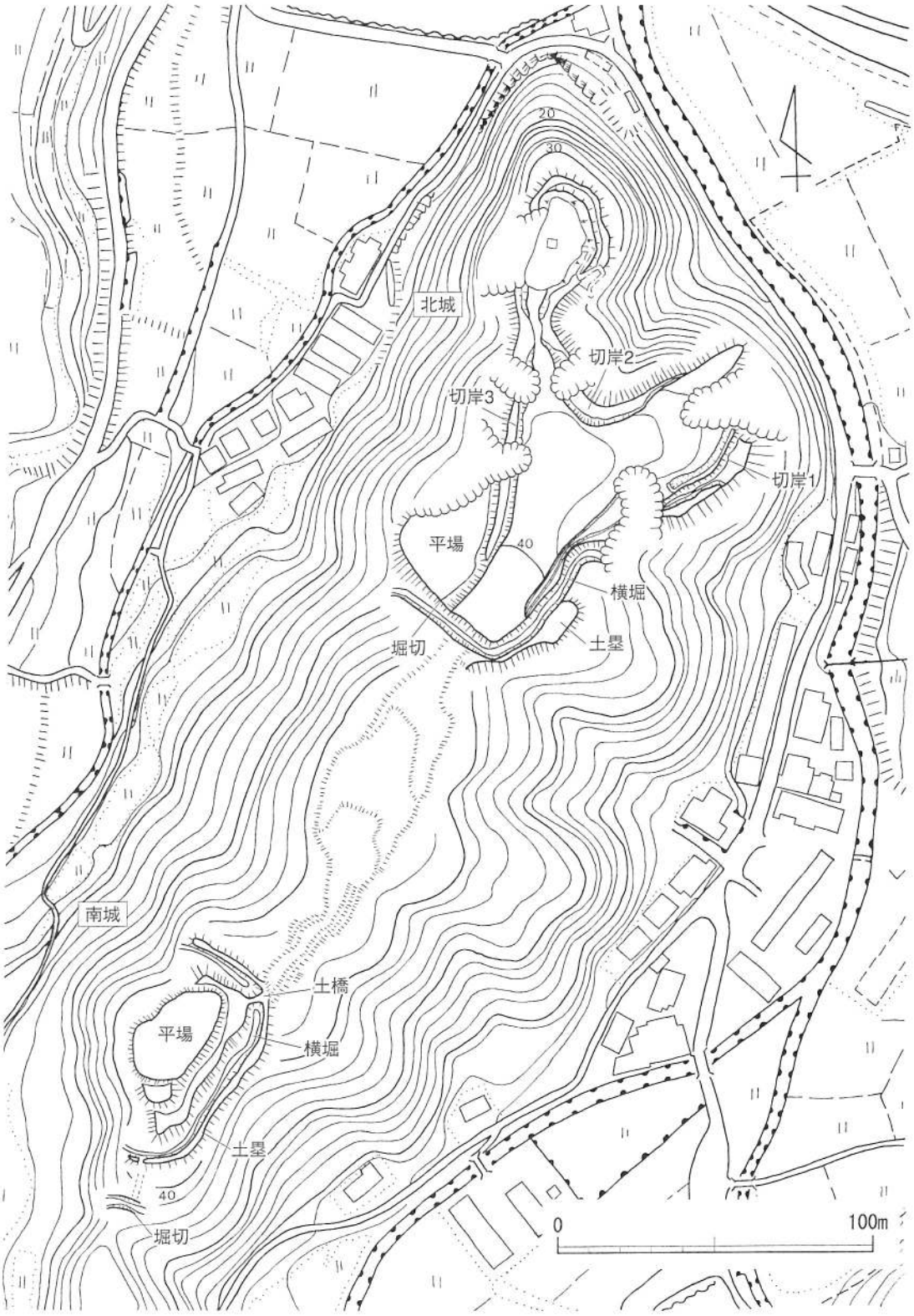
V まとめ

試掘調査では黒曜石製の石器や黒曜石原石などが確認され，本調査における縄文時代以前の遺物包含層や生活面の検出が期待されたが，旧石器を含む遺物が広範囲に出土したものの，残念ながら遺物包含層や遺構面の確認はできなかった。地理的環境から本来旧石器時代から縄文時代の遺物包含層や生活面が存在したとは考えられるが，崩落等により失われ一部が２次的に残存したものと考えられる。

八幡山城は，奈良大学千田嘉博教授の踏査や試掘調査時における縄張り調査により，横堀等で構成される南部の区域（南城）と，堀切より北にあり調査対象となった北部の区域（北城）に分かれることが確認されていたが，本調査によって新たに尾根筋を囲むように展開する切岸を確認した。その結果，北城の東・北・西部は切岸により，南部は堀切と横堀によって防御されていることが判明した。

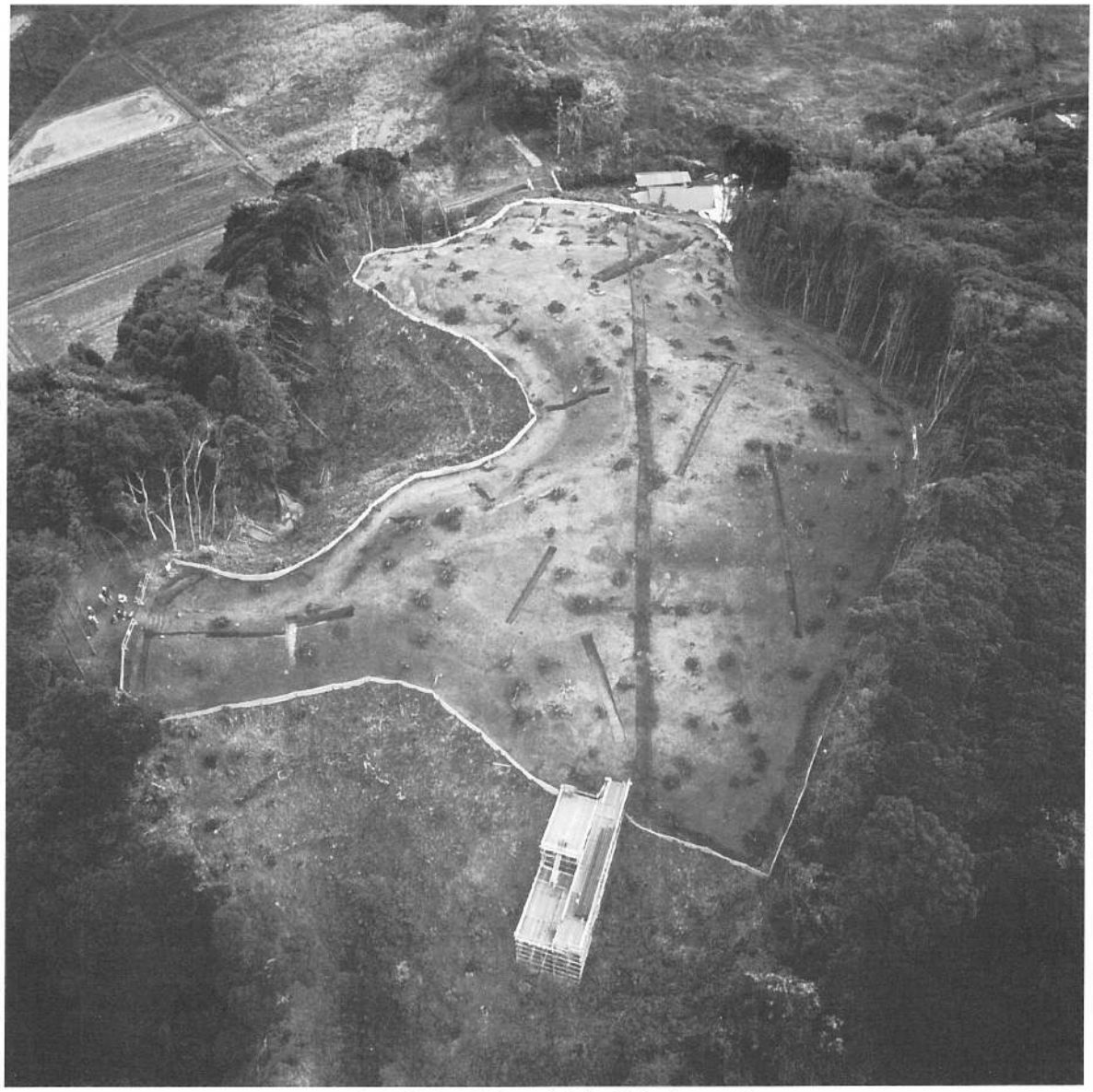
調査区外のため北端の八幡神社境内部の実態は不明であるが，通常，防御施設によって囲まれた内側にある平場が北城の場合は存在せず，自然地形のままの一定区域を囲み守る，類例を見ない特異な形態をとる。築城の工程から考察すると，排土処理のため，まず尾根筋を削平して平場を作った後に切岸や堀を作るのが最良であり，後で平場を作ろうとしたものの中止したとは考えにくい。理由は不明だが，この場合築城者は当初から内側に平場を作る意図はなかったと考えるのが妥当であろう。また，自然地形を残す内側は，樹木等がそのままであったことも想定される。発掘に伴う伐採前には，戦時に槍や鎗柄になる樫の木，矢や矢柄（幹）に使われる篠竹が認められた。北城における平場は切岸外の南西部に確認されているが，これも調査区外のため詳細は不明である。また，東部の切岸１は，切岸２・３とは異なり切岸上部に平坦面を持ち，切岸前平坦部端には切岸掘削で生じた排土を利用した土塁の一部が確認された。これは，堀切から北東に延びる横堀や，南城に残る横堀と共通した構造である。また，いずれも丘陵の東側にのみ存在し，東からの攻撃に備えたものと考えられる。地形的な要因もあるかもしれないが，両城ともに西側に同様の施設は有しない。これらのことから，切岸１は北城南部の横堀と共に，南城の築城に合わせて新造，または改修されたものと考えられ，南城が城として機能していた時代は北城も一連の防衛線を担っていたと推測される。北城・南城が使用されたのは，出土遺物や城郭の形態から15～16世紀後半と考えられるが，このことから北城が先に存在した可能性が窺える。また，遺構の検出状況からみると，北城が全方位的な攻撃を想定したものであり，南城は東からの攻撃に特に備えたものである。これに時代的・社会的背景を加味して考えると，北城は宗家松浦氏，宗家松浦氏が平戸松浦氏に降った後は平戸松浦氏に属したものであろう。南城は当該時代に当該地域が直面した最大の危機である1570年代前半の龍造寺隆信による東からの侵攻に対し，境目の城として平戸松浦氏が備えたものとも考えられる。地理的にも八幡山丘陵は当時石倉山から伸びた稜線が今福湾海上にまで突出しており，伊万里方面から平戸方面に陸路で向かう場合の大きな障壁となっていたと推定される。いずれにしても周辺には城に関わる字名等が残るものの，実戦で使用されることがなかったからか，文献資料中に該当する記録がないため推測の域を脱し得ないが，同じ丘陵上に性格が違う２つの城郭跡を確認したことは今回の調査の大きな成果であった。

今後は北城南西部の平場や南城の発掘調査実施による詳細解明とともに，時代的に重複する梶谷城や谷を隔てた西隣の中ノ瀬遺跡との関係を明らかにすることが課題となろう。（杉原）



第41図　八幡山城跡縄張図（S＝1/2,000）

Ⅵ 図　　版



西部傾斜地～鞍部～東部傾斜地（西から）

図版１　調査区近景

範囲確認調査風景①

範囲確認調査風景②

ＴＰ－３北壁土層

ＴＰ－４土層全景

本調査前（山麓から東方向）

本調査前（鞍部から東方向）

図版２　範囲確認調査と本調査前

鞍部　完掘状況（北から）

ＴＰ－12北壁土層

ＴＰ－21北壁土層

図版３　包含層

ＴＰ－１北壁土層全景

ＴＰ－１北壁土層①

ＴＰ－１北壁土層②

ＴＰ－１北壁土層③

ＴＰ－１北壁土層④（土塁部分）

土塁

図版４　切岸１①

切岸１（北から①）

切岸１（北から②）

切岸１（北から③）

切岸１（北から④）

切岸１上平坦部（北から①）

切岸１上平坦部（北から②）

図版５　切岸１②

切岸１（南から①）

切岸１（南から②）

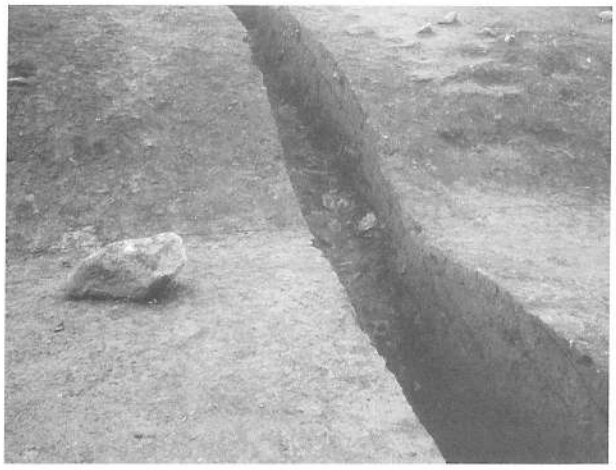
切岸１（南から③）

切岸１（南から④）

切岸１上平坦部（南から①）

切岸１上平坦部（南から②）

図版６　切岸１③



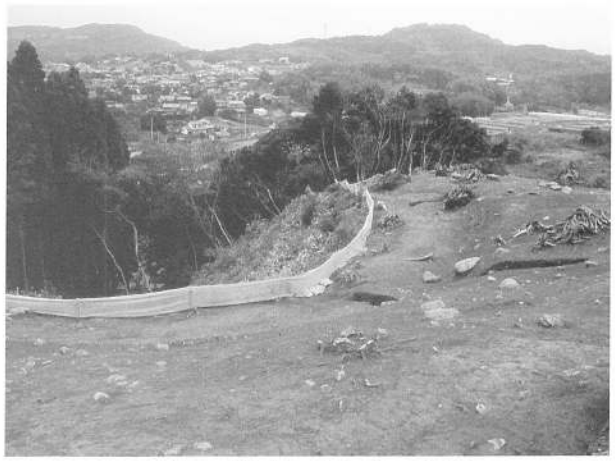
ＴＰ－18北壁土層

切岸２（東から①）

切岸２（東から②）

切岸２（西から）

切岸２（鞍部から北をのぞむ）



切岸２（鞍部から東をのぞむ）

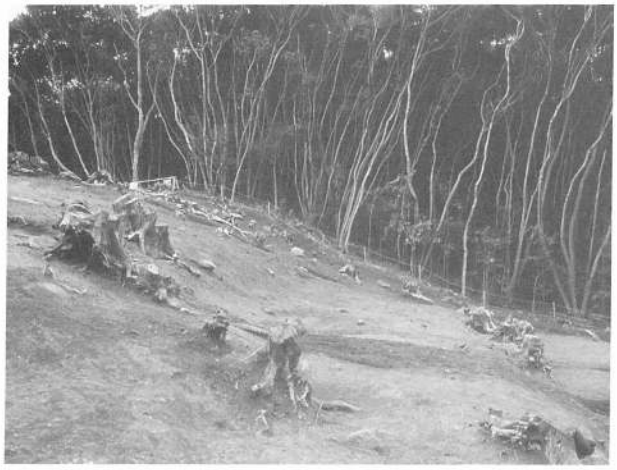
図版７　切岸２

ＴＰ－17土層

切岸２と切岸３（北から）

切岸３（西から①）

切岸３（西から②）

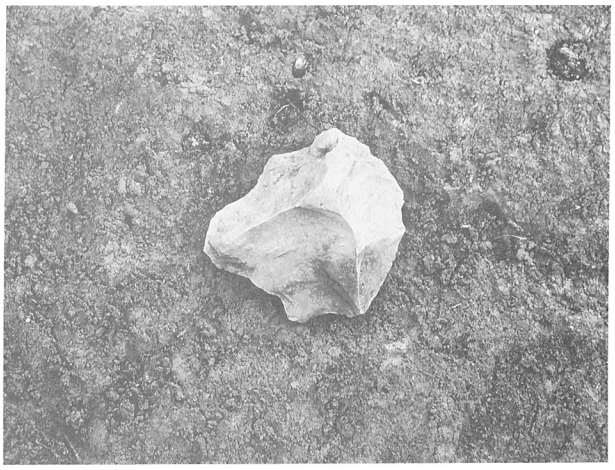


切岸３（北から）

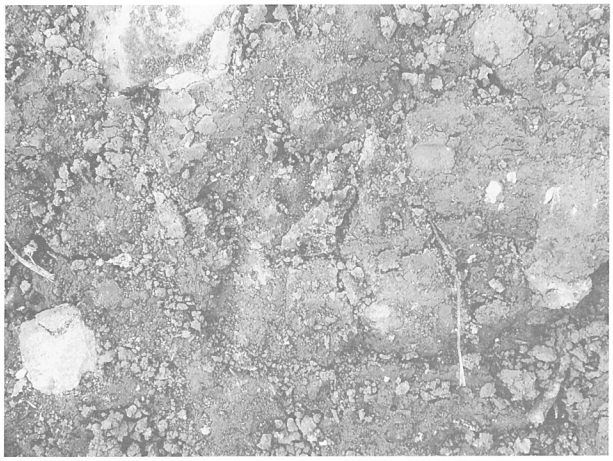
切岸３（南から）

図版８　切岸３

No. 250出土状況（細石刃）



No. 201出土状況（スクレイパー）



No. 232出土状況（石鏃）

No. 172出土状況（石鏃）

No. 5～7出土状況（スクレイパー）

No. 184出土状況（杯）

図版9　遺物出土状況①

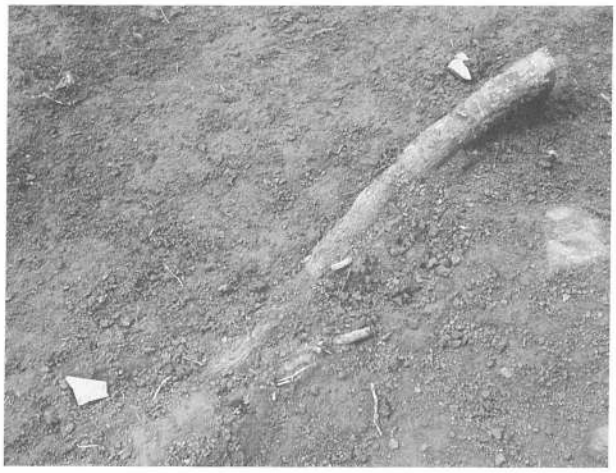
No. 140出土状況（青磁碗）

調査風景

No. 235出土状況（白磁皿）

No. 248出土状況（白磁皿）

No. 271出土状況（青磁碗）



No. 90出土状況（青花皿）

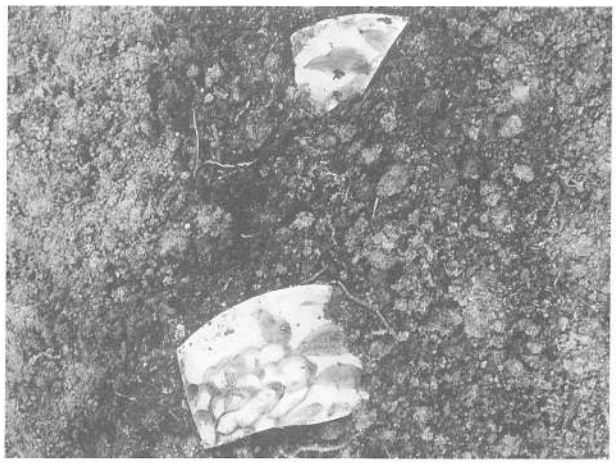
図版10　遺物出土状況②

No.98出土状況（陶器碗）

No.49・51・52出土状況（足鍋・スクレイパー）

No.116出土状況（土師皿）

No.122・123出土状況（土師皿）

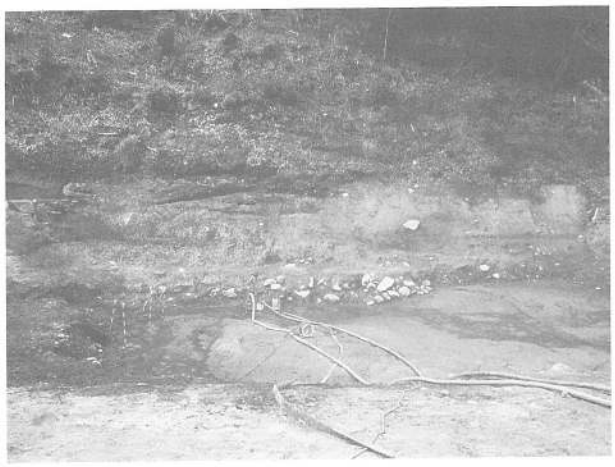


No.58・59出土状況（染付碗）

No.102出土状況（陶器碗）

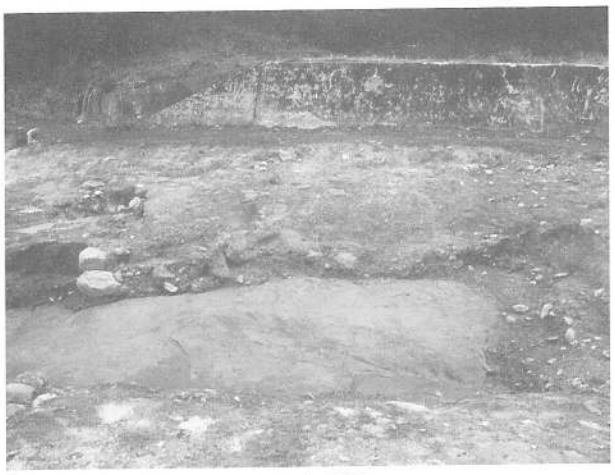
図版11　遺物出土状況③

山麓完掘状況



東壁土層①

東壁土層②

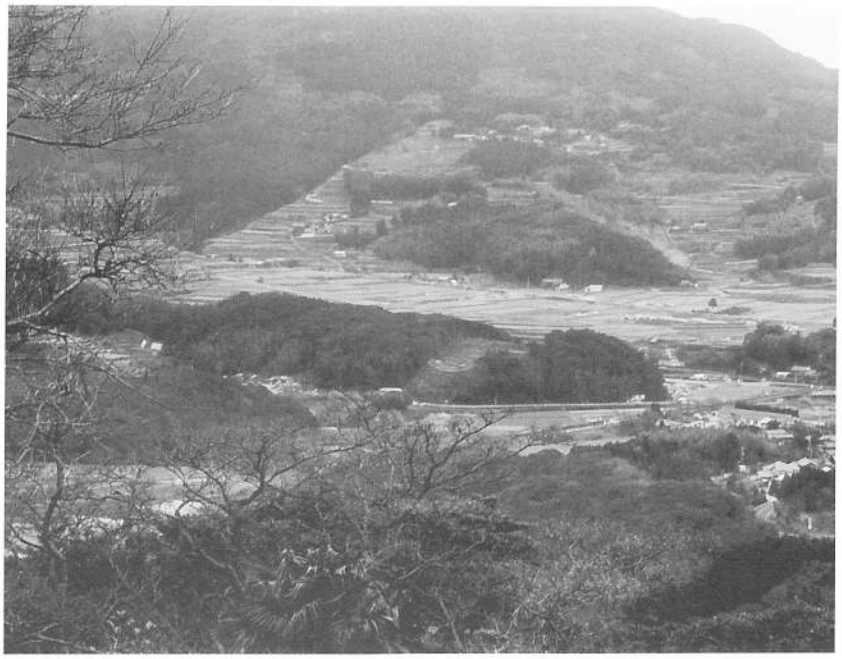


東壁土層③

南壁土層①

南壁土層②

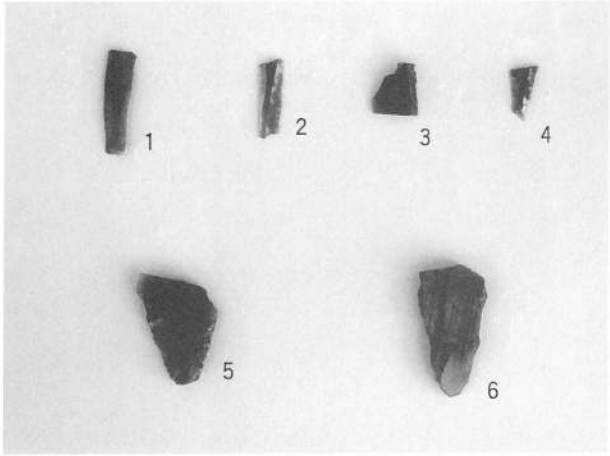
図版12　山麓完掘状況



梶谷城跡から八幡山城跡をのぞむ

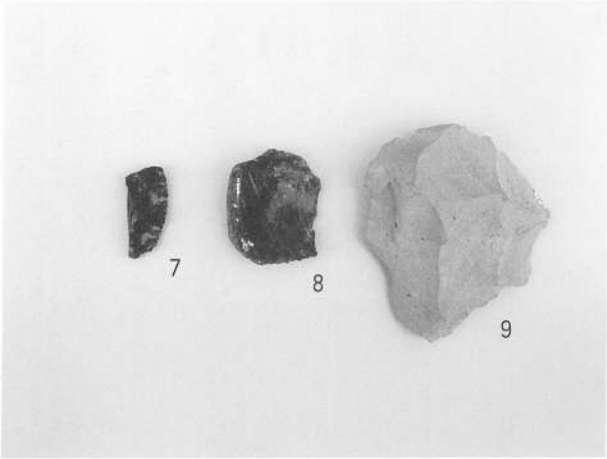
八幡山城跡西側から梶谷城跡をのぞむ

図版13　遺跡遠景

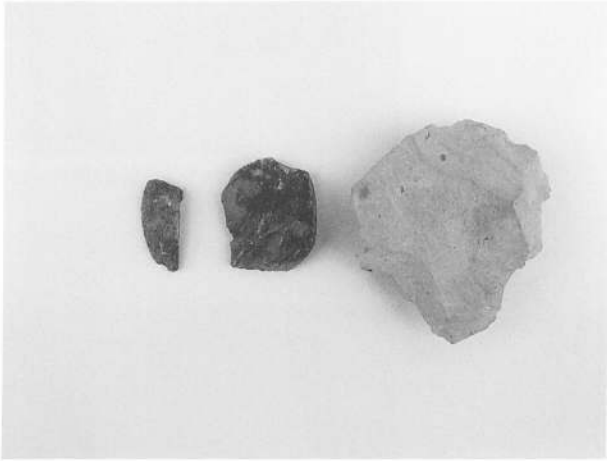


細石刃とナイフ形石器（表）

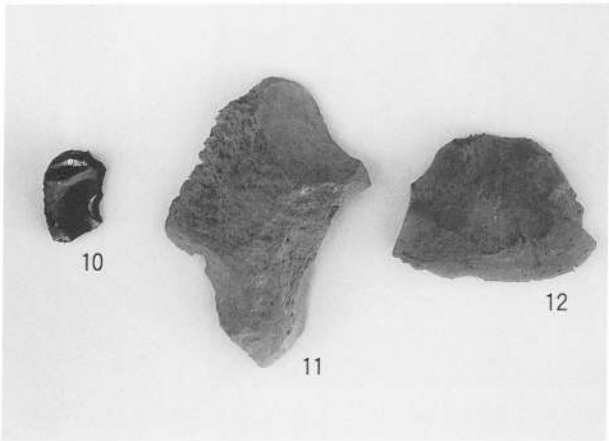
細石刃とナイフ形石器（裏）



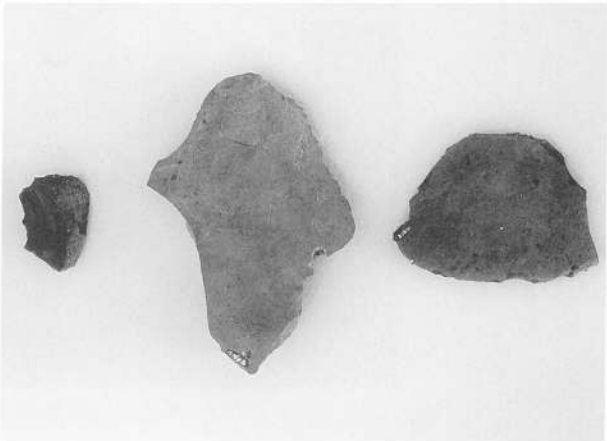
スクレイパー（表）



スクレイパー（裏）

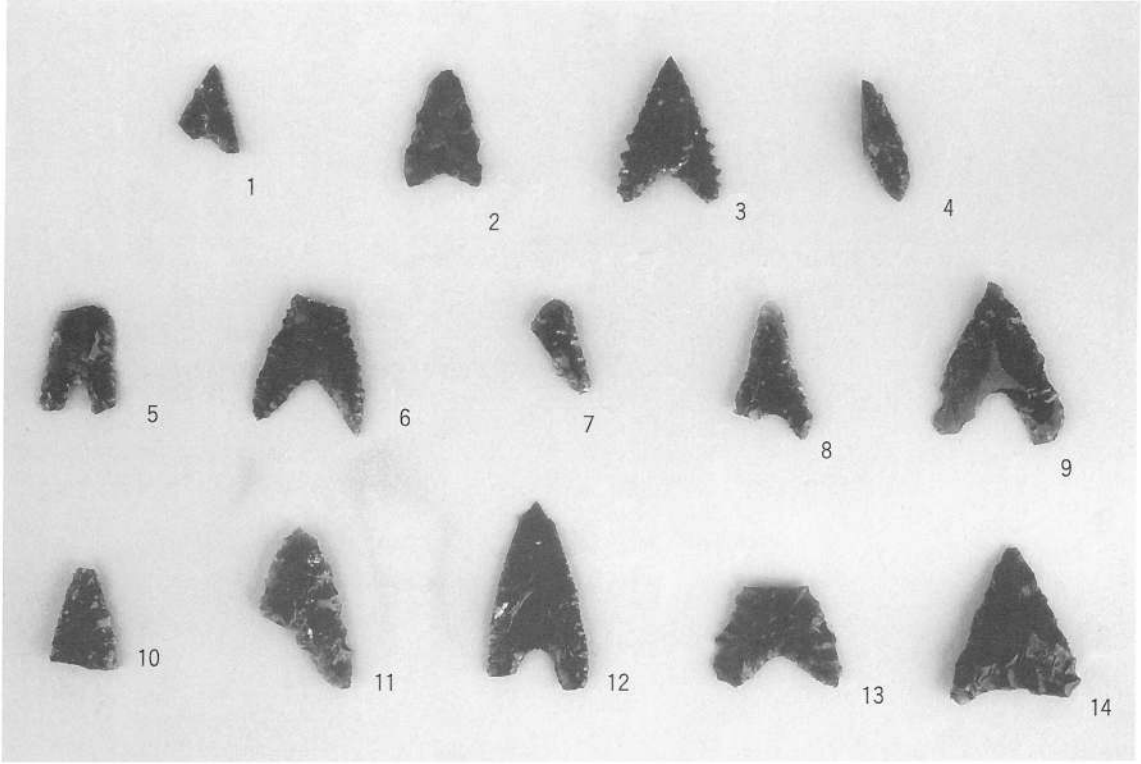


スクレイパー（表）

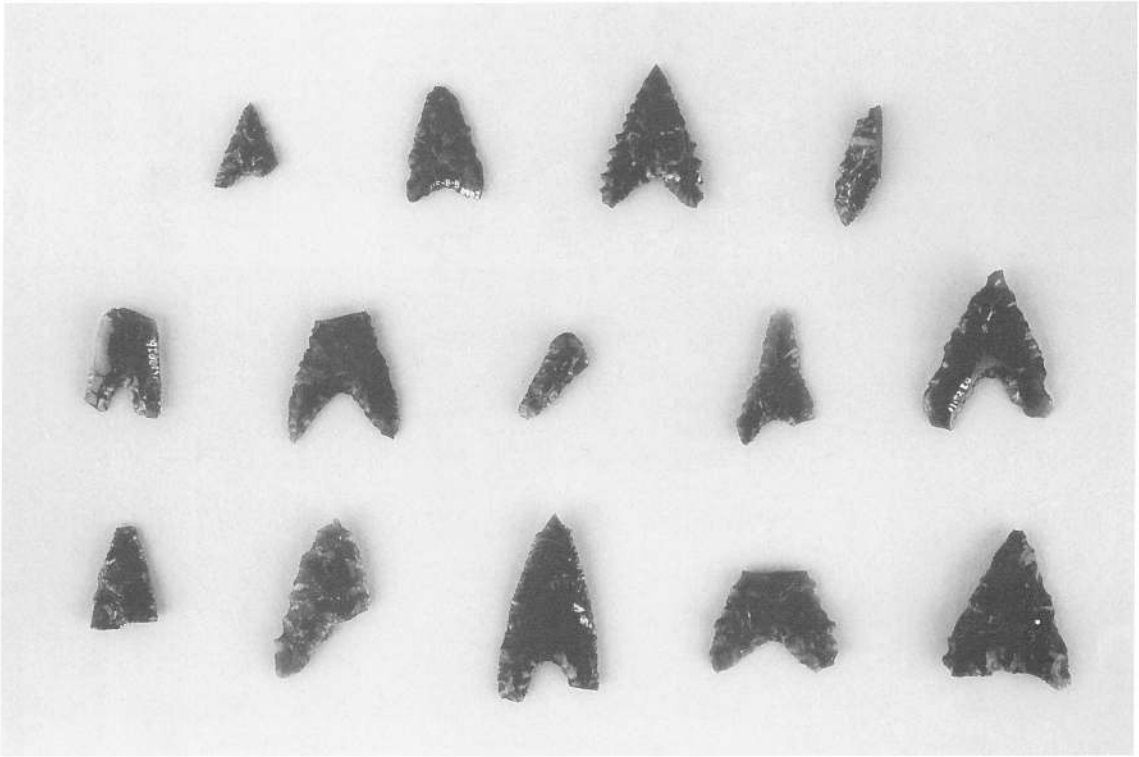


スクレイパー（裏）

図版14　旧石器時代の遺物

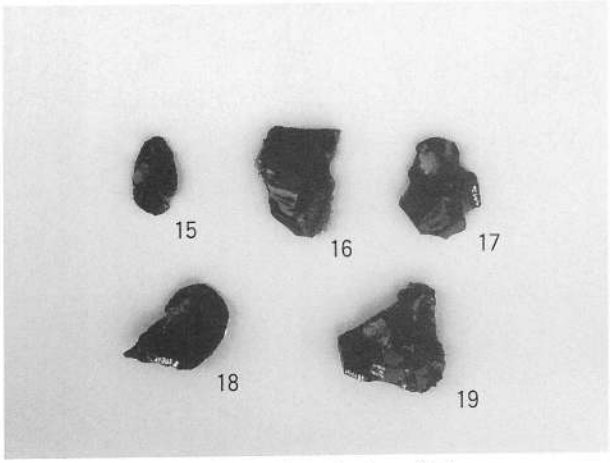


石鏃（表）



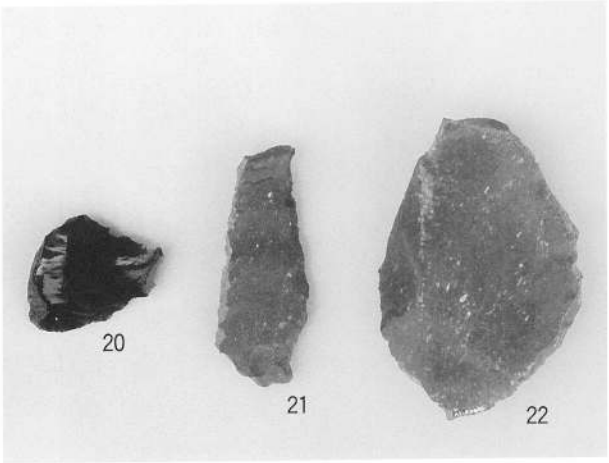
石鏃（裏）

図版15　縄文時代の遺物①



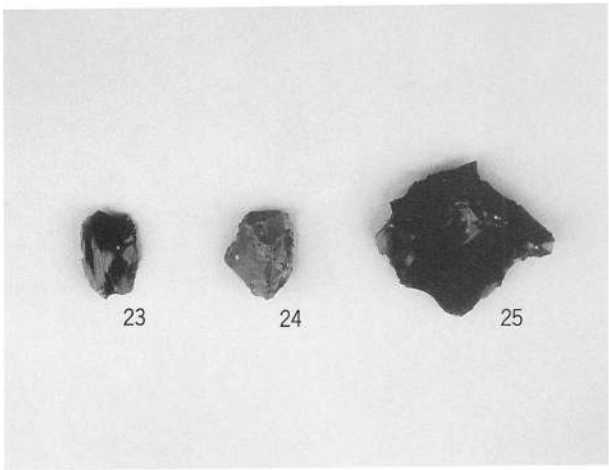
ノッチ・スクレイパー（表）

ノッチ・スクレイパー（裏）

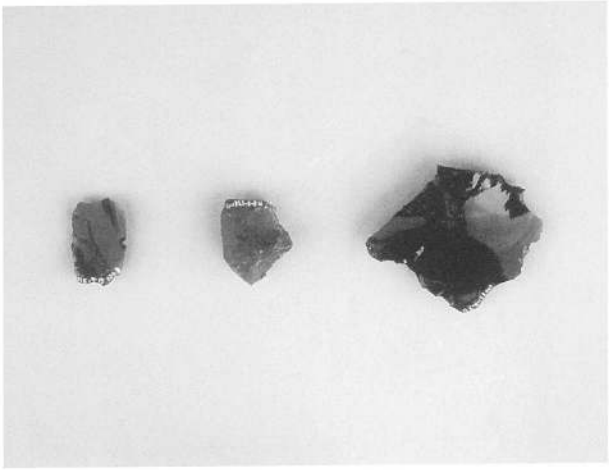


スクレイパー（表）

スクレイパー（裏）



スクレイパー（表）



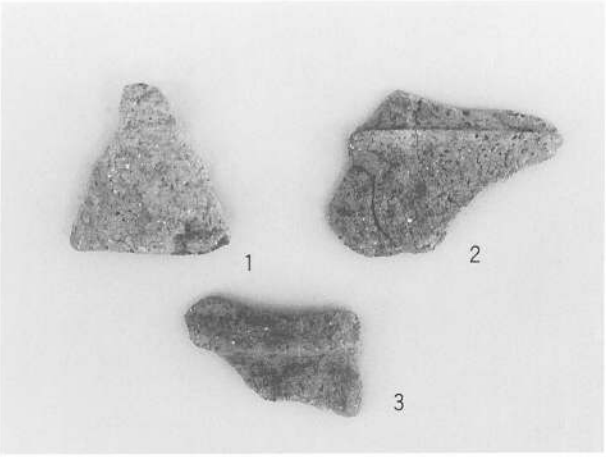
スクレイパー（裏）

図版16　縄文時代の遺物②

砥石

磨石

敲石

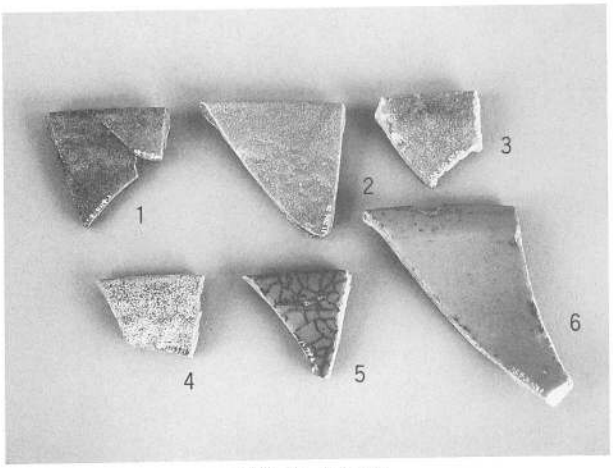


弥生土器①

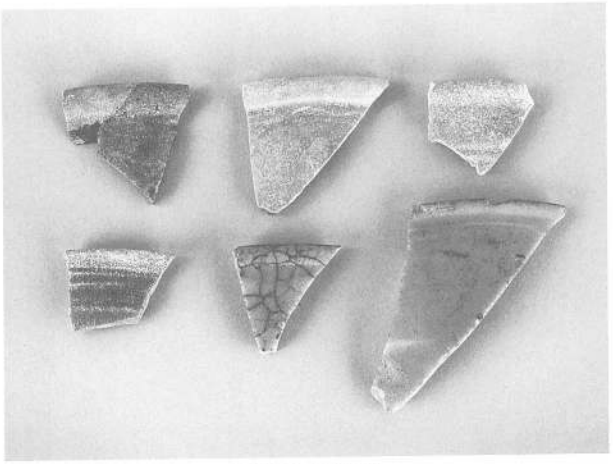
弥生土器②

磨製石斧

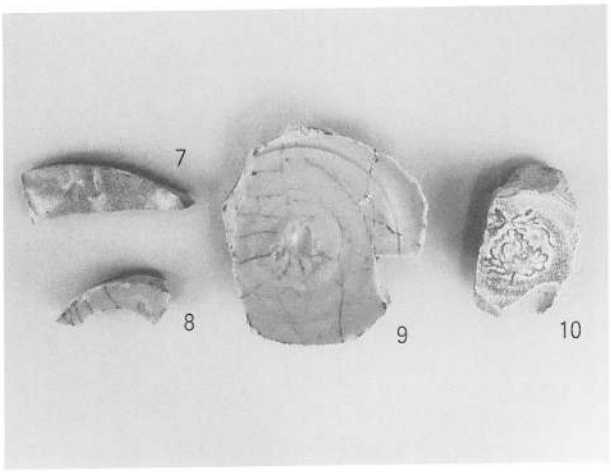
図版17　縄文時代の遺物③・弥生時代の遺物



青磁①（内面）



青磁①（外面）



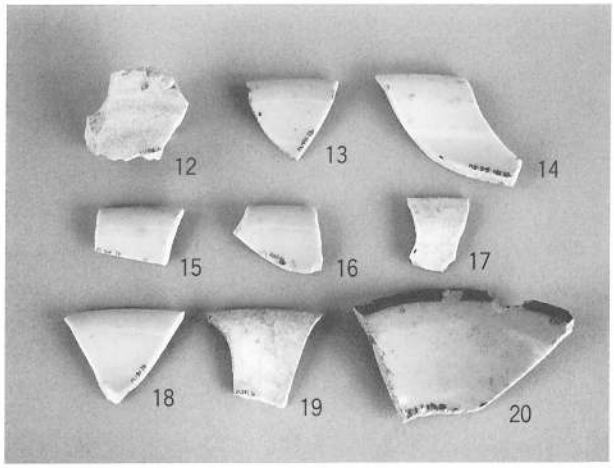
青磁②（内面）

青磁②（外面）

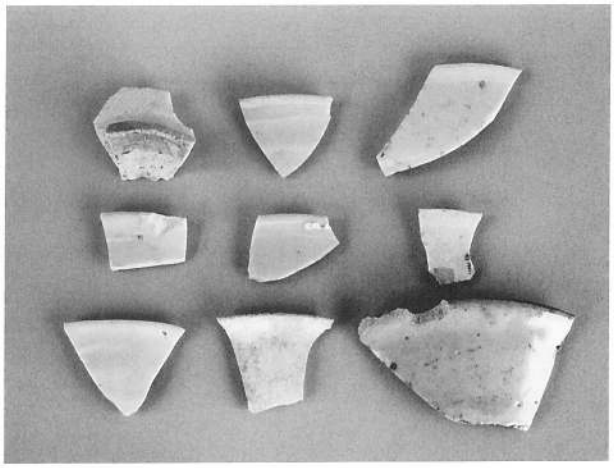
青磁③（外面）

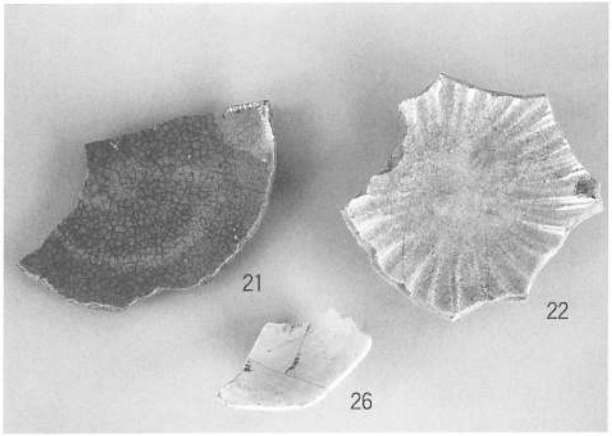
青磁③（底部）

図版18　中世の遺物①

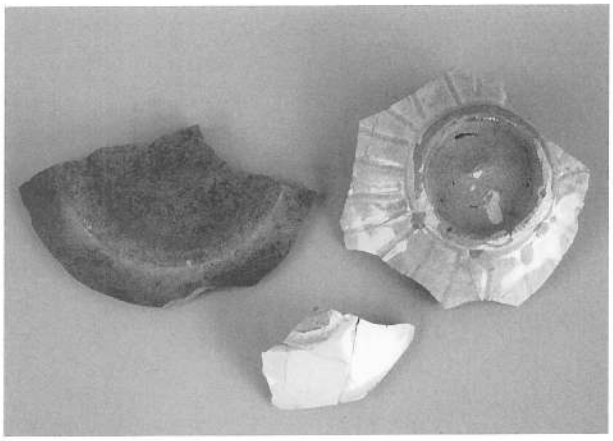


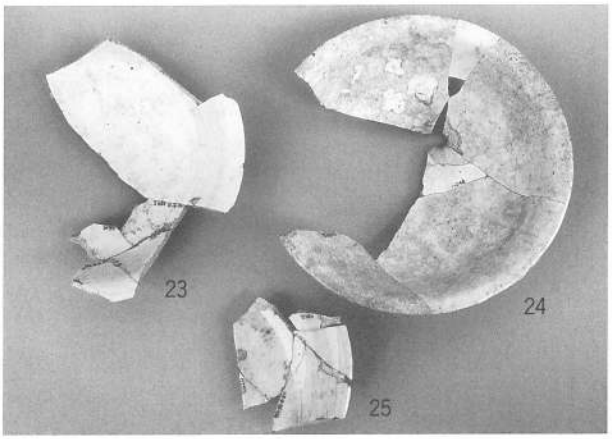
白磁①（内面）


白磁①（外面）

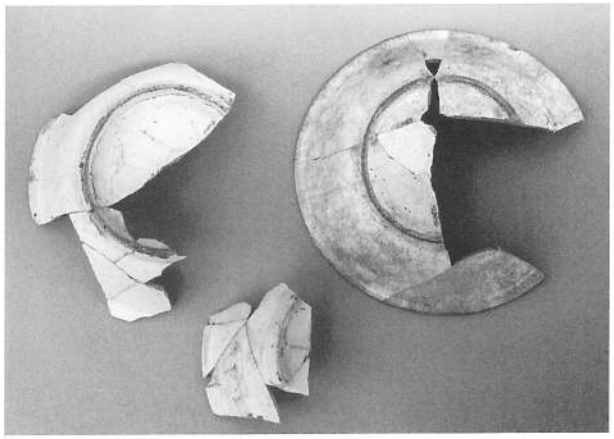


白磁②（内面）

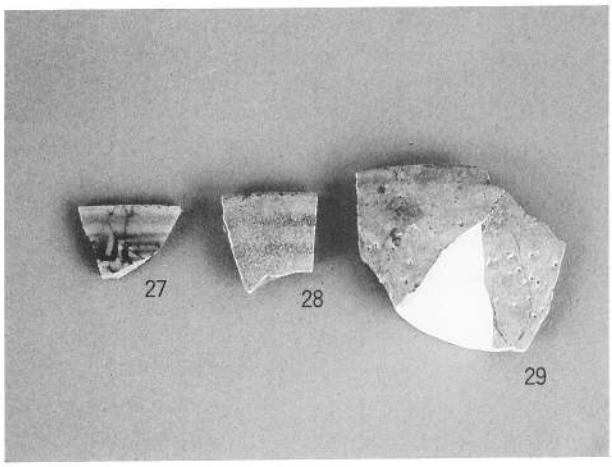

白磁②（底部）



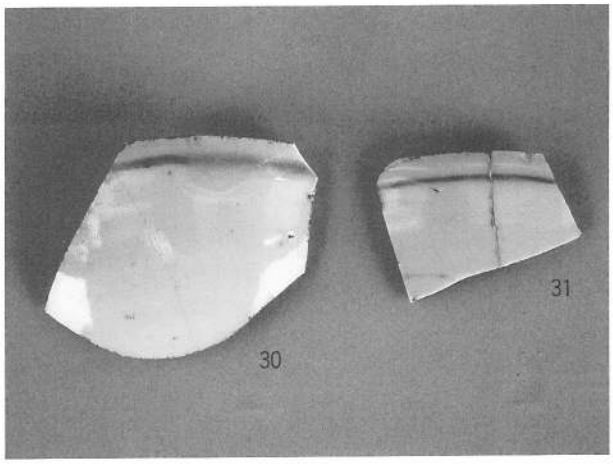
白磁③（内面）


白磁③（底部）

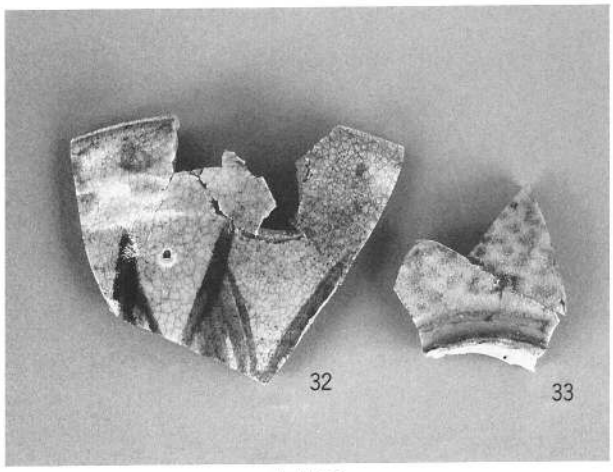
図版19　中世の遺物②



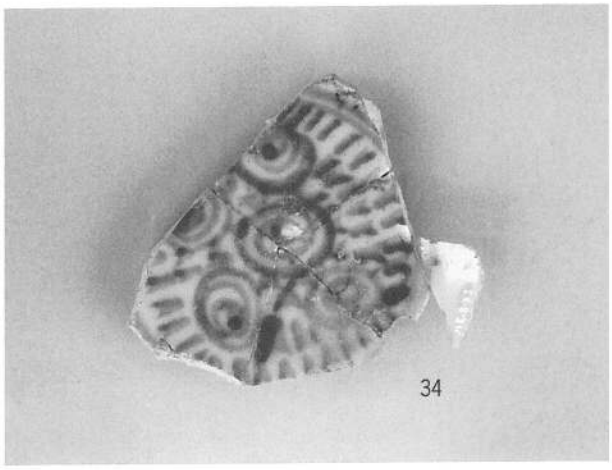
青花①



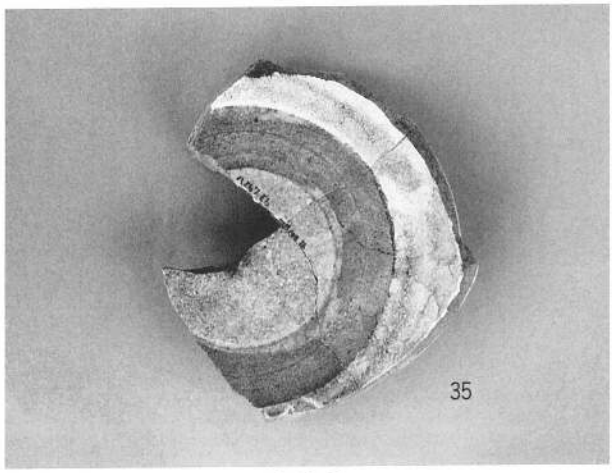
青花②



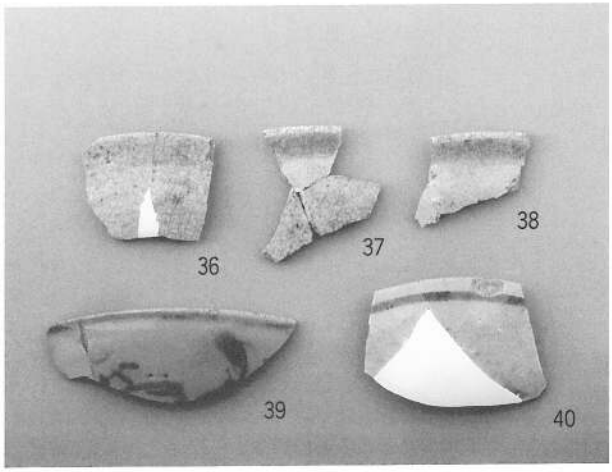
青花③



青花④

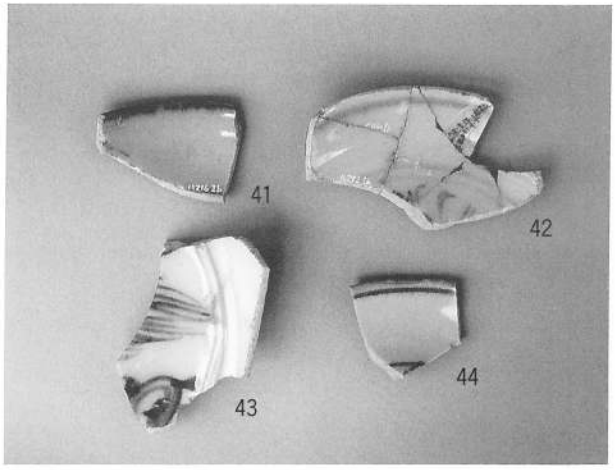


青花⑤



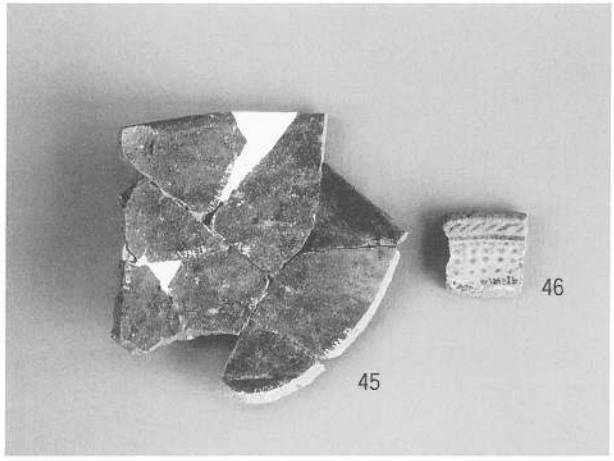
青花⑥

図版20　中世の遺物③

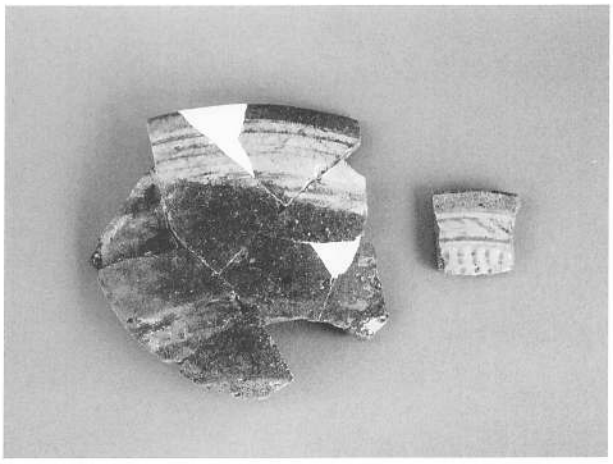


青花⑦（内面）

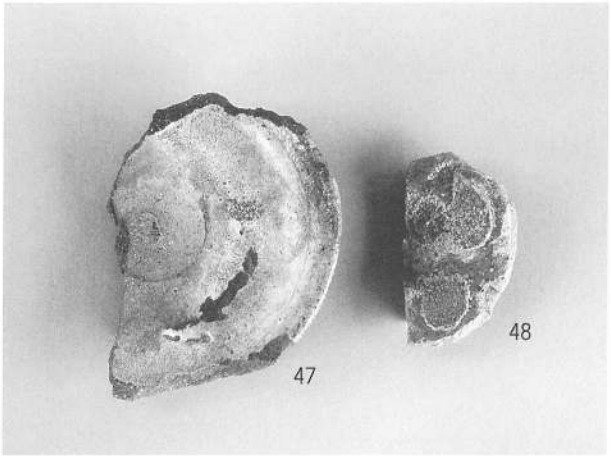
青花⑦（外面）



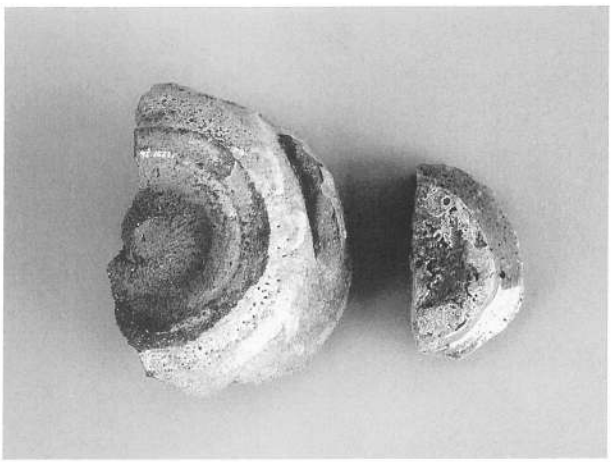
朝鮮陶器①（内面）



朝鮮陶器①（外面）

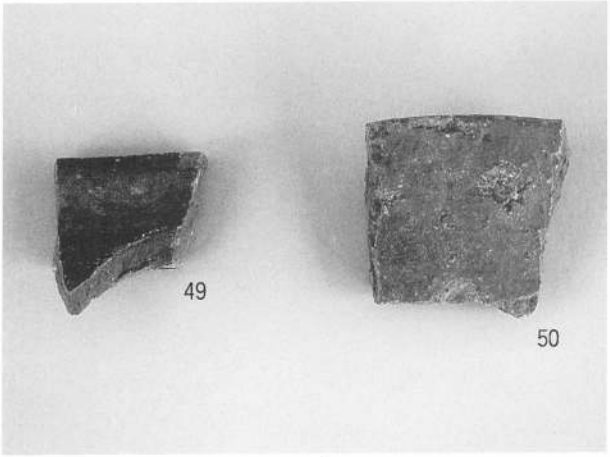


朝鮮陶器②（内面）



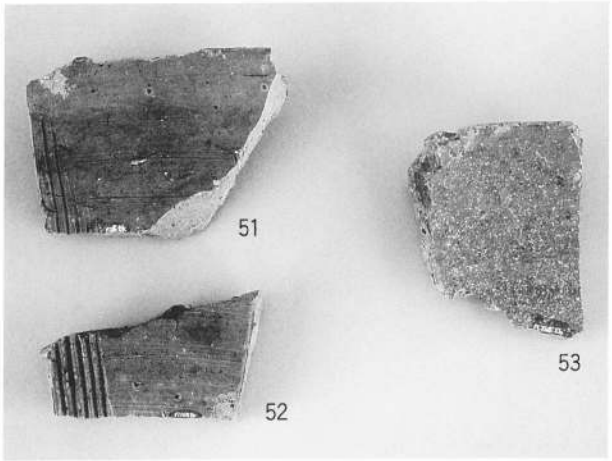
朝鮮陶器②（底部）

図版21　中世の遺物④



備前産擂鉢①（内面）

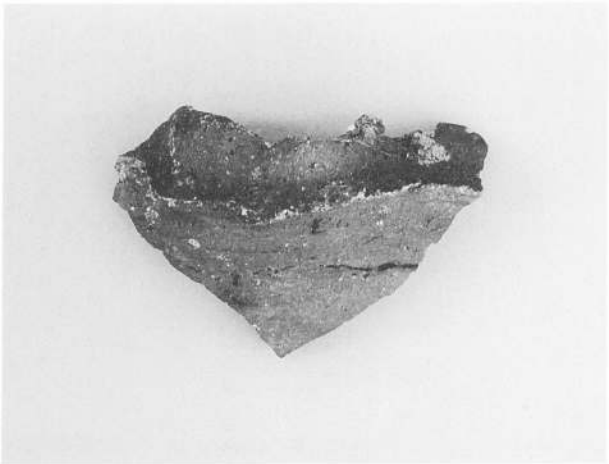
備前産擂鉢①（外面）



備前産擂鉢②（内面）

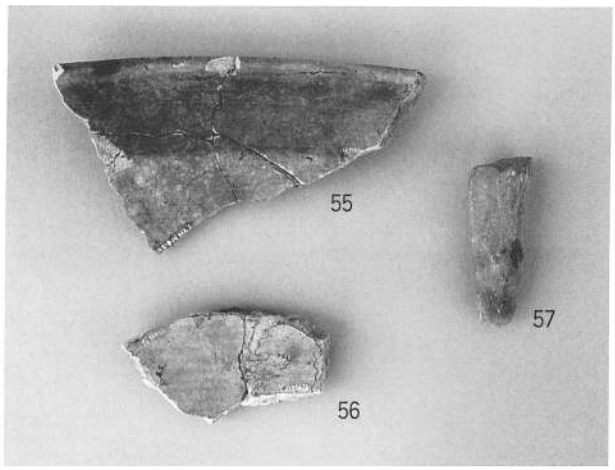
備前産擂鉢②（外面）

備前産擂鉢③（内面）



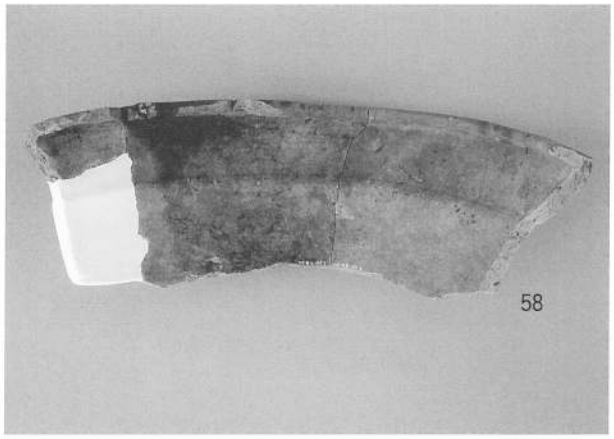
備前産擂鉢③（外面）

図版22　中世の遺物⑤



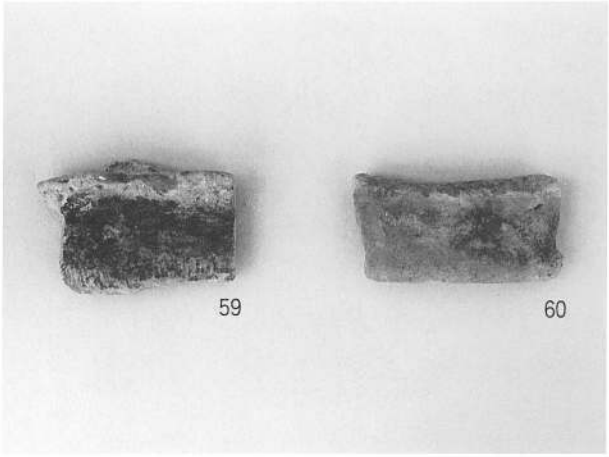
周防型足鍋①（内面）

周防型足鍋①（外面）

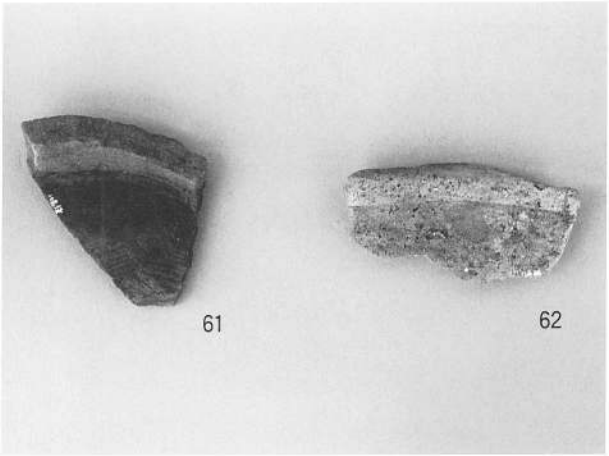


周防型足鍋②（内面）

周防型足鍋②（外面）



土師質鍋

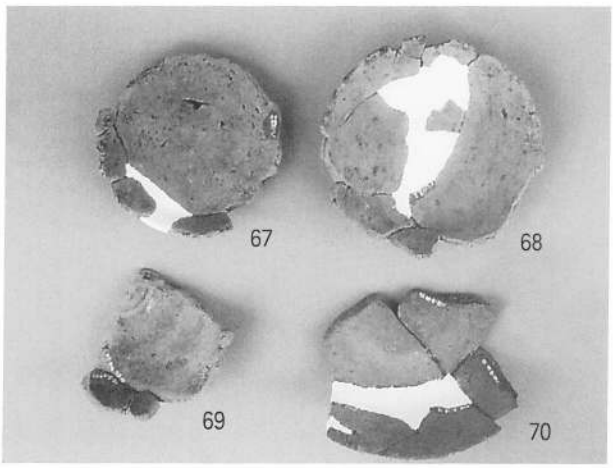


周防型鉢

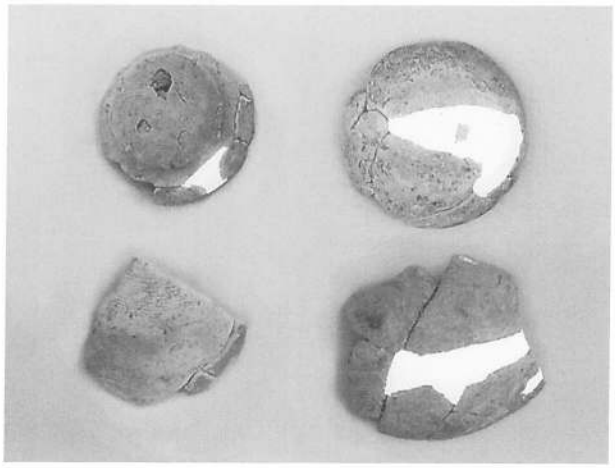
図版23　中世の遺物⑥

土師質皿①（内面）

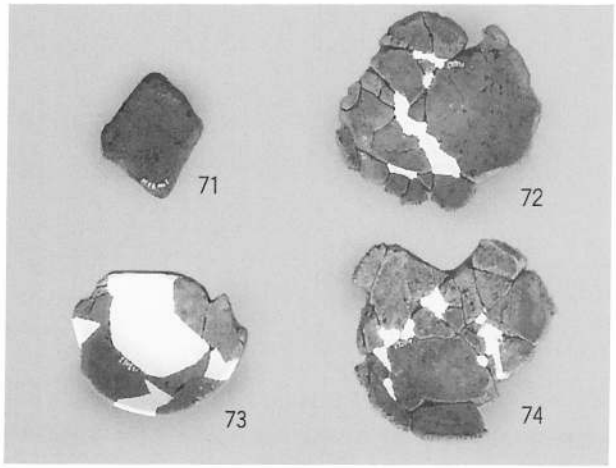
土師質皿①（底部）



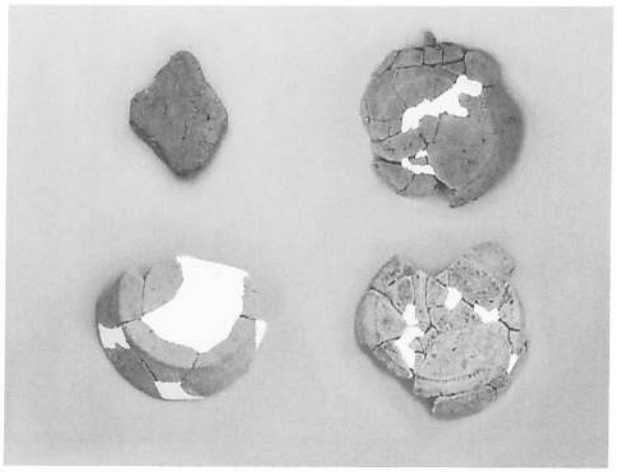
土師質皿②（内面）



土師質皿②（底部）



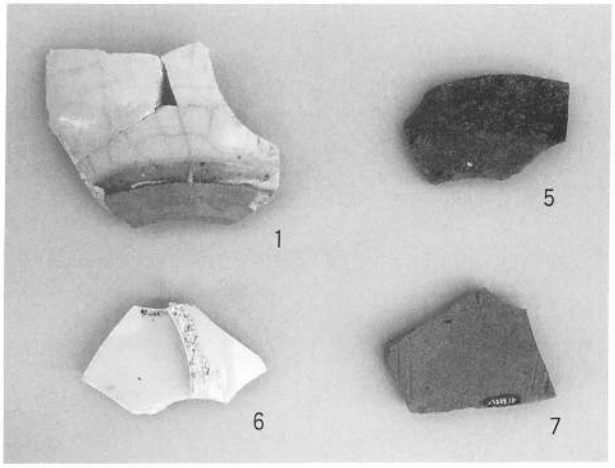
土師質皿③（内面）



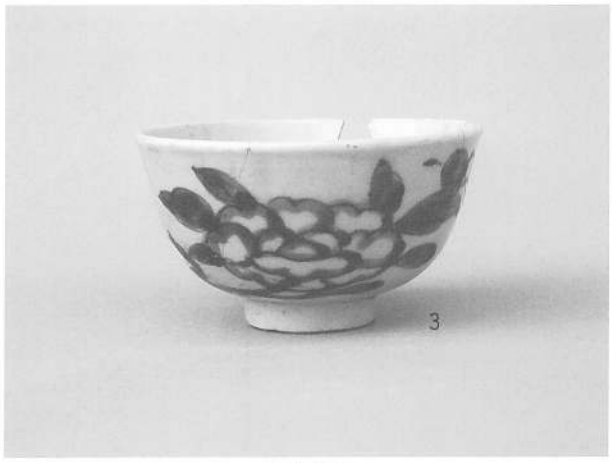
土師質皿③（底部）

図版24　中世の遺物⑦

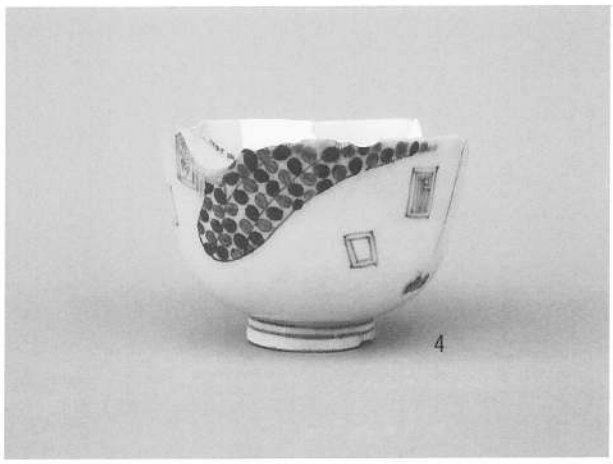
陶器碗



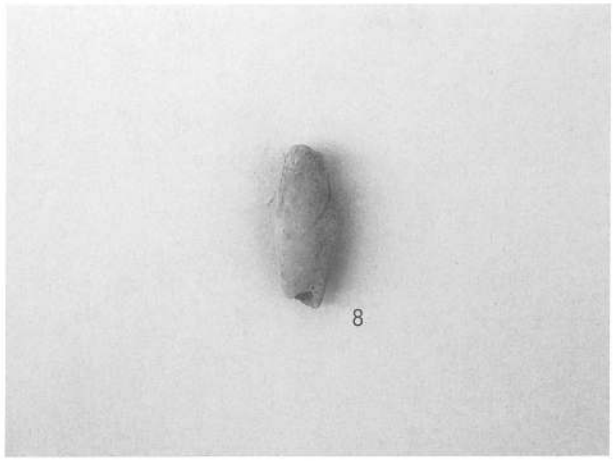
磁器碗・皿と陶器皿・鉢



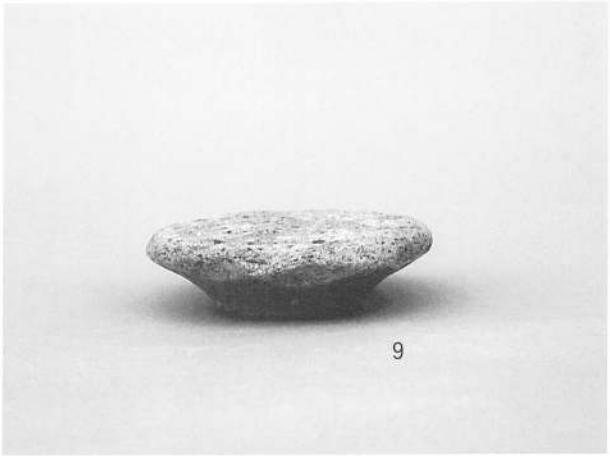
染付碗①



染付碗②

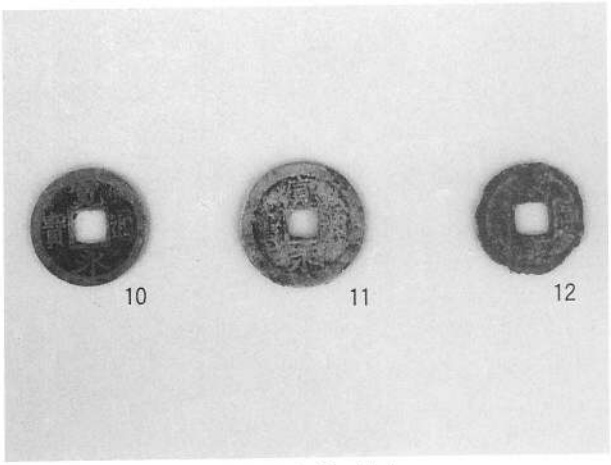


土錘

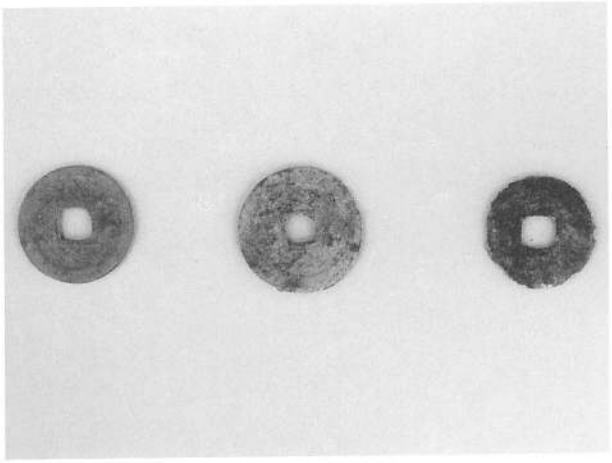


ハマ

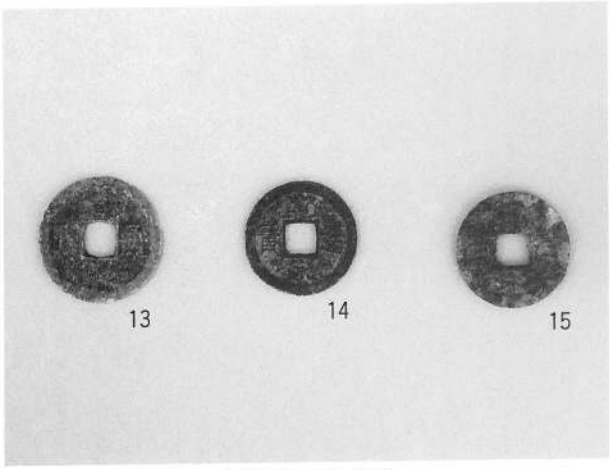
図版25　近世の遺物①



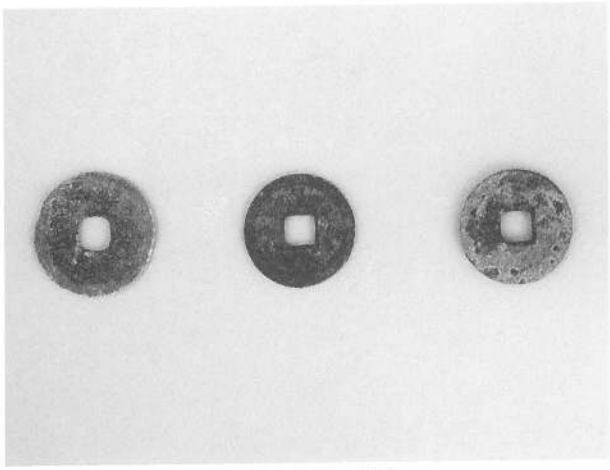
寛永通宝①（表）



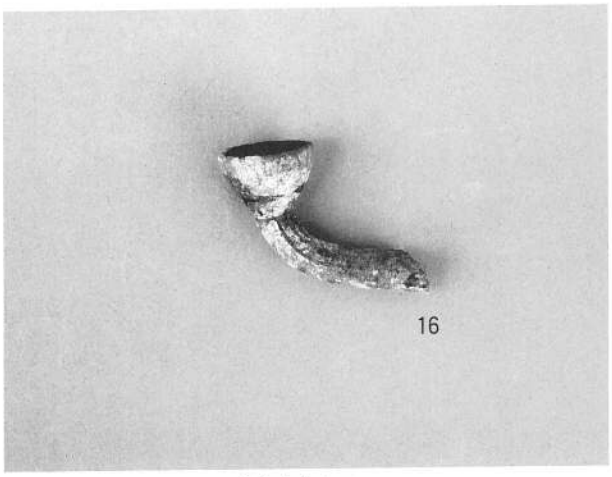
寛永通宝①（裏）



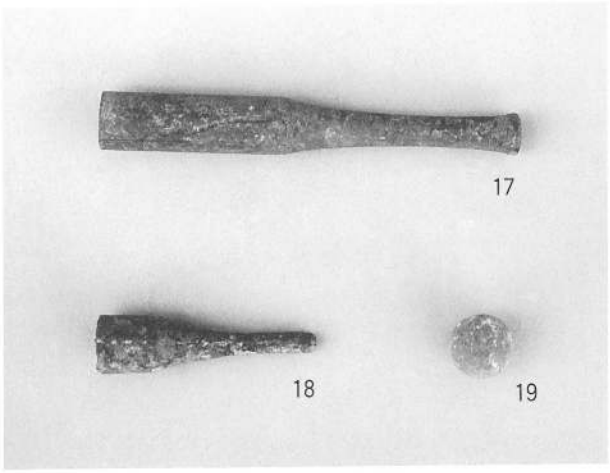
寛永通宝②（表）



寛永通宝②（裏）



羅宇キセル



羅宇キセルと鉛玉

図版26　近世の遺物②

Ⅶ 附　　編

1　長崎県松浦市今福町八幡山城跡の踏査所見について

奈良大学文学部文化財学科　千田　嘉博教授

（1）　平成18年度踏査

①調査の方法

2006年５月29日に長崎県松浦市今福町八幡山の踏査を行ったので所見について報告する。調査は地表面観察方法を用い，遺構の計測はOptilogic社の400LHを使用した。

八幡山は標高40～47m，比高約40mの丘陵で，ほぼ南北に尾根筋が伸びている。丘陵北端が八幡宮境内となっているほかは雑木林となっており，八幡宮より南側では整備された山道はない状態である。しかし下草は多くなく，地表面の観察に大きな支障はなかった。

②遺構の概要

踏査の結果，八幡山に中世城郭跡を確認した。遺構は八幡山の最高所で南端に近い47.7mの頂部を中心とした部分（南城と仮称）と，八幡宮南側を中心とした丘陵北端部（北城と仮称）の２ヶ所に認められた。このうち北城の城域は西九州自動車道計画用地に含まれている。

・南城

南城は丘陵の最高所を主郭として３・４段の曲輪から構成していた。曲輪群の西側斜面は急な崖になっており，曲輪と切岸以外の人口的な防御施設は認められない。しかしやや緩斜面となっていた東側斜面には全長約60mの空堀を巡らして守りを固めていた。堀の幅は７～８m，現況の曲輪面と堀底との比高差は５～６mを測る（堀底は埋没しているので，実際はさらに深い）。空堀の外側には対岸土塁を明瞭に確認された。

城域の南端は堀切りが尾根筋を断ち切り，さらに対岸土塁も崖面に接した西端まで巡りきって交通を遮断したのに対し，北側の尾根筋では空堀に土橋を架けて出入り口と城道を設定していた。こうしたことから八幡山城の南城は，北側に正面をもち，八幡宮までつづく丘陵を城域として意識した城であったと理解される。地表面で観察される遺構年代は15世紀～16世紀後半と思われる。

・北城

八幡社境内と丘陵頂部との間に位置する標高40m周辺の尾根筋が八幡山北城の城域である。ここでは尾根筋を断ち切る幅約８mの空堀が認められ，この空堀の西側は斜面に伸びて堅堀となり，東側は尾根筋に沿って伸びた横堀となっていた。堀切りの壁の比高を観察すると，北側が高く，南側は低いことが判明した。これよりこの堀切りは，南城の外構えとしての堀切りではないことが明らかで，もうひとつの城があることを強く示唆していた。

そこで堀切西側斜面に伸びた堅堀で守られた北側を踏査すると，堅堀の内側に土塁を添えた大型の帯曲輪を確認できた。明らかに城郭の遺構と評価できる。さらに堀切り東側で北に曲がって伸びた横堀をたどると，それは八幡宮境内との間にある谷筋で一旦とぎれていた。しかし子細に観察すると横堀の延長上に切岸のラインが連続，さらに堀のつづきが主尾根から東側へ派生した北隣の尾根筋を断ち切って伸びたことを確認できた。

つまり北城は谷を隔てた緩斜面をとりこんだ城郭と評価され，南城とはかなり遺構のあり方が異なることが観察されたのである。南城の特徴は，(1)曲輪面の削平が十分でないこと，(2)地表面から観察される遺構は堀切りと切岸によって構成された防御ラインとその内側にセットになった帯状の削平地であること，(3)東側斜面に向けて防御の正面を置くこと，である。また地表面からは，詳らかにできないが，八幡社の境内になっている尾根先端の削平地も本来は北城の城域になっていたと考えるのが自然だろう。

こうした北城の構造的な特徴が形成された理由にはいくつかの可能性を指摘できる。まず臨時の施設であった可能性が考えられる。南城の前衛として臨時に設けられたか，籠城者の階層性の違いによる差異が表れたものと考えられる。つぎに時期差と考えることも可能である。この場合，北城は南城に先行するより古い形態を留めている，と評価することになる。しかし南城が最初に創築され，のちに北城ができたと考えるべきか，南城も北城も同時にあったが，のちに南城だけが新しい形態に改修されたと考えるべきかは判定できない。

③結語

いずれにせよ同じ丘陵上に大きく性格を異にしたふたつの城郭跡が残されてきたわけであり，それぞれをどのように正しく解釈して評価するかは，松浦地域の中世史を解明する上で重要な意味をもつといえる。その差がたとえ性格や機能によるものであったとしても，また時期差によるものだったとしても，村・領主・権力の変性過程を鮮やかに示すものであり，全国的に見てもきわめて興味深い調査例となるからである。

こうした観点から，八幡山城は本来保存することが望ましい城跡ではあるが，やむを得ない事態であるので，的確・厳密な発掘調査を行うことで遺跡に代わる正確な記録を残し，学術的な検討・評価を行うべき遺跡と考えられる。

（2） 平成21年度発掘調査指導

2009年11月９日に長崎県松浦市に所在する八幡山城(北城)の調査を長崎県教育委員会の依頼によって行ったので，所見を報告する。八幡山城は長崎県教育委員会によって発掘調査が進められており，主要な遺構を確認できた。このなかで最も注目されたのは，調査区東側で検出された切岸遺構であった。この遺構は2006年５月29日の踏査でも確認したものだが（千田嘉博「長崎県松浦市八幡山の踏査所見について」），地表面観察で予測した施設であったことが，発掘で証明された。

この切岸遺構は，調査区外の南側尾根筋を断ち切った堀切りから始まっており，調査区に隣接して東側に伸びた尾根筋を堀切りで遮断して北側へつづいていた。堀そのものは谷筋へとつないで収束したが，切岸の段はさらに伸びて調査区内へとつづいた。

通常，こうした切岸は城郭の防御施設として，直上の曲輪と組み合わせて用いられたが，八幡山城（北城）では，曲輪と分離して一定の範囲を囲郭して守った点が特異である。理由としては①北城が文字史料に見える「陣」に相当した施設であり，東側に向けた限定的な方向に防御線を構築した可能性，②朝鮮半島・中国に見られた城壁と曲輪が分離した東アジア的な城郭プランの影響を受けて成立した城であった可能性，を指摘できる。

いずれにせよ基本は臨時の施設であり，丘陵先端の要地に占地した陣もしくは砦と考えられる。出

土遺物は14世紀から16世紀におよんでおり，何度かの使用があったのであろう。陣とすれば，考古学的に陣の全貌を明らかにした調査例はきわめて少ないので，重要な調査例となる。また東アジア的な城郭プランを採用した砦だったとすれば，東アジアの海に活躍した松浦氏に関わった城にふさわしく，やはり注目される調査といえる。

なお現状のまま保存される見通しの八幡山城の南城は，北城と性格が異なり，室町期から戦国期にかけたこの地域の政治的な城として機能したものと思われる。今福町周辺の中世史の要となる城跡であるので，長崎県教育委員会と松浦市教育委員会は地権者と協議の上，適切な保護と基礎的な整備を行うよう強く希望したい。また西九州自動車道が建設されると，北城を経由した歴史的な城道が寸断される。このため南城跡を見学するための適切な道筋を自動車道の建設にあわせて布設する必要がある。関係機関の誠実な調整を願いたい。

平成21年度　八幡山城跡発掘調査指導状況

2　自然科学分析

（1）　放射性炭素年代測定

株式会社　パレオ・ラボ

①　試料と方法

測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS:NEC 製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C 年代，暦年代を算出した。

表１　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD－15516	遺跡名：八幡山城跡 遺構：SX１ その他：他の場所で焼かれた後に堆積	試料の種類：炭化材(枝材) 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N）
PLD－15517	遺跡名：八幡山城跡 遺構：SX４ その他：凹地に土や炭化物が流入	試料の種類：炭化材(枝材) 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N）
PLD－15518	遺跡名：八幡山城跡 遺構：SX５ その他：凹地に土や炭化物が流入	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N）

②　結果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C 年代，^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を，図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。^{14}C 年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には，^{14}C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C 年代誤差（±１σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C 年代がその^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は次のとおりである。暦年較正とは，大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C 年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}C の半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：Intcal09）を使用した。なお，１σ 暦年代範囲は，OxCal の確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C 年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP± 1σ)	^{14}C 年代 (yrBP± 1σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-15516	−11.59±0.17	146±20	145±20	1679AD(11.4%)1694AD 1727AD(28.3%)1765AD 1773AD(1.7%)1776AD 1800AD(9.8%)1813AD 1919AD(16.9%)1940AD	1668AD(15.7%)1706AD 1720AD(33.2%)1782AD 1796AD(11.3%)1819AD 1832AD(17.3%)1882AD 1915AD(17.9%)1946AD
PLD-15517	−26.39±0.15	83±18	85±20	1700AD(17.7%)1720AD 1819AD(12.9%)1833AD 1880AD(37.6%)1915AD	1694AD(26.2%)1728AD 1812AD(69.2%)1919AD
PLD-15518	−25.87±0.18	956±19	955±20	1028AD(22.9%)1046AD 1091AD(35.6%)1121AD 1140AD(9.6%)1148AD	1022AD(30.5%)1058AD 1076AD(64.9%)1155AD

③考察

図２に八幡山城跡出土試料の暦年代範囲の分布図を示す。以下２σ暦年代範囲を基に述べる。

PLD-15516（SX１）は，１σ暦年代範囲で1679-1694calAD（11.4%），1727-1765calAD（28.3%），1773-1776calAD（1.7%），1800-1813calAD（9.8%）および1919-1940calAD（16.9%），２σ暦年代範囲で1668-1706calAD（15.7%），1720-1782calAD（33.2%），1796-1819calAD（11.3%），1832-1882calAD（17.3%）および1915-1946calAD（17.9%）となり，17世紀後半～20世紀中頃と近世以降の範囲を示した。

PLD-15517（SX４）は，１σ暦年代範囲で1700-1720calAD（17.7%），1819-1833calAD（12.9%）および1880-1915calAD（37.6%），２σ暦年代範囲で1694-1728calAD（26.2%）および1812-1919calAD（69.2%）となり，17世紀末～20世紀前半と近世以降の範囲を示した。

PLD-15518（SX５）は，１σ暦年代範囲で1028-1046calAD（22.9%），1091-1121calAD（35.6%）および1140-1148calAD（9.6%），２σ暦年代範囲で1022-1058calAD（30.5%）および1076-1155calAD（64.9%）となり，11世紀前半～12世紀中頃の範囲を示した。これは平安時代後期～末期にあたる。ただし，木材の場合，最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが，内側の部分を測定すると最外部からの年輪分だけ古い年代が得られる（古木効果）。よって，最外年輪が確認されていない当試料は古木効果の影響を考慮する必要がある。

【参考文献】

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代，３-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

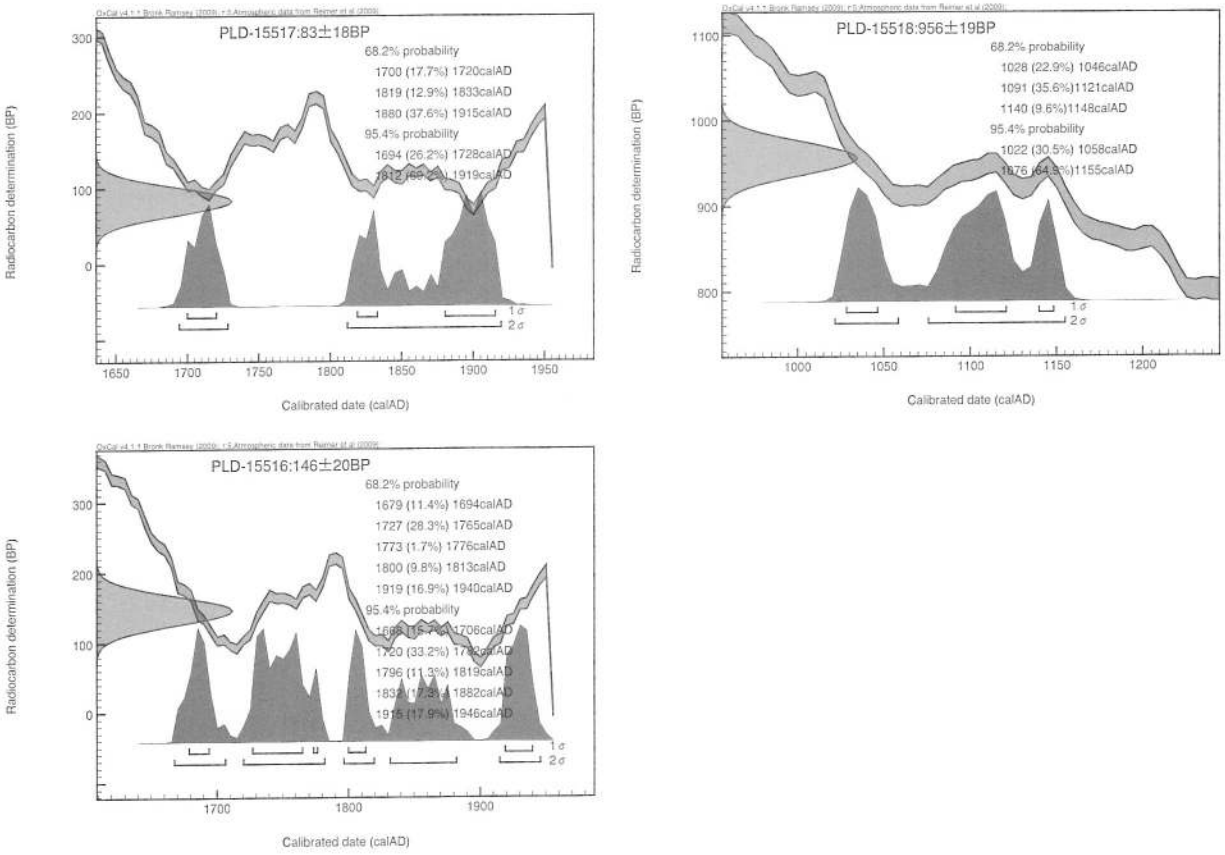


図１　暦年較正結果

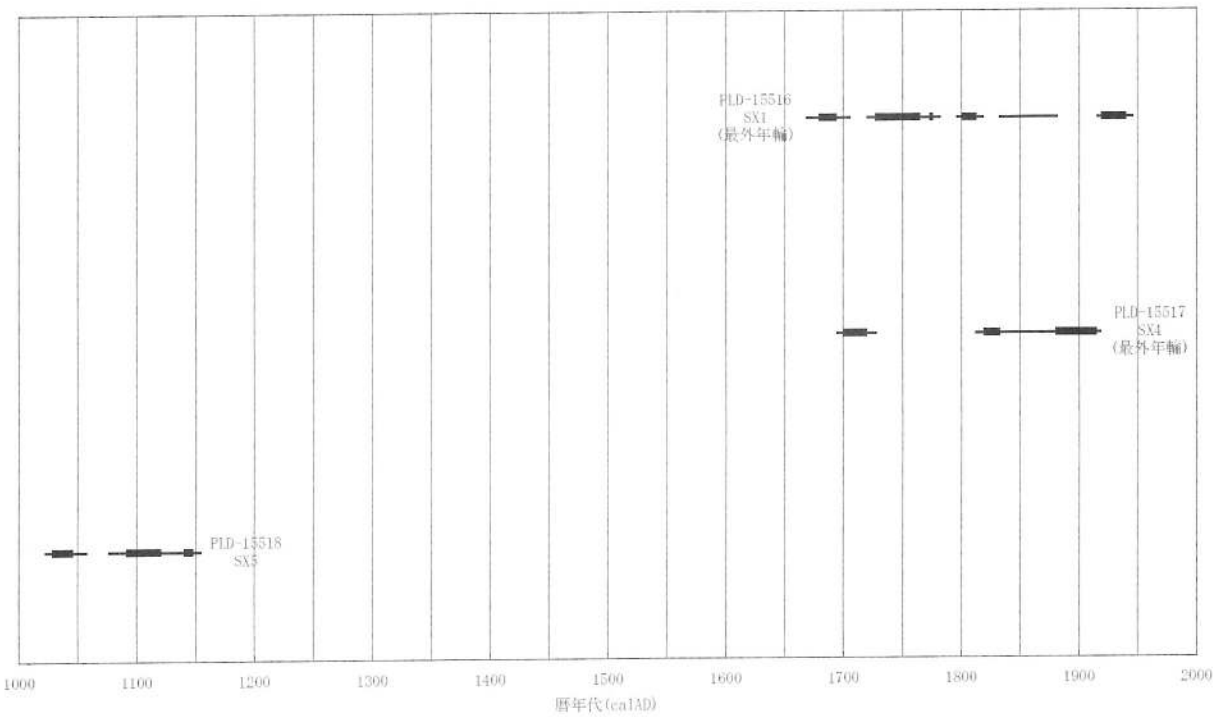


図２　八幡山城跡出土試料の暦年代の分布（太線：１σ，細線：２σ）

報告書抄録

ふりがな	はちまんやまじょうあと
書名	八幡山城跡
副書名	一般国道497号伊万里松浦道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅰ
シリーズ名	長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	副島和明・杉原敦史・矢葺都子・松田菜津子・荒井春房
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－8570　長崎県長崎市江戸町2番13号　TEL095－824－1111
発行年月	西暦2011年3月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
八幡山城跡（はちまんやまじょうあと）	長崎県（ながさきけん） 松浦市（まつうらし） 今福町（いまぶくちょう）	42208	53-41	33° 20′ 48″	129° 46′ 13″	20090619 ～ 20100315	8,257	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡山城跡	城館跡	・旧石器 ・縄文 ・弥生 ・中世 ・近世	・切岸 ・土塁	・石器 ・弥生土器 ・土師質土器 ・瓦質土器 ・貿易陶磁器 ・近世陶磁器	中世山城跡

長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第６集

一般国道497号伊万里松浦道路建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅰ

八 幡 山 城 跡

平成23年（2011）３月発行

発行者　長崎県教育委員会
〒850-8570　長崎市江戸町２番13号
TEL095－824－1111

印刷所　株式会社　昭　和　堂
長崎県諫早市長野町1007-２
TEL0957－22－6000